

アジアのソーシャルワークにおける 仏教の可能性に関する総合的研究



平成 27 年度～令和元年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

研究成果報告書

令和 2 年 5 月

学校法人名 大乘淑徳学園

大 学 名 淑徳大学

研究組織名 アジア仏教社会福祉学術交流センター

研究代表者 藤森 雄介
(淑徳大学 アジア国際社会福祉研究所)

目次

・最終報告書発刊にむけて	3
第1部 本プロジェクトを振り返って 支援事業総括	5
・仏教ソーシャルワークの種蒔きと既存ソーシャルワークの相対化	6
・研究進捗状況報告書の概要	10
・アジアにおけるソーシャルワークと仏教に関するリサーチ （研究テーマ1）	15
・日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発 （研究テーマ2）	20
・外部評価員から	27
・「仏教ソーシャルワーク」への期待を込めて 大乗淑徳学園理事長 長谷川 匡俊	33
・顧問から	35
・プログラム研究員（国内外）	37
・アジア国際社会福祉研究所運営委員会	58
・年間活動記録	61
・「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」助成出版物一覧 発行順	69
第2部 国際学術フォーラムの記録（支援事業の成果と今後の展望）	73
※報告書（英文）の再掲	
※叢書プロジェクト、人材育成、大学基盤支援、ネットワーク構築、仏教ネットワーク、 プラットフォーム設立・運営等々を含む。	
付録	
国際フォーラムの案内	148
プラットフォームのチラシ等	153

最終報告書発刊にむけて

淑徳大学 学長 磯岡哲也



5年間にわたって展開された、研究プロジェクト名「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究」が一応のむすびを迎え、ここに最終報告書の発刊がなされることをお喜びいたします。

このプロジェクトの特徴は、一国を超えた国際性、本学の建学の精神の基盤である仏教の可能性、ソーシャルワークの現代的な専門性等々を追究した点にあると思います。すなわち、アジア地域において、ソーシャルワークの代替的機能を担ってきた寺院や僧職者の福祉的実践活動を事例として明らかにし、現代ソーシャルワークにおけるソーシャルキャピタルとしての伝統仏教の意義を探究するものであります。この意欲的試みは、西欧的ソーシャルワークに対比しうる「仏教ソーシャルワーク」の定義の構築とその体系化や、ソーシャルワークにおけるアジア諸国の伝統的文化や宗教の役割を明らかにすることを意味するものとなりました。

具体的なテーマは、「アジアにおけるソーシャルワークと仏教に関するリサーチ」と「日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発」の2点でしたが、5年間の成果は、本書にあるとおり意義深く、膨大なものとなっております。ことに前者においては、複数の言語で著された研究シリーズの書籍群の発刊がなされ、また多くの国際ワークショップを主催されたこと、後者においては、複数のアンケートや聞き取り調査を重ね、「仏教プラットフォーム」を構築しえたことなど枚挙にいとまが無いほどであります。

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所とそれにかかわってこられた皆さまの、この5年間のご尽力に敬意を表し、心からの感謝の念をお伝えいたします。また、この5年間は、本学の研究基盤形成のためのプロセスでありました。それゆえ、今後は研究の継続と、新たなる展開を期待するものであります。ことに、「仏教ソーシャルワーク」の理論的深化と教育面での展開に継続的発展的にかかわっていただければ幸いに存する次第です。

理論的深化の一例として、郷堀ヨゼフ先生の論考「仏教とソーシャルワークを考える時に—ソーシャルワークの文化的背景に関する考察—」（『淑徳大学アジア国際社会福祉研究所年報第2号』掲載）での、「政教分離や宗教離れを経験した西洋社会とアジアの多くの仏教国との違い」のモデルは、今後の研究の方向性に大きな影響を及ぼすように思われます。世俗化により私秘化した西洋のキリスト教と対比し、今なお社会の制度的・文化的基盤を有するアジア仏教との対比的考察を精緻化していくことは理論的深化に大いにかかわるものと考えられるでしょう。

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所がなした今回の成果に、重ねて敬意を表するとともに、それを支えて下さったさらに多くの研究者、実践家、インフォーマントの皆さまにこころからの御礼を申し上げる次第です。

第 1 部 本プロジェクトを振り返って

仏教ソーシャルワークの種蒔きと既存ソーシャルワークの相対化



アジア国際社会福祉研究所

所長 特任教授 秋元 樹

本事業は二つの目的をもった。一つは「ソーシャルワークにおける仏教の可能性」探求という研究課題の達成、もう一つはこれをおこなうことを通しての大学における戦略的研究基盤の形成である。事業を終えるにあたっての総括的自己評価を求められるとすれば、前者については期待以上の成果をあげた、後者については期待されてしかるべき程度の相当の成果はあげたとしよう。

<研究>

世界レベルでの研究史的意義は、(1)「仏教ソーシャルワーク」研究の種を播き、水をやり芽を出させ、アジアのいくつかの国に根を張らしはじめたこと、(2)この歩みを通して既存ソーシャルワーク(Western-rooted professional social work; WPSW)の地位の一神教絶対神的地位を問い、これを相対化し、その発展の第3ステージへの導きを示したことである。

研究プロジェクトは二つの相互に独立したサブプロジェクトとからなる。(A)「仏教を主たる宗教とするアジア諸国と地域(スリランカ、タイ、ミャンマー、ブータン、ベトナム、ラオス、カンボジア、中国、韓国、台湾、日本、プラスネパール)におけるソーシャルワークと仏教に関する調査研究」と(B)「日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の共同連携モデルの開発」である。

実際に行われたことは、これら諸国における「仏教ソーシャルワーク」実践の現況把握調査、研究所研究員間、参加各国メンバー(僧侶、大学研究者、NGOリーダー)間の随時のあるいは年1回開催の国際フォーラム、ワークショップ、専門家会議等における討議、これらを通しての概念化、理論化—WPSWと仏教の関係を整理する「仏教ソーシャルワーク」理解のためのABCモデル、「仏教ソーシャルワーク」の概念枠組み、作業定義の作成—そしてこれらを踏まえた上での各国、各社会の政治的、経済的、社会的コンテクス要因を投入した理論研究、調査研究、教育、実践への踏み込みまでである。スリランカワークショップでは理論的側面に絞った丸1日のセッションが設けられ、ベトナムでは寺院、企業、政府、NGOの協働モデルの調査を実施され、モンゴル、タイ、ベトナムでは国内大学間および/あるいは大学—仏教界(会)間の連携、コミュニケーションがはじまり、いくつかの国では大学における仏教ソーシャルワークのプログラム、カリキュラムが検討・実践されている。日本の上記(B)プロジェクトは実践面での導きのケースでもある。

さらにこれら活動は、アジア国際社会福祉研究所が取り組む本事業外の他の事業との連携・ここからのインプットによりより豊かなものとされている。たとえば、各国「仏教ソーシャルワーク」実践の現況把握調査は本プロジェクト以前の淑徳大学創立 50 周年・学祖長谷川良信 50 回忌記念フォーラム準備過程において「アジア 5 カ国の調査」としてスタートが切られていたものであり、また研究所研究員が研究代表者を務める「実践に基づく調査（PBR）：仏教ソーシャルワークカリキュラムデザイン」、イスラム教とソーシャルワークの研究等からの貢献も大きい。

これらの各活動の成果は英、日、各国語(一部)による国別「仏教ソーシャルワーク探求」叢書シリーズ、各会議報告書等として逐次発刊されている。特に叢書各号は、それぞれ他国読者を想定し、各国の概要、仏教ソーシャルワークの典型例(グッドプラクティス)とそれらの社会全体での広がり具合、加えてそれぞれの国の関心に基づくテーマの調査結果、研究・理論論文を含んでいる。仏教ソーシャルワークの今後の発展に向けて他国研究者、読者とその情報と関心をシェアしようとの趣旨である。

数カ国の叢書出版、国内プロジェクトの一部が本事業期間に終わっていないが、研究所の研究事業として継続、2020 年度には仕上がる。当初夢見られた仏教徒少数国の実態把握と欧米の文献研究のデータベース化は研究所の将来に残された宿題である。

以上すべての成果は、世界のソーシャルワークそのものの発展、その第 3 ステージへの導きへの貢献として捧げられる。まずは世界の主流「西洋に根ざした専門職ソーシャルワーク」の勇、IASSW、IFSW、ICSW 世界会議等においてぶつけられ、正面からの批判をうける機会を持つべきである。今年 6 月イタリア（リミニ）の IASSW、ICSW 世界大会において、南アフリカの脱植民地主義、ニュージーランドのインディジナイゼーション議論とともに現ソーシャルワークへの異議申し立てのシンポジウムが予定されている。（コロナ Virus で延期）

以上すべてあまりにプリミティヴだとの批判は容易に向けられようが、誰かが第一歩を踏み出さなければならない。このあとは誰かが引き継ぐほかあるまい。

<研究基盤形成>

研究基盤は 3 層において評価されよう。

(1)「ソーシャルワークにおける仏教の可能性」探求の研究の基盤形成は想定をこえる発展を見た。学内においては、本事業申請時の“研究プロジェクトの主体となる研究組織”「アジア仏教社会福祉学術交流センター」はアジア国際社会福祉研究所設立の下で発展的解消される予定ではあったが、アジアにおける仏教ソーシャルワークの研究の核としてそのまま研究所内に存続させることとなった。本プロジェクト初動期におけるセンターの活動と働きに対する海外カウンターパートからの高い評価と期待の故であった。今後もこの分野の研究の研究基盤としてその役割を果たすだろう。

学外においては、本研究内容に強い関心を持つ多くの真摯な研究者を国内外に見いだし、つながりができ、事業開始 3 年目にして参加 10 カ国メンバーを中心とした「アジア仏教ソーシャル

ワーク研究ネットワーク」が形成された。その後も諸会議その他活動の度毎にそこに名を残すメンバーは増え続けている。今後のアジアにおける仏教ソーシャルワーク研究の研究基盤の第1歩はできた。また上記の通りモンゴル、タイその他の国では学内学部、大学間、大学-仏教組織間その他の連携も生まれている。

いずれアジアあるいは世界規模の大きな仏教ソーシャルワーク国際会議開催を踏み台に、学会の如きものに成長する可能性も秘める。

(2) 本事業を担った研究所の、本事業の直接的テーマ(仏教とソーシャルワーク)を超えた研究一般についての研究基盤形成という意味でも本事業は大いなる貢献をした。本“研究プロジェクトの主体となる研究組織”として名を出した「アジア仏教社会福祉学術交流センター」の研究所化構想は本事業と関係なく描かれ進められていたものであるが、本事業の後押しがあって大きな第一歩を踏み出すことができた。

また、本事業の各プロセスにあつての諸活動(国際共前項のように同調査研究、国内外における国際会議・フォーラム・ワークショップ・専門家会議等の組織・開催等)、多様なカウンターパート(大学・学部からNGO、小グループ・個人等)との協働、国際ソーシャルワーク組織(IASSW、APASWE等)、国内社会福祉・ソーシャルワーク関係各学会・専門職団体との会議共催・後援を含む諸連携等々ロジスティック面でのノウハウの蓄積、人的組織的つながりの発展を中心とした研究所運営の経験獲得は大きい。研究所は他大学国際会議の開催協力要請を受けるまでになっている。

アジア仏教ソーシャルワーク分野の(前項)さらにより一般的に国際ソーシャルワークの(本項上記)研究基盤を大学内に作り上げつつあることは間違いない。本事業終了にあたって、本学法人・大学は仏教ソーシャルワークを内包する国際ソーシャルワークの研究基盤として本研究所を維持・発展することを決めた。専任研究員、事務室体制は数的には未だ十分ではないとしても最低の研究基盤はしかと形成された。

(3) 本一事業が研究科を柱とした大学全体の研究基盤形成までも直接期待するものではないことは自明であるが、にもかかわらず教育にのみ目が行きがちな今日の多くの私立大学にあつて、研究所設立という形であつても研究に再度目を配るきっかけとなるという意味では大学全体の研究基盤強化にも貢献しているとも言えよう。

アジア仏教ソーシャルワーク研究を継続前進させることができるのは世界広しといえども当面淑徳大学アジア国際社会福祉研究所(アジア仏教社会福祉学術交流センター)しかない。研究所にこの任務をになえる人的資源が充分にあるわけではない。ないからできないというのであればそれまでである。何もできまい。自らのところに資源がなければ外に求めればよい。幸いこのテーマの人的資源はアジアの諸国に豊かにある。ただし、その資源のある諸国の方にはこの大事業

の全体をオーガナイズし、モービライズし前に進めるリーダーシップの資源は今はない。淑徳大学に期待が寄せられる所以である。

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	大乘淑徳学園	大学名	淑徳大学
研究プロジェクト名	アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【目的・意義の概要】

本研究は、現在、ソーシャルワーク（以下、SW と略す）に関する定義や現状認識について、一国を超えた国際機関の俎上において新たな揺らぎや問題提起がなされる中、多くの社会問題に対応するソーシャルワーカーが求められる一方で、現在も「専門職」としての確立が十分とは言えない日本を含むアジア地域において、SW の代替的な機能を担ってきた寺院や僧職者の福祉的実践活動を事例として検討することを通じて、SW における「価値」や「社会資源」としての仏教の可能性の探究を主たる目的としている。その成果は、これまで行われてこなかった「仏教 SW」の体系化につながるものであり、SW とは異なる価値や方法論を、日本を含めたアジア諸国に提示することになると同時に、本来重視されるべき、各国の文化・価値観・歴史・習俗・習慣やその背景に存在する宗教を尊重した SW のあり方やその本質について分析や議論を行っていく、これまでにない切り口でアプローチが行える研究拠点の形成が可能になると考える。

【計画の概要】

当研究プロジェクトは「アジアにおけるソーシャルワークと仏教に関するリサーチ」（研究テーマ 1）と「日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発」（研究テーマ 2）の 2 つの研究テーマを軸に推進していく。

研究テーマ 1 では、これまでほとんど体系的に実施されてこなかった、アジア諸国における SW の展開状況と、その代替機能を担ってきたと考えられる仏教（宗教）の福祉的実践活動に関するリサーチ（1-1）を行い、各国の現状及び課題の明確化を図る。それと並行して、調査を通じて信頼関係を構築した各国の研究者及び実践者を招聘して国際ワークショップを実施し、議論を深めていく事を通じて、アジア地域に共有できる「仏教 SW」の体系化を試みていく。これまで体系的に実施されてこなかったアジア諸国におけるソーシャルワークの展開状況と、その代替機能を担ってきたと考えられる仏教（宗教）の福祉的実践活動に関するリサーチ（1-2）を行い、各国の現状及び課題の把握を図る。

研究テーマ 2 では、東日本大震災に際して「日本仏教」が担った福祉的実践活動を主たる事例として取り上げて、アンケート調査や現地ヒアリング等を行い、その分析から現状や課題の明確化を図り、その課題解決・改善のプロセスを通じて、これからの地域社会における寺院の在り方に関するモデルを提示していく。また同時に、仏教をキーワードに日常的に情報共有を行ってい

く「仏教プラットフォーム」の構築と運用を行っていくことで、日本における仏教SWの実践モデルをアジア諸国の仏教関係団体及び政府機関に示していく。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

(平成 27 年)

・研究テーマ1については、初年度の国際ワークショップの位置づけとして、10月9・10日の両日、「アジアのSWにおける仏教の役割」を共通テーマとして淑徳大学創立50周年記念国際学術フォーラム(日本仏教社会福祉学会第50回大会共催)を開催した。これまで本研究テーマに関連した交流のある、ベトナム・スリランカ・ネパールの研究者、実践者をシンポジストとして招聘し、9日は「アジアのSWにおける仏教の役割:現状を中心に」、10日は「アジアのSWにおける仏教の役割:未来へ向けて」の論題でディスカッションを行うとともに、今後5年間でどのような研究を行っていくのか等について共通認識を深めた。またその成果を、1月に報告書として発行した。

また1月から3月の間にスリランカ・ラオス・モンゴル・ミャンマー・中国の各国を訪問し、各国の関係者と、仏教ソーシャルワークの現状を把握するために、視察・情報や資料収集等を行った。

・研究テーマ2については、東日本国内における仏教ソーシャルワークに関する調査研究の確認を行い、本研究事業に活かす事のできるものを整理した。

これにより、『東日本大震災における日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査一報告書一』、『被災地寺院の教訓を今後の寺院防災に活かす聞き取り票(アンケート調査) 報告書』、『平成23年3月11日 東日本大震災における仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査報告書』を発行した。

仏教プラットフォーム関連においては、システム構築に向けた具体的な打合せを開始するとともに、このサイトを活用して頂く日本仏教各宗派関係者に向けた情報交換の機会を得る等、広報的活動を行った。これにより、「災害支援情報交換会」(全日本仏教会主催、平成27年11月27日、明照会館4階第1会議室)では藤森が講師として、「仏教プラットフォーム」を説明した。また、同会の内容を、『全日本仏教会「災害支援情報交換会」報告書』として発行した。

(平成 28 年)

・研究テーマ1については、6月から1月の間に、カンボジア・韓国・ネパール・ブータン・タイ・ミャンマー・モンゴル・ロシア・ラオス・ベトナム等を訪問し、仏教ソーシャルワークの現状を把握するために関係者と視察・情報や資料収集等を行った。これにより①社会事業大学と共同(共催)で行った環太平洋セミナーの報告書(10~11月)を作成、②社会事業大学と共同で「イスラムとソーシャルワーク」をテーマとする環太平洋セミナー(12-1月)、③3月22-23日の2日間に「仏教ソーシャルワーク アジアの仏教は人びとの生活の問題にどうはた

らくか」について、淑徳大学国際学術フォーラムのフォーラムとして千葉・三井ガーデンホテル千葉にて開催の成果が得られた。

・研究テーマ2については、東日本大震災被災自治体の社会福祉協議会を対象としたアンケート調査「東日本大震災を契機とした地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社など)との連携に関する調査」(「被災地社協調査」)を、岩手県・宮城県・福島県の沿岸地域を中心に郵送回収方法によりアンケート調査を開始した。これについては、回収時にヒアリング調査も合わせて行う為、平成29年7月までに主たる対象の調査を完了し、その後、日本仏教社会福祉学会での研究発表、調査報告書の発行を順次行っていく計画を立てた。

「仏教プラットフォーム」については、システム構築の細部をつめ、平成29年3月にウェブ上に公開することができた。

(平成29年)

・研究テーマ1については、スリランカ・アフリカ(ザンビア)・インドネシア・ベトナム・中国・ラオス・カナダ・アメリカ等を訪問して、各国の関係者と、仏教ソーシャルワークの現状を把握するための、視察・情報や資料収集等を行った。

また平成28年3月に開催したフォーラムのテープ起こし原稿と、その他の資料を確認しながら、9月に英文報告書を発行し11月に和文報告書を作成した。英文報告書については、第24回アジア太平洋地域ソーシャルワーク合同会議(2017 Asia-Pacific Joint Regional Social Work Conference: Challenges and Responsibilities: Innovative Social Work and Sustainable Development)」(平成29年9月26~29日、中国・深圳)にて参加者に配布した。また、仏教ソーシャルワークの作業定義や研究枠組みに関するこれまでの議論をまとめ、仏教SWの体系化に向けて『西洋生まれ専門職ソーシャルワークからの仏教ソーシャルワークへ』のほか、モンゴルとベトナムの研究成果を書籍として出版した。

・研究テーマ2については、昨年度から実施してきた東日本大震災被災自治体の社会福祉協議会を対象としたアンケート調査「東日本大震災を契機とした地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社など)との連携に関する調査」(「被災地社協調査」)について、福島県16社協、宮城県15社協、岩手県12社協、他に参考ヒアリングとして後方支援を行った3社協(各県1ヶ所)、3県社協及び全社協の担当部の計50社協のアンケート調査及びヒアリングを完了した。

また、9月10日に開催された日本仏教社会福祉学会第52回大会において、「東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査 中間報告 1及び2」として研究発表を行った(発表者は、藤森雄介、渡邊義昭、共同研究者は、大正大学・鷲見宗信、浄土宗総合研究所・宮坂直樹、宮城県女川町社会福祉協議会・須田めぐみ、全日本仏教青年会・中村悟眞)。

「仏教プラットフォーム」の運営については、ウェブでのサイト開設後、「寺院と災害支援を

考えるセミナー」(5月29日、全日本仏教会主催)にて、藤森が講師として本サイトの機能や役割等を説明、浄土宗+ともいき財団が助成を行った諸団体に案内チラシを送付、日本仏教社会福祉学会第52回大会(9月9・10日)の際及び公益財団法人全日本仏教会財団創立60周年記念式典・第44回全日本仏教徒会議福島大会(10月13,14日)の際に参加者に案内チラシを配布、「浄土宗寺院運営実務講座(10月20日)にて、藤森が講師として参加の際に本サイトを紹介、といった広報活動を行った。

(平成30年)

研究テーマ2については、昨年度末に調査を完了している平成28年11月より行ってきた東日本大震災被災自治体の社会福祉協議会を対象としたアンケート調査「東日本大震災を契機とした地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社など)との連携に関する調査」(「被災地社協調査」)の一次集計結果を踏まえて、本年度は関心を持って頂ける方々へその成果を積極的に伝えていく年度と捉え、以下の研究発表等を行った。

・9月9日、大谷大学で行われた、日本宗教学会第77回学術大会にて、パネル「宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ」(稲場圭信大阪大学大学院教授代表)の発題者の一人として「東日本大震災被災地から窺える地域における寺院・僧侶への期待」(発表者:藤森雄介)と題する発表を行い、研究所の研究成果の一部を報告。

・9月14日、佛教大学で行われた、浄土宗総合学術大会にて、口頭発表「東日本大震災関連調査から窺える地域社会における寺院、僧侶の在り方」(発表者:藤森雄介)を行い、研究成果の一部を報告した。

・9月30日、身延山大学で行われた、日本仏教社会福祉学会第53回学術大会にて、「社会福祉協議会と「宗教系ボランティア団体・宗教施設」との連携について～東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教施設・神社等)との連携に関するアンケート調査～」(発表者:○渡邊義昭、藤森雄介、宮坂直樹、大正大学・鷲見宗信、宮城県女川町社会福祉協議会・須田めぐみ、全日本仏教青年会、中村悟眞)を行い、研究成果の一部を報告した。

また、平成31年2月4日、浄土宗総合研究所、大阪大学稲場研究室との合同研修会を開催した。内容は、「災害支援アドバイザー」に関連するものとして、全国社会福祉協議会の園崎秀治氏より「災害ボランティアと社会福祉協議会」と題する講演を頂いた後、参加者による議論を行った。

なお、本調査等を通じて把握できた地域社会の中で継続的に行われている寺院、僧侶の社会的実践活動の「モデル事例」については、当初10か所程度を予定していたが、結果として5か所程度に絞り込んで継続的な調査を行った。

「仏教プラットフォーム」の運営については、全日本仏教会前事務総長の久喜和裕氏にプログラム研究員として加わってもらい、天台宗、高野山真言宗、真言宗智山派、曹洞宗、臨済宗妙心寺派、日蓮宗、浄土真宗本願寺派、浄土真宗大谷派の各宗の宗務庁を訪問して実務担当者に直接お会いして、また、日本臨床宗教師会や全日本仏教青年会の会合に参加させて頂く形で、「仏教プラットフォーム」の趣旨説明や参加協力等の広報活動を展開した。

(令和 1 年)

研究テーマ 2 については、最終年度として、まずアンケート調査等については、東日本大震災被災自治体の社会福祉協議会を対象としたアンケート調査「東日本大震災を契機とした地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社など)との連携に関する調査」(「被災地社協調査」)についての報告書を、令和 2 年 3 月 11 日付で、刊行することができた。

また、地域社会における寺院、僧侶等の実践のモデル事例については、9 月 11 日に行われた、日本仏教社会福祉学会第 54 回学術大会にて、「東日本大震災を契機とした、寺院の社会的活動について～岩手県釜石市で開催されている韋駄天競走における地域連携の事例から～」(○渡邊義昭、藤森雄介)の研究発表を行った。その後、同地区及び隣接の大槌町寺院も含めて大震災発生後に結成された「釜石仏教会」に関わる諸活動について、今後も継続的な調査・研究を行っていく足掛かりも得ることができた。

更に、昨年度に引き続いて 6 月 24 日に、浄土宗総合研究所、大阪大学稲場研究室との第 2 回合同研修会を開催した。内容は、「災害支援アドバイザー」に関連するものとして、曹洞宗僧侶の米沢智秀氏より「ボランティア活動から見えた寺院・僧侶の可能性」と題する講演を頂いた後、参加者による議論を行った。共通に関心のあるテーマについて、他の研究機関との協働事業を国内テーマでも実施するという良い経験を得ることができた。

なお、想定外の出来事ではあるが、9 月 9 日未明にかけて発生した千葉県における台風 15 号の被災地域及び被災寺院に対して、淑徳大学を介して、滋賀県浄土宗青年会や長野県諏訪市浄土宗寺院有志の方々より「米一升運動」の一環として支援の申し出を頂き、結果、令和 2 年 8・9 日、千葉県富津市金谷の本覚寺での炊き出し支援と周辺寺院への米一升の配布事業として結実する事ができた。これは、図らずも本研究プロジェクトが目指していた「これからの地域社会における寺院の在り方に関するモデルを提示していく」という事例そのものであり、「支援事業」最終年度という事もあって本活動の詳細な検証は次年度以降の課題となるが、本研究テーマが次年度以降も継続に耐え得るものとして評価できる実践であったと考えている。

「仏教プラットフォーム」の運営については、結局、登録 4 件、承認済(手続中)22 件で残念ながら登録は足踏み状態のまま年度末を迎える事となった。ただこの間、例えば各宗派教団の成果から、7 月 31 日に改めて日蓮宗宗務院より詳細な説明を求められて 7 月 31 日に訪問し、その結果、日蓮宗の関連団体例会の席にお招き頂いて説明の機会を得る等(令和 2 年 1 月 10 日)、関心を持っていただく手ごたえはあった。その点も踏まえ、宗派教団の理解を進める為、加盟団体である浄土宗からの推薦も頂いて、全日本仏教会の賛助会員に淑徳大学アジア国際社会福祉研究所として全日本仏教会の賛助会員として加盟も果たしているため、次年度以降も粘り強く浸透を図っていきたいと考えている。

アジアにおけるソーシャルワークと仏教に関するリサーチ (研究テーマ 1)

ABC モデルから仏教ソーシャルワーク定義へ

～仏教ソーシャルワーク活動に関する

海外リサーチの 5 年間を振り返る～

郷堀ヨゼフ

淑徳大学

アジア国際社会福祉研究所 准教授

本稿では、研究対象や方法論をはじめとする海外リサーチを紹介し、ABC モデル及び仏教ソーシャルワークの定義に重点を置いた、5 年間の研究活動の総括を行う。

数年前、淑徳大学は、スリランカの僧侶を対象としたソーシャルワーク教育プログラムの開発への協力を依頼された。そこで、ソーシャルワークの基本概念や方法と理論について紹介したところ、スリランカの僧侶の一人が立ち上がり「何が新しいか？このようなことを、私たちスリランカの僧侶は 2500 年も前からずっとやってきたのだ」と発言した。この発言は、淑徳大学の研究チームに大きな刺激を与え、仏教寺院や仏僧による活動が、分野として、まだ研究されず、開拓されていないことに改めて気づいた。この瞬間が、本研究の出発点であるといっても過言ではない。

研究対象と研究目的

上記の動機により、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所では、「仏教ソーシャルワークの探求」という研究プロジェクトを立ち上げ、アジア各地域の仏僧と仏教寺院によるソーシャルワークやその他社会活動

に着眼した。対象は、主にアジアの仏教国であるブータン、カンボジア、中国、ラオス、モンゴル、ミャンマー、ネパール、韓国、スリランカ、台湾、タイ、そしてベトナムの12の国と地域になる。

研究目的はとてもシンプルである。社会参画仏教¹に関する一部の研究を除いて、この分野において先行研究が皆無に等しいことを踏まえて、ひとまず、

- 1) アジアの仏教国における仏教ソーシャルワーク活動の現状を明らかにし、
- 2) 仏教ソーシャルワークを概念化、体系化するために必要なデータを収集し、
- 3) 1)と2)で挙げた研究成果を、研究者同士のみならず、ソーシャルワークの学生にとって教科書、あるいは参考書となるような仏教ソーシャルワークの研究叢書を出版することを、

主な目的とした。

本研究は、国際共同研究として学際的なアプローチを用いて、特定の宗教や宗派を超えた形で実施してきた。当研究所のチームが現地へ赴きすべての調査活動を自ら担うという形を取らず、現地のカウンターパートと共に共同研究として取り組んできた点は、この仏教ソーシャルワーク探求を通して、新たな研究ネットワーク、新たな研究基盤を形成するという、当プロジェクトのもうひとつの特徴でもある。各国の共同研究者と共に、現地調査のみならず、これまで、仏教ソーシャルワークに関する情報とデータを整理し体系化するためにワークショップやフォーラムなども行ってきた。

主な研究成果

本研究を通して、宗教施設としてだけではなく、多くのソーシャルワーク活動を展開する場としての仏教寺院の役割・機能について確認できた。多くのケースでは、寺院と仏僧のみならず、仏教徒や仏教系NGOもこのような活動に関与している。西欧や北米で展開されているものに類似した、子ども、高齢者、低所得者を対象とした多くの事例について、本研究で確認できた。同時に、教育プログラム、慢性委疾患患者のための施設、リハビリテーションセンターのほか、農業支援や道路建設、または寄付金・資金集めといった活動も確認され、教育、保健医療、生活支援等の実に多領域にわたる取り組みの実態が明らかになった。

上記のような活動を、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義(2014年)と照らし合わせて検討した結果、下記の相違点を抽出できた。

¹ 英文では Engaged Buddhism、または Socially Engaged Buddhism.

- 1) 対象 人々の生活環境の改善・向上を最終的な目標としながらも、植林や自然保護等を含む活動もみられ、必ずしも人間のみをターゲットにするものではない。
- 2) ソーシャルワーカー及び専門職スタンダード
ソーシャルワーカー(ソーシャルワーク専門職)として教育や訓練を受けている実践者がほとんどおらず、西洋生まれのソーシャルワーク専門職に類似したスタンダードやガイドラインに基づく事例も少ない。
- 3) ソーシャルワーク教育
- 4) 根底にある理論や概念
- 5) 方法
- 6) 活動領域 上述した保健医療やインフラ整備などの多領域活動を確認。

これらの相違点を踏まえて、仏教ソーシャルワークは、西洋生まれのソーシャルワーク専門職と比較して、より広いコンテキストで運用されているといえる。さらに、多くの共通点があるとはいえ、仏教ソーシャルワークは西洋生まれのソーシャルワーク専門職とは異なる形で形成されてきた。今回、抽出された相違点と共通点は、仏教ソーシャルワークの定義及びフレームワークに関する議論を深めていく上で不可欠である。

調査研究を終え、すでに成果物を学術図書として発行したのは、モンゴル、ベトナム、ラオス、タイ、スリランカである。または、仏教とソーシャルワーク、または宗教とソーシャルワークの関係性に多方面から挑んだ北米研究者へのインタビュー調査も終了しており、学術図書も出版済みである。その他の対象国は、執筆中、または調査中であるが、今後の課題として、東アジア地域(中国、韓国、台湾)、ヒマラヤ麓地域(ブータン、ネパール)と東南アジア地域(カンボジアとミャンマー)の報告をまとめ、3冊の学術図書を発行し研究叢書を完成させたいと考えている。これらの成果を踏まえて、仏教とソーシャルワークの探求への貢献のほか、ソーシャルワークそのものについてもっと広い、国際的なコンテキストで議論を深める手助けとなる。

ABC モデル

この ABC モデルは(図 1 を参照)、西洋生まれのソーシャルワーク、土着化²されたソーシャルワーク、そして土着³のソーシャルワークの3パターンを意図的に区別するためのツールとして、秋元に提唱された

² 英文では Indigenized と表現。現地化。現地の社会と生活文化にあわせて調整・修正されたもの。

³ 英文では Indigenous と表現。その土地・民族に受け継がれ、共有されてきた形。

(Akimoto, 2017)。理論を展開していく上で、A,B,Cの全3モデルでの実践者を同じ仏僧と仮定する。昨今、多くの事例では、西洋生まれのモデルに基づいて展開されている。アジアにある寺院を活動の場としながらも、西洋生まれのソーシャルワークと同様のアプローチや方法を用いる事例を、ここでAモデルと呼ぶことにしよう。しかし、このAモデルは、西洋生まれのソーシャルワークの一種のコピーであるがゆえに、アジア地域ではうまく機能しない場合が多々ある。そのため、対象地域の社会規範や文化的背景にあわせて、方法を修正したりして土着化を行う。これらをBモデルと称する。ところが、Cモデルも存在する。その土地や文化の中で形成され、長年にわたって受け継がれてきた、その土地や文化のオリジナルな、つまり土着(インディゲナス)の形であり、現地の社会と文化を反映しながら、西洋生まれのソーシャルワークとは異なる価値観や世界観などに基づく。コアとなる価値とその解釈がどれほど異なり得ることについては別途述べている(Gohori, 2019)。さらに、ソーシャルワークの歴史的な展開を追跡していくことによって、このABCモデルを説明でき、裏付けることができよう(Gohori, 2017)。

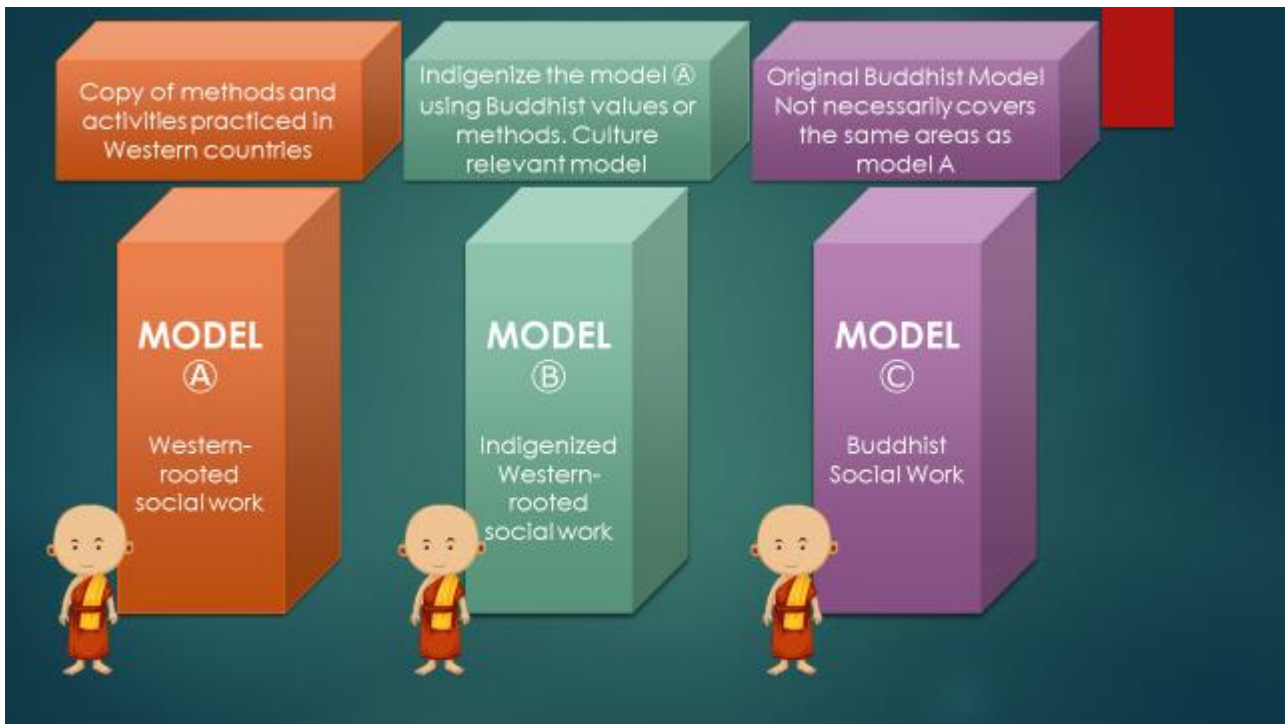


図1 ABCモデル

仏教ソーシャルワークの次のステップ



本稿では仏教ソーシャルワーク探求の概要と共に西洋生まれのソーシャルワークとの共通点・相違点に触れてきた。更なる展開としてすでに始めている「西洋生まれのソーシャルワークにはできず、仏教ソーシャルワークにはできる」という国際比較研究を通して、

アジアの仏教国における両アプローチの違いをベースに仏教ソーシャルワークのエッセンスを抽出していきたいと考えている。そのほか、文化的側面についてもっと注意深く検討する必要がある。なぜならば、同じ概念や定義などが異なる文化的背景において異なる解釈、異なる理解される可能性が充分にあり、コアな価値もまたその民族・その文化によって異なる場合が多く、異なる環境(地域、文化、民族)におけるソーシャルワークの実践と理論の土台を成すパラダイムそのものについて、今後、もっと検討すべきである。これらCモデルをさらに明確な形で抽出するプロセスを助長するであろう(Gohori, 2019)。また、本報告に寄稿してくれたカウンターパートの数名が触れた、2017年にハノイで開かれた専門家会議で採択された仏教ソーシャルワークの作業定義だが、もっと多くのソーシャルワーク、仏教等の両領域の研究者、教育者、実践者と共有しこれらをさらに磨く必要がある。次の課題は専門職、あるいは専門性である。ソーシャルワークとは何かというもっとも基本的な問いへと導く出す議論になると思う。

引用文献

- Akimoto, T. (2017) The ABC model. In Gohori, J. (ed) *From The Western-rooted Professional Social Work to the Buddhist Social Work*. Tokyo, Japan: Gakubunsha.
- Gohori, J. (2017) The 5000 years old story In Gohori, J. (ed) *From The Western-rooted Professional Social Work to the Buddhist Social Work*. Tokyo, Japan: Gakubunsha.
- Gohori, J. (2018) Introduction of the International Joint Research Project on Buddhist Social Work. In Adilbish, Demberel (eds.) *Report on the international joint symposium on the development of Buddhist social work in Asia*. Ulaanbaatar, Mongolia: National University of Mongolia.
- Gohori, J. (2019) Religion and social work. In Tran Nhan Tong Institute (eds) In *The Cultural and Philosophical Uniqueness of Tran Nhan Tong and Truc Lam Buddhist Sect*. Hanoi, Vietnam: Vietnam National University Press, pp.107-114.

日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発（研究テーマ2）

東日本大震災を契機とした、地域社会における寺院・僧侶の社会的実践活動から、日本のソーシャルワークにおける仏教の可能性を考える

～関連調査と事例から、「国内開発」の5年間を振り返る～

藤森雄介

淑徳大学

アジア国際社会福祉研究所 教授

本稿では、東日本大震災に際して我が国の仏教、寺院、僧侶がどのような取組み、役割を担ったのかに関する調査から、その受け手としての地域社会(社会福祉協議会)への調査、またこれらを契機とした日常における寺院・僧侶の社会的実践活動事例の調査等から、5年間の研究活動の総括を行う。

2011年3月11日の東日本大震災が我が国に未曾有の被害をもたらし、以降の日本社会の在り方を大きく変えた事は、全ての日本人に異論のないところであろう。

発災当時、日本仏教社会福祉学会(以下、本学会という)で事務局長の職務を担っていた筆者は、必然として、「このような非常事態の中で、本学会は何が出来るのか、何をなすべきなのか」を考える立場にあった。一方被災地では、幸い倒壊を免れた寺院に被災者が避難民として殺到する中で、自身も被災者である僧侶や寺族の方々が彼らを受け入れて必死の対応を行っていた。また、宗派教団は独自のネットワークを活かした義援金や物資の支援を行い、全国の志ある僧侶や仏教系の各種団体は、何かに突き動かされるように初動から直接支援の現場に入っていた。

「まずは、これらの活動の記録を後世の検証に耐えうるようにしっかりと残していく事」、仏教と社会福祉が切り結ぶ実践や思想を研究対象としてその理論化や体系化を担ってきた本学会が責任を持って行うべき事として着手した実態調査を端緒として、本研究は構想され、改めて「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性」の1つとしての日本という視点を持って、5年間の研究が行われる事となった。

研究対象と研究目的

研究テーマ1の「研究対象」が「仏教を主たる宗教とするアジア諸国」と複数国である事に対して、本研究の対象は「日本」であり、「日本仏教」である。そして、先述の通り、問題の所在のを考える際の出発点は、「東日本大震災」であった。

従って、当初の研究計画では、その目的として「東日本大震災に際して「日本仏教」が担った福祉的実践活動を主たる事例として取り上げて、アンケート調査や現地ヒアリング等を行い、その分析から現状や課題の明確化を図り、その課題解決・改善のプロセスを通じて、これからの地域社会における寺院の在り方に関するモデルを提示していく。また同時に、仏教をキーワードに日常的に情報共有を行っていく「仏教プラットフォーム」の構築と運用を行っていくことで、日本における仏教 SW の実践モデルをアジア諸国の仏教関係団体及び政府機関に示していく」と述べ、基本的にこの目的に沿って5年間の研究活動が進められた。

3種類のアンケート調査の刊行

本研究の実質的な出発点は、2011年4月に本学会内に組織された、「東日本大震災対応プロジェクト委員会」での取り組みである。

筆者は、本プロジェクトの責任者としてその実施を任されていたが、具体的な事業内容を検討する中で、宗派教団や寺院、仏教者がどういった活動を行ったのかを改めて確認し記録化する必要性を痛感し、そのためのアンケート調査を行う事となったのである。

調査対象を把握している全日本仏教会(以下、全日仏という)に協力を要請して快諾を頂いた結果、まず本学会と全日仏の2団体の協働調査として、全日仏に加盟している宗派教団に対して、東日本大震災における日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査を2012年1月に実施した。

続いて、「さまざまな災害に寺院はどう備えるのか」といった点に関心をもっていた、仏教 NGO ネットワーク(以下、BNNという)も調査に加わり、3団体の協働調査として、岩手県、宮城県、福島県の3県の被災地域において避難所等の役割を担った各寺院に対して、被災寺院の教訓を今後の寺院防災に活かす聞き取り(アンケート)調査を2012年の7月に、また、被災地において直接的な支援を含めて様々な活動を展開した仏教系の各種団体に対して、東日本大震災における仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査を同じく3団体の協働調査として2012年10月にそれぞれ実施した。

3種類の調査の概要は、以下の通りである。

調査及び実施団体	実施時期	回答数/依頼数	回答率
A 日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査	2012年1月、調査票発送	42/59件	71.19%
B 被災地寺院の教訓を今後の寺院防災に活かす聞き取り票	2012年7月、調査票発送	34/93件	36.56%
C 仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査	2012年10月、調査票発送	65/161件	40.37%

(※回答数及び回答率については、2015年6月現在の数値)

本調査結果の集計、分析の課程でより発展的に本研究テーマが着想され、幸い、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けることで、当初はweb上でのデータ公開のみの予定であった本調査の報告を、2016年度に刊行する事ができた。

また、自由記述部分を活用して、齋藤鉄也プログラム研究員にテキストマイニングを用いたインタビュー分析を試みてもらったなど、新たな視点での研究にも着手することができた。

「東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査」の計画・実施・分析

東日本大震災に際して、宗派教団、被災地寺院、仏教系直接支援団体とそれぞれの立場からではあるが、いわゆる「日本仏教」が担えた役割や課題はある程度明らかにする事ができたが、一方で、支援を受けた側の地域社会は、仏教(又は宗教)というこれまで限られた条件の下でしか接点のなかった組織や団体からの支援をどう受け止めたのであろうか、という新たな問いを生ずる事となった。つまり、双方の立場からの評価や課題を明らかにしてこそ、より現実的な提案をすることができるのではないかという、次の調査の必要性を認識する事となったのである。

そこで改めて災害時における地域住民と宗教施設の連携の現状や可能性について、東日本大震災当時の状況把握を手がかりとして、当時、災害ボランティアセンターを開設して被災者支援の窓口となった岩手県・宮城県・福島県の沿岸地域の市町村の全社会福祉協議会を対象とした調査、「東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査」(以下、「社協調査」という)を行う事となった。

この「社協調査」は、2017年度より計画の立案を進めたが、当初の段階から、調査対象の1つでもある宮城県女川町社会福祉協議会の須田めぐみ氏にも協力頂く事で、実質的なプリテストも行うことが出来、より具体的な質問項目に整える事ができた。

ただ、計画立案の課程で、この「社協調査」は単に郵送回収を行って返送されたものだけを集計する量的なアンケート調査ではなく、「できるだけ現地に足を運んで直接関係者に当時の状況等も聞く、質的な調査の機会にもしよう」という方法をとった結果、①電話にて担当者に直接調査の主旨を説明して理解して頂く、②調査票を事前に郵送、③改めて訪問日を確認して直接回収に出向き、合わせて平均 90 分程度、調査の質問項目に沿って当時の状況等のお話をうかがう聞き取りの要素も含めた、いわゆる郵送回収調査法を取ったため、以下の通り対象とした社会福祉協議会の回収率は 100%となった。

○対象社会福祉協議会（回答数は、平成 30（2018）年 3 月確定）

対象となる地域は衛藤英達『東日本大震災被災市町村のすがた』（2012）による、被災した岩手県 12 市町村、宮城県 15 市町村、福島県 15 市町村の合計 42 市町村の社会福祉協議会を選定した。

しかし、原発事故による避難指示区域に該当する 10 の市町村については調査を実施したが、発災後全住民が他の市町村に避難したため全体の集計には反映していない。

また、対象となる岩手・宮城・福島の各県社会福祉協議会及び後方支援を実施した 4 か所の市町村社会福祉協議会についてもインタビューを実施した。

○調査対象の社会福祉協議会

・被災地域の社会福祉協議会

岩手県	12 社会福祉協議会	回答数	12 社会福祉協議会 (100.0%)
宮城県	15 社会福祉協議会	回答数	15 社会福祉協議会 (100.0%)
福島県	5 社会福祉協議会 ^(注2)	回答数	5 社会福祉協議会 (100.0%)
合計	32 社会福祉協議会	回答数	32 社会福祉協議会 (100.0%)

・避難指示区域の社会福祉協議会

福島県避難指示区域

10 社会福祉協議会 ^(注3)	回答数	10 社会福祉協議会 (100.0%)
----------------------------	-----	---------------------

・被災市町村の後方支援を行っていた主な市町村の社会福祉協議会

4 社会福祉協議会 ^(注4)	回答数	4 社会福祉協議会 (100.0%)
---------------------------	-----	--------------------

注 2：福島県の 5 つの社会福祉協議会は沿岸部で調査可能な市町村のみ実施。

注3：原発災害により避難指示区域に該当していた市町村。

注4：後方支援など罹災者を受け入れていた社会福祉協議会。

この「社協調査」で得られたものは単に数量的な成果に止まらず、実際の回収や聞き取りに当たった筆者と渡邊義昭プログラム研究員の両名とも、改めて被災当時の現地の状況を追体験できたという意味でも非常に意義のある事であったが、広範囲の対象地域を先方とアポイントをとって訪問するという手法は当初考えていた以上に時間を要するものであり、アンケートの回収と聞き取りだけで足かけ3年かかってしまったという反省も残った。

なお、「社協調査」の数量的な集計結果を中心にまとめた報告書は、2020年3月11日に刊行する事ができたが、聞き取り内容を踏まえたより掘り下げた分析とその成果の公開は、今後の課題である。

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」の構築と運営

先の「3種類のアンケート調査」の実施と分析の課程で明らかとなった課題の一つとして、例えば「仏教」をキーワードに、宗派教団と言った限定されたコミュニティーを越えて、出来るだけ社会にも開かれた領域で、日常的に情報共有できる場を作る必要を認識した。なぜなら「災害等の非常時に出来ることは日常の延長線上にしかなく、だとするならば、その日常の中で日頃からどれだけ情報(関係性)の共有ができてきているのかが、非常時における迅速な対応に現れてくる」事を被災の現場や集計結果の分析等から痛感していたからである。

このような課題の解決策として、本研究計画に、web上に「仏教社会的実践活動プラットフォーム(仏教プラットフォーム)」(以下、BPHという)を構築する事を盛り込んでいた。

BPHについては、2017年度からの試験的稼働を経て、現在、web上に構築、運営に至っている(<https://bukkyoplatform.com/>)。ただし、本来このBPHは広く仏教界に認知して頂き、全国で(必ずしも「社会福祉活動」という認識がなくとも)社会的実践活動を行っている寺院、僧侶、又は仏教系の直接活動団体に登録・活用して頂く、言い換えれば、仏教に関わりのある方々に育てていただく事で生きていくシステムであり、その意味では多くの課題を残す事となった。

この5年間の期間の中で、BPHの構築にあたっての意義や有用性については一定程度理解して頂き、また後半は前全日仏事務総長の久喜氏にプログラム研究員に就任頂いて主要な伝統仏教教団の担当部局にも直接訪問させて頂く事で活用に向けた前向きなお答えを頂く事も出来たが、2020年度末時点で、十分な登録には至っていないのが、現状である。

この、成果を十分に上げられなかった点については真摯に反省し、せつかく構築できた研究基盤としてのBPHをこれからどのように活かしていくのかを検討していきたいと考えている。

事例の掘り起こしと収集

東日本大震災を契機として始められたり、またその関連の中で評価できる、地域社会における寺院・僧侶の社会的実践活動は、非常に多くの情報を得ることができた。その中が、被災地への直接支援活動を通じてお話を聞かせて頂いたり、縁あってヒアリング調査を行わせて頂いたもの、以下の事例をあげることができる。

- ・東日本大震災における、浄土宗の東北3県の復興支援事務所での取り組み
- ・岩手県大槌町曹洞宗吉祥寺の東日本大震災時の対応と平時の取り組み
- ・岩手県大槌町浄土宗大念寺の東日本大震災時の対応と平時の子育て支援活動
- ・岩手県釜石市日蓮宗仙寿院の東日本大震災時の対応と「韋駄天競走」の実施
- ・岩手県「釜石仏教会」の設立と展開について
- ・岩手県陸前高田市浄土宗浄土寺の「秋のお念仏の集い」取り組み
- ・宮城県気仙沼市浄土宗浄念寺の「お花見の会」の取り組み
- ・福島県いわき市浄土宗「浜〇カフェ」の取り組み
- ・福島県いわき市浄土宗「ふくすまっこスマイルキャンプ」の取り組み
- ・熊本県浄土宗青年会の米一升運動の取り組み
- ・福岡県筑後市浄土宗鐘林院の米一升運動の取り組み
- ・浄土宗大本山増上寺、善道寺の「お福分け」事業の取り組み

もちろん、これらの活動の全てが「仏教社会福祉」そのものというわけでは必ずしもない(また、活動を行っている方々も、「社会福祉事業」を行っているという自覚があるわけではない)が、これらの諸活動を、「仏教社会福祉」あるいは「仏教ソーシャルワーク」の視点でどのように評価するのは、我々に課せられた課題であると自覚している。

これらの調査に主に関わったのは、筆者の他に渡邊義昭プログラム研究員、宮坂直樹プログラム研究員の3名であるが、今後、直接支援に関わっている方々にもご協力頂いて、これらの取り組みを「事例集」のような形でまとめていきたいと考えている。

なお、「岩手県釜石市日蓮宗仙寿院の「韋駄天競走」の実施」については、日本における仏教ソーシャルワークの事例の1つとして、12月の国際シンポジウムで報告させて頂いている。

次のステップに向けて(おわりにかえて)

以上、箇条書き的ではあるが、この5年間の研究活動を振り返ってみた。改めて、今後の課題として積み残してしまったものも多数あり、この点については筆者の力不足を反省するばかりである。

しかし、今回の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受けて、これまで国内にばかり目が向いている事の多かった我が国の「仏教社会福祉」という領域について、「アジアの仏教ソーシャルワーク」という視点を常に意識して研究を行っていく基盤を学内に創れた点は、大いに意義のある研究事業であったと自負している。また、これらの研究活動を通じて、例えば浄土宗総合研究所や大阪大学大学院稲場圭信研究室といった同様の研究テーマや関心を持つ研究機関と合同研究会を開催したり、本学の「アジア国際社会福祉研究所」が全日本仏教会の賛助会員となる等、国内の関連機関との今後の連携や協働の可能性を広げる事もできた。

もちろん、研究テーマ2の「国内開発」の内容自体は直接的には「日本」及び「日本仏教」ではあるが、研究テーマ1の「海外リサーチ」で関わった国々や研究者と仏教ソーシャルワークに関する議論が深化していく中では、「ところで日本の仏教ソーシャルワークはどうなっているのか」という問い合わせや投げ掛けが必ず為されてくると考えられるのである。

その際に戸惑うことなく「仏教ソーシャルワーク」の視点で日本仏教や寺院・僧侶の取り組みや日本社会との関り方を明確に示していく事ができるよう、今後も本研究を更に進めていきたいと考えている。

※本報告書末に、補足資料として、

- ・「仏教社会的実践活動プラットフォーム」広報用チラシ
- ・各宗派教団及び仏教系各種団体への「仏教社会的実践活動プラットフォーム」概要説明資料
- ・2019年12月国際フォーラム報告の際の日本語版資料

の3点を掲載させて頂いている。本文と合わせてお目通し頂ければ、幸いである。

外部評価員から

研究開始当初は、共同研究に携わっている対象国すべては、日本の当該支援事業に対しての関与の仕方に多少の依存や戸惑いも見受けられた。しかし、本支援事業の的確な指針に基づいて、多くの国々が独自にテーマを開拓し、本事業の拡がりを得ることができたことを高く評価する。研究基盤（研究ネットワーク）を維持しながら各国の独自性と独立性をどのように支えていくかが今後も課題となるであろうが、本事業でその道筋は大きく展望が開けたと考える。仏教ソーシャルワークに焦点を当てた当支援事業の更なる展開をベースに、形成された研究基盤の維持と更なる飛躍が期待される。

当支援事業全体を鳥瞰すると、西洋を基盤としたソーシャルワークとは一線を画し、かつ対置する仏教ソーシャルワークの構築を目的としてかかげ、大きな成果を事業開始当初から終盤に至るまで出していることを高く評価する。言語や文化の問題、特に英語で表現することによる仏教ソーシャルワークの特徴の阻害など課題が大きい中であって、その課題をむしろこの研究プロジェクトの大きな特徴ととらえなおして、各国と細かな研究協力を行っていることも、研究プロジェクトの優れた点である。さらに、現地の研究者ネットワークを育て、そのネットワークとの関係を、共同研究の成果に結びつけるというハブの役割を研究所が担っているのも大きな研究プロジェクトの特徴であった。重要な仏教国であるベトナム、ラオス、ネパール、タイ他多くの国々との共同研究も、ソーシャルワークが本来目指すべき点が国民の精神的基盤に根付いているからこそ、あえて仏教ソーシャルワークとして取り上げることが困難であるとも考えられる。この点も、むしろ、各国との違いと受け止めて、方法論的な工夫も考えられていた。令和元年度の国際会議（2019年12月）でも、「インディジナイゼーション」が重要なテーマとして設定されたのも今後のさらなる展開を予期するものと考えられる。

この研究のもともとの出発点が、西洋に基盤を持つソーシャルワークが、西洋であるからこそ生じた様々な課題（労働による搾取、人間疎外や人権の軽視、人種差別、移民問題、社会階層の潜在化、構造的な貧困、家族問題、児童虐待等）に直面するなかで発展して歴史的経緯を持っているという点である。仏教国が多いアジアでは、そもそもが、その求められるソーシャルワークの在り方は異なると考えられる。アジアにおける仏教ソーシャルワークは、西洋とは異なる、アジア独自の精神的な基盤、生活習慣、人間関係の在り方、家族構造、子どもに対する養育観、障がいに対するとらえ方などを考慮されて構築されてきたと考えられる。この研究プロジェクトでは、その中核を担う秋元氏にとどまらず、すでにその方向性が多くの協力研究者によって指摘されており、アジアを基盤とする仏教ソーシャルワークの構築が期待され、その成果を見出し、今後につながる大きな貢献をなした。

さらに、本支援事業の大きな特徴として、継続して開催された国際会議と、日本及び協力国での地道な調査とを有機的に統合し、大きな成果へと導いた点がある。その成果は、書籍として、書籍1：ラオスにおける仏教ソーシャルワーク実践の概説、書籍2：ベトナムの仏教 ―慈善事業から仏教ソーシャルワークへ、書籍3：Buddhist Social Work: Roots and Development of the Social Welfare System in Thailand、書籍4：Buddhist Social Work in Lao PDR ―research report―等としてまとめられ、そのご苦勞を鑑みるに刮目すべき成果と言える。また、報告書等においても、報告書1：モンゴル国立大学を後援したシンポジウムの報告書（2018年実施）、報告書2：龍谷大学と共催したシンポジウムの報告書（2018年実施）など、多くの成果物を出版しているのも、本事業が高く評価されるゆえんである。

以上、新たに研究基盤を形成することが本支援事業の大きな目的であるが、それは十分に果たされたものと高く評価する。

氏 名：藤岡 孝志

所 属：日本社会事業大学 大学院社会福祉学研究科・社会福祉学部

当研究プロジェクトはおおむね年次計画に沿って、研究テーマや目的に応じた多様な方法を用いて、おおむね適切な体制で実施されてきた。とくに、国外の研究者との対等でかつ主体的な共同研究の推進と研究成果の共有がめざされてきたことは高く評価できる。ただ、当研究プロジェクトにおいて、これまで多大な成果が得られてはいるものの、「日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発」などは当初の予定どおりには研究成果が得られていない。ウェブサイト、シンポジウム、講演会、報告書や書籍の出版、国内外での出版物の配布等によって、これまでの研究成果がおおむね適切に公開されている。ウェブサイトなどにおいて不十分な面も見られるが、多言語での研究成果の公開は高く評価できる。

アジア各地の現状、課題をまとめたシリーズの書籍が出版され、これまで入手が容易ではなかった国や地域の情報も含め体系的な知見の蓄積が進んだことは高く評価できるが、研究成果の蓄積だけではなく、共同研究などをおとした国内外の研究者、実践者等との信頼関係に基づいたネットワークの形成が進んだことも高く評価できる。また、研究対象となっている国や地域の実践者や研究者の主体的な参加や研究成果のフィードバックによって、自らの実践や研究のリフレクションが行われることになり、自らの実践や研究の意味付けや体系化を促進するとともに、その国・地域の実態に根差した教育・研修を促進することにつながったのではないかと思われる。ただ、「仏教社会的実践活動プラットフォーム」についてはコンテンツの面でも、登録団体数の面でも極めて不十分であり、これまでの課題を踏まえた現実的な対応策を講じることが望まれる。

ソーシャル・ワークと仏教を含む他分野とのつながりを模索することはソーシャル・ワークの可能性を大幅に高めるものと思われ、当研究プロジェクトの成果から学ぶべき点は多いと考える。

評価者情報

氏名：阪口 春彦

所属：龍谷大学短期大学部

仏教はその最初期から社会事業としての機能を果たし、個人や地域社会が抱える問題と向き合ってきた。日本においては仏教社会福祉学として海外の事例も含めて研究対象としてきた。今回の支援事業の特徴は、その研究成果を土台としてソーシャルワーク研究という研究分野を取り込み、フィールドを日本のみならずアジアの仏教国に広げることで全く新たな研究領域を開拓したことである。これまでのソーシャルワーク概念を西洋に根拠を置くソーシャルワーク（Western rooted social work）として再解釈し、東アジアの仏教国におけるソーシャルワークを仏教ソーシャルワークという新たな概念として捉え直し、これまでのソーシャルワーク概念に対して問題提起していることは大いに評価できる。さらに、今回の研究支援事業では、アジア各国のソーシャルワークの専門家と研究者（主に西洋での教育を受けた）が参加し、上で挙げた問題に取り組むことでその国におけるソーシャルワークの新たな可能性を見出し、そこに仏教界からの研究者や実践者も加わってこの研究分野における各国での研究基盤を形成した。また、この研究領域において今回の研究支援事業はまさにハブの役割を果たし、各国の研究者と実践者のネットワークが形成され、活発な交流が行われている。以上、この研究支援事業は大いに評価できるものである。付言であるが、日本国内に関しては仏教者の社会活動の意味というものをソーシャルワークという概念から新たに考察することで、社会資源としての仏教について新たな光を与えたが、ここに従来のソーシャルワーク研究の分野からも今以上の研究参画があることが今後期待される。

評価者情報

氏 名：齊藤 仙邦

所 属：東北福祉大学教育学部

[研究計画]

平成 27-28 年度計画、同 29 年度計画については、申請書における年次計画の通りに進行したと評価される。平成 30-31 年度計画では、最終の政策提言の具体性が見えてこない点を除けば良好である。年度別の具体的な研究内容中に「政策提言」の記述がないことは、何か別の意味があるのだろうか？疑問の残るところである。

[プロジェクト遂行のための方法と体制]

方法論では、アジア各国の実情調査を踏まえ、各国の実情を分析した SW の新しい理論（ABC モデル）の提言と、日本に移入でき得る方法論の開陳を経て、シンポジウムや出版を多言語で行い、その妥当性を外部評価に託すなど、非常に妥当且つ周到であった。体制づくりでは、スタッフの入れ替えがあったものの（これは予想の範囲であったとみなせる）、同時に複数のプロジェクトメンバーをアジアの仏教諸国に展開させた「アジア国際社会福祉研究所」の運営には頭が下がる。アジア独自の仏教 SW ネットワーク形成の基盤は十分に構築されたと評価できる。

[プロジェクト成果]

このようなプロジェクトにはハードとソフトの両面の成果が求められる。ハード面としての成果では、同一時期の同一視点による多国調査活動の報告を複数出版したことであるが、これは驚嘆に値する。それらは英語と日本語による出版であったことを考え合わせると、成果物出版は国内への情報提供のみならず当事者国への便宜を容易にするために必要不可欠であるが、これは第三国への提言ともなり、大きな成果である。また、ソフト面では、人的交流の活発化がシンポジウムの開催などを通じて図られたことが大きい。特に、度々開かれた国際シンポジウムは、参加者に良い刺激を与えていたことは、来場者の感想からも明らかである。

本プロジェクトの目指していたところは、西洋主導の SW の価値にアジア的（この場合は仏教の持つ価値観と文化的要素）価値観を移入して既存の SW を再構築することとその進展により、社会資源としての新 SW の価値観を定義するところであったと愚考する。上記に述べてきた成果は、その端緒づくりとなるアジア諸国の SW ネットワーク構築に成功し、新しい理論（ABC モデル）を定義して、現在このモデルの浸透が図られているところであり、その点では構築途上であるが、研究の基盤となる理論モデルの提唱は、今後の活動の学術的基盤となり、新 SW を定義する骨格となる。この骨格にそれぞれの国に応じた特性という肉付けがなされれば、西洋型 SW の「専門的」な壁を超える価値観の創造を予見させるものである。したがって、これらは十分な成果であると評価される。

[研究基盤形成]

研究所の設立により、アジアの仏教諸国間の SW ネットワークの核が形成されたことは間違いない。また、上述したように、西洋型の SW に縛られない新しい SW モデルの提唱が示されたことで、ハードとソフトの両面から、今後の研究基盤が形成されたと見ることができる。今後の展開について、ネットワーク維持の体制がどのように構築されるかが一抹の懸念材料であるが、現段階では十分に研究基盤の整備がなされて機能していると評価できる。

評価者情報

氏 名：池上要靖

所 属：身延山大学

顧問から

「仏教ソーシャルワーク」への期待を込めて



大乘淑徳学園理事長
長谷川 匡俊
(本研究所 最高顧問)

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性」と題する国際共同研究も、いよいよ5カ年事業の最終報告書をまとめる段階となりました。申請に先立つ時期から今に至るまで多少の関係を保ってきた一人として、感慨深いものがあります。

「水に源あり、樹に根あり」という言葉があります。アジアの「ソーシャルワーク」について、各国の従事者や研究者の話を伺うと、日本の社会福祉系学会や福祉専門職の常識が通用しないことを思い知らされます。そして、一度でも現地を踏んで、注意深く現場に臨めば、アジアの「ソーシャルワーク」の水源ないし根っ子に仏教（イスラム教など）の思想と実践の体系が息づいていることを気づかされます。

わが国では、上述のように、ながく西洋そしてキリスト教出自の専門職ソーシャルワークがスタンダードとみなされてきたことに対して、学会や職能団体から疑問が投げかけられることはほとんどなかったといっても過言ではありません。それだけに今回の国際共同研究の果たした役割は大きいと思います。なかでも、昨年暮れ二日間にわたって開催された第4回国際学術フォーラム『仏教ソーシャルワークの旅』は、この5年間にわたる研究の締めくくりにふさわしく、内外から100名を超える研究者・実践者等を迎えることができました。ベトナム・スリランカ・タイ・モンゴル・カナダ等の海外研究者および本研究所スタッフによる発表は、筆者にとっても過去3回にもまして収穫の多いものでした。

特に印象に残っているのは、一つは、各国における「ソーシャルワーク」をその社会の在りようと仏教（僧侶・寺院）の存在感といった歴史的・文化的文脈のなかで捉え、位置付けることの重要性です。ただこの点について、現行のわが国社会福祉専門職（社会福祉士）養成課程カリキュラムには、科目として「社会福祉史」が入っておらず、歴史的視点の軽視は覆うべくもありません。

二つ目は、仏僧や寺院に対する人びとの「尊敬」の眼差しと、その信頼に基づく仏教者による伝統的な慈悲利他の行動です。たとえば、薬物依存症患者への対応にしても、国内を含めて地域社会に溶け込んだ寺院・僧侶の活動にあっても、共同体に根差した、現代的に言えば「ソーシャル・キャピタル」としての役割を担っていることです。

三つ目は、本研究の眼目でもありますが、秋元所長が提起する「西洋生まれの専門職ソーシャルワークへの異議申し立て」です。すでにこれまでの成果として、A B Cモデルを紹介し、改めてモデルCのインディジナスソーシャルワークを提起したことです。モデルDを加える議論を含め、WPSW への対抗軸に期待が膨らみます。

むすびに、この間ご協力ご支援いただいた国内外すべての皆様に感謝と御礼を申し上げ、併せて研究所スタッフの熱誠に敬意を表してご挨拶といたします。



仏教ソーシャルワーク研究の意義

顧問 石川到覚

2015年に淑徳大学が創立50周年を迎えた節目に科学研究助成「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究(以下、本研究)」の採択により、2016年に「淑徳大学アジア国際社会福祉研究所(以下、当研究所)」が創設された。既に「長谷川仏教文化研究所」内「アジア仏教社会福祉学術交流センター」の活動を受けた当研究所の立上げ時には、アジア諸国の仏教ソーシャルワーク研究者や仏教僧も参加した日本仏教社会福祉学会第50回大会における基調講演「アジアのソーシャルワークにおける仏教の役割ー共通基盤の構築に向けて」⁴と題して話す機会を得た。その後、当研究所の運営体制の一隅で関与する役割を与えられ、本研究の進捗状況を見届けながらも、タイ仏教や中国仏教の寺院・僧侶による固有の福祉実践に関する調査研究活動にも関与してきた。

本研究の活動では、戦略的な基盤形成のために2つの研究テーマを中心に怒涛のような5年間を乗り越えながら、数多くの研究実績を積み上げ、アジア仏教文化圏のソーシャルワークの体系化に資する研究成果を上げてきた。そこではグローバル(GRNL: Global・Regional・National・Local)の4つの視座から、西洋生まれの専門職ソーシャルワークを踏まえながらも、東洋生まれの仏教ソーシャルワーク実践の実態ないし現実を描き出し、仏教ソーシャルワーク理論の将来像を提示してきた。また、当研究所が国内外の社会福祉研究を推進するプラットフォームとなり、そこでの“ハブ機能”を活かして国内のみならず、西洋と東洋の双方向の学術交流により、国際的な研究ネットワークを形成している。例えば、日本ソーシャルワーク教育学校連盟や日本ソーシャルワーク学会などとの「国際学術フォーラム」の開催であり、アジアの仏教ソーシャルワーク研究を推進する「ビジティング・リサーチャー論博プログラム」による博士学位を取得できる機会の提供が典型的な取り組みとなっている。

さらに引き続き「ソーシャルワーク・グローバル定義」の論議でも、幅広い福祉実践におけるボランティア活動とソーシャルワーク実践における宗教の実践原理が基底的な価値を形成してきた根源にも留意してきた。それはグローバルな視座による仏教ソーシャルワーク研究の成果を生かし、日常生活の基本的な価値観の重層性に仏教文化の影響を今もって保持しているアジア諸国におけるローカルな福祉コミュニティづくりに学ぶべき歴史的・社会的な実践が数多く見出せた。特に、甚大な被災時には大きな意味を持っていた。

つまり本研究は、アジア仏教文化圏の地域に根差した仏教ソーシャルワークが仏教福祉(共生)思想による価値形成を基底的な土台とし、専門職性(価値と知識と技能)には確かな裏付けで積上げる関係力をもって専門性が高められるといった概念化を見出し得る。また、その基層には地域で培われた価値観と共生理念を据えた規範・倫理を内実化させた新たなソーシャルワークの理論化にも貢献するであろう。こうした研究基盤の形成に向けて国際的な研究コミュニティづくりを推進して精力的な研究業績を積み上げてきた今こそ、更なる研究の発展のためにも淑徳大学・大学院と当研究所は、日本とアジアと世界を取り結ぶ“ハブ機能”を引き続き発揮すべき役割が大きいものといえよう。

⁴ 研究シリーズ No.0『仏教ソーシャルワークの探究ー西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』学文社、2018年3月20日。



「一里塚」という言葉が思い浮かんで」

—私立大学戦略的基盤形成支援事業最終報告書刊行に寄せて—

顧問 田宮 仁

このたび、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所の開所にあわせたように始まった期間5年の私立大学戦略的基盤形成支援事業に区切りがつき、最終報告書が刊行される運びとなった。この間、ご尽力された研究所の秋元所長を初めとするスタッフの皆さまや、研究を共に進展させてくださった各国の研究者、識者に感謝と御礼を申し上げたい。とりわけ各国との共同研究や当研究所の事業展開の目的追求の過程で、深甚な信頼関係構築と多くの友情が生まれたことは、秋元所長の意図されたハブ機関としての当研究所の位置づけが実を結んだものであり、何よりの成果であった。

ところで、人々はいつの時代も餓えや争いの無い、昨日のように今日があり、明日がある安寧を望んでいるはずである。そのための道は幾通りもあるはずである。

言うなれば、このたびの研究の多くは、街道を行くときにキリスト教を見晴るかす風景になじんだものであり、料理でいうならば欧米で発達したワインとチーズやバターを用いてゾーリンゲン製のナイフで刻んだ「ソーシャルワーク」という料理の仕方であったと思われる。それが今どこでも流布している世界の標準料理であり、まずはそのような料理の仕方アジア諸国の福祉施策の比較や共通な課題追求の基礎研究をテーブルに並べる必要があったからである。

しかし、淑徳大学アジア国際社会福祉研究所という名乗りの下で歩み始めた道は、アッピア街道のように「全ての道がローマに通ず」という道に限ることもないはずである。「アジア国際」の淑徳大学での研究は、「仏教街道」とでも言いうる仏教の風光と香りに包まれた独自の歩みが求められるはずである。そのような道を開拓し、拡張し、延伸し、多くの人々の賛同を得て活用されていくことが当研究所には求められている。そのための研究と人材の交流のハブ機関であろうとしたはずである。

ついでには、このたびの私立大学戦略的基盤形成支援事業に一応の区切りがつくということは、当研究所の歩みが一つの「一里塚」を迎えたということである。今後にどのような道を選び、その歩を進めるかの大切な時期に臨んでいることに他ならない。

二千数百年の間に仏教は原始仏教から上座部仏教、大乘仏教と大動脈となる街道を構築して来た。一方で今、地球全体が未曾有の混迷と壊れ方をし始めている。

無常の世の中で人々の願いに応じていくために、「全て」を乗り越えて仏教の慈悲の教えの原点に戻って、新たな「仏教街道」としての「福祉仏教」の構築を目指し、改めて慈悲の修習(メッター・バーワナー< mettābhāvanā>)からの一歩を踏み出したい。

プログラム研究員

中国チーム報告

新保 祐光



仏教とソーシャルワークはどう関連するのか、そもそも関連があるのか。この問いは、多くの人が持つものだと思う。私自身、寺で育ち今では檀家寺の住職となって10年が過ぎた。そして10年以上在籍している現在の職場は、所属宗派が設立運営に関わる大学である。このように仏教と深く関わってきた。

同時に私は大学、大学院とソーシャルワークの教育を受け、3次救急の医療機関でソーシャルワーカーとして10年働いた経験を持つ。仏教とソーシャルワーク、この2つに深く関わってきた経験は間違いなくある。このような経験を持っていても、仏教とソーシャルワークの関連について、論理的でわかりやす

い説明が十分にできない。ただし、少なくとも今回のプロジェクトに関わらせていただいたことで、仏教とソーシャルワークは関連することへの確信が深まり、少しだけだがその説明ができるようになった気がしている。

ソーシャルワークは、メゾ・マクロレベルでの有用な制度とシステムがあつて、ミクロレベルのマニュアルがあれば、誰でもある程度の効果が上げられるかといったら、私はNoだと思っている。強度の高い枠組みは、反対に利用者主体の相互作用を困難にする。枠組みではなく、基盤としてのソーシャルワークの価値が重要であると考えます。

今回のプロジェクトで、何カ所かの中国の有名寺院の高僧に福祉実践をされることの意味を伺うことができた。そこで共通した答えは、人はよく生きるべきで、そのために自分は何者で、何ができるか、社会はどうあるべきかを熟慮する。そして実際に多くの人々と関わる実践をし、そのなかで相手の様子を注意深く観察し、また話を聞き、気持ちをさせ、そしてまた次なる何か自分が自分にできないかと考える。これを行いつづけることが仏教者としての使命だということ、仏教の考え方を基に熱く語っていただいた(詳細は発行予定の報告書をご参照いただきたい)。

これを聞いて、専門職として国家資格にしている国も多く、国家資格である以上公共益にも配慮しなければならないソーシャルワーク専門職のあるべき姿だと感じた。つまり、今回のプロジェクトでさせていただいた調査は、僧侶として語っていただいた内容ではあるが、国を超えて、ソーシャルワークとして捉え直しても優れた実践、優れた人物、優れた価値観を伺うことのできた、貴重な機会であったといえる。そのため仏教とソーシャルワークは、きっと重なり合う部分が少なくない、ソーシャルワークの価値には仏教が影響しているということを確認した体験であった。そして強い感動を覚えた経験であった。

このような貴重な経験をさせていただいた、本プロジェクトに関わる方々、中国調査の際に協力していただいた方々、すべての方に心から感謝申し上げます。

大正大学人間学部教授、天台宗正光寺住職、専門:ソーシャルワーク理論、医療ソーシャルワーク



活動報告

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所支援事業の一環として韓国班においては、2016年5月にプロジェクトを立ち上げ、その後、韓国の中央僧伽大学校名誉教授でいらっしゃる金慧棹先生を共同研究のプログラム研究員にお迎えし、現在まで10施設の調査を行った。

同じく共同研究の劉光鍾先生においては、現在も会合を進めており、2020年2月末日現在で合わせて65回に及ぶ会合を進めてきた。インフォーマルな会合も含めると100回以上はお会いし、日韓比較について議論を重ねた。

具体的に訪問し、調査を行った施設等を以下に示す。

- 2016年8月に金先生が園長を務める幼稚園、
鍾路老人総合福祉館、広津老人総合福祉館、
障害児入所施設(発達障害児者)の4カ所を調査
- 2016年9月には、障害児者施設(知的障害)、

タプコル(パゴダ)公園におけるホームレス支援の現状視察及び
インタビュー調査を行い、2カ所の調査を行った。

また、この間韓国調査における調整等の関係で、ブランクがあったが、その後、調査を再開し、2018年12月、龍谷大学において行われた「仏教・アジア国際学会」においては、共同研究者である金慧棹先生から韓国の事情を踏まえてシンポジウムの中において「指定発言」をしていただいた。

2019年2月においても韓国の調査を行った。調査を行った施設は、以下のとおり。

- 2019年2月蔚山にあるホスピス、
聴覚障害・発達障害の施設を運営しているスニムへの調査、
麗水にある施設(シルバー人材センター【お焦げ・海苔・キムチ・豆腐工場見学】)への調査、麗水にある寺院調査、タプコル公園(パゴダ公園)付近の事務所への調査(ホームレス支援)

仏教ソーシャルワークに関する研究プロジェクトを振り返って

渋谷 哲



我々、淑徳大学(アジア国際社会福祉研究所)のメンバーが、初めてラオス人民民主共和国を訪れたのは2016年3月下旬であった。ラオス国立大学(社会科学部)を訪問し、ソーシャルワーク・社会開発学科の4人の先生方とお会いた。研究の対象国の一つとしてラオスを考えており、共同研究の機関として依頼したところ了解が得られた。

本共同研究の目的は、ラオスにおける「仏教」ソーシャルワーク活動の現状を知り、「仏教ソーシャルワーク」の概念を体系化するための基礎データを収集することであった。具体的には、ラオスの社会や文化を把握して、仏教や社会福祉のあり様を先行研究等でレビューすること。そして、仏教ソーシャルワーク活動の現状を把握するために、寺院や僧侶による活動の事例や関与している理由等を、実地調査や先行研究のレビューをすることであった。

これについてラオス国立大学の研究メンバーは実践例として、ラオス仏教連盟協会による「社会開発のためのプロジェクト」と「メッターム・プロジェクト」の2つのプロジェクトを、淑徳大学からはシーアムポーン寺院による活動を報告することができた。

そして、寺院や僧侶がソーシャルワーク活動と同様な活動に関与している理由等について、ラオス国立大学の研究メンバーは次のように指摘している。

僧侶の役割は問題を予防し、起こる問題を解決し、より良い方向へ変えることだが、それはソーシャルワークそのものだと考えられる。仏教とソーシャルワークの概念は、仏教の教えと社会開発における最近の活動に見られるように重なる部分が多い。(中略) 仏教ソーシャルワーク活動が教育や医療、公衆衛生、心理的発達、心理的な救済、慈善活動、地方・地域開発の分野で実施されている傍ら、地元の仏教寺院は僧侶と地元の人々がソーシャルワーク活動を実践するのに有用な場所である。(中略) 仏教とソーシャルワークの概念は多くの点で一致するが、特に仏教の教えを通じて一致する。そこには、社会開発に熱心に取り組む、確立されたラオス仏教の組織構造がある

しかし、ベトナムの各寺院で行われている施設サービスを中心としたソーシャルワーク活動は、ラオスではシーアムポーン寺院以外に報告はできなかった。ラオスにおける仏教ソーシャルワークの研究は、仏教伝播や革命前の歴史からみると、同じ上座部仏教国である隣国のタイの現状を理解して考察することが必要といえそうだ。

本研究によりラオスにおける仏教や仏教ソーシャルワーク活動の、概要や基礎データを収集することができた。残念ながらソーシャルワークの展開状況、その代替機能を担ってきたと考えられる、仏教の福祉的実践活動の具体例に関する研究報告は少ないが、本研究を土台として今後も共同研究が展開できれば幸いである。

渋谷 哲 (SATOSHI SHIBUYA)

淑徳大学 総合福祉学部 社会福祉学科 教授

2001年 文学修士[社会福祉学専攻](大正大学、日本)

低所得者福祉論、ソーシャルワーク演習、ソーシャルワーク実習指導等の科目を担当。



開眼: 仏教ソーシャルワーク研究

山口 光治

ヨーロッパに起源を持ち、北米で育ったソーシャルワークは、主として戦後日本へ導入され、それまでわが国で取り組まれてきた宗教的慈善事業などと相俟って、今日の福祉社会の中で用いられてきている。ソーシャルワークと仏教との関係について、浅学な筆者においては、仏教慈善事業や仏教福祉という領域が社会福祉領域の中の一つとして存在する、程度の認識であった。

本研究にかかわり、筆者自身の中で最も大きな変化があったのは、今あるソーシャルワークを疑いもなく、当たり前のように用語として、また輸入された概念を用い、東洋というよりは西洋、特に米国や英国などのソーシャルワークの動向に対して強い関心を持ち、あたかもソーシャルワークを分かったかのように思っていたことへの問い直しである。本研究の成果出版物である0(ゼロ)号で、秋元教授は「今あるソーシャルワーク、WPSWを世界の隅々まで広げてもソーシャルワークは世界のものにはならない。ソーシャルワークそのもののグローバリゼーションにすぎない。」と書かれている。まさにこの一節を読んだ時に、筆者はこれまでのソーシャルワーク実践や教育に関わってきた過去を内省する機会を得た。グローバル企業が世界を席卷するように、欧米で用いられているソーシャルワークで世界を制することが良いはずはない。その国、その土地に住む人々の生活や文化に根ざし、ソーシャルワークという言葉だけでは表現することができない支え合いの仕組みが存在するはずであり、それを明らかにする研究の面白さを学ばせていただいた。

研究の担当国はミャンマー連邦共和国であったが、現地の協力者との調整等が十分に進まず課題を残すものとなった。しかし、ミャンマーでのフィールド調査の中で一番印象に残っていることは、福祉活動を指す用語としてパーリ語の「パラヒタ(parahita)」という言葉、時折、耳にしたことである。パーリ語辞典で調べると、パラヒタは「利他」を意味する。つまり、パラヒタとは、利他のための活動、すなわち社会・福祉活動と理解でき、利他行ともいえる。拙速かもしれないが、ミャンマー(もしくは仏教を信仰しパーリ語を用いる国)においてはソーシャルワークという言葉ではなく、パラヒタという言葉によって、仏教ソーシャルワークにあたる実践が行われてきているのではないかと空想してしまう。

本研究プロジェクトは、本学が大乗仏教の精神に基づく「利他共生」を建学の精神にし、学祖長谷川良信の社会福祉実践を基盤にしていることから、「淑徳ならでは」の研究要素を多分に含んでいる。「研究基盤形成」を第一段階として、さらなる発展的展開へと進めていく必要があるし、進めていかねばならない。

※プロフィール

淑徳大学 総合福祉学部 教授

社会福祉学、とくに権利擁護や高齢者虐待防止を専門としている。

仏教ソーシャルワーク最終報告

東田 全央



この度は、仏教ソーシャルワークにかかる本研究プロジェクトにおいて、分担執筆の機会を与えていただいたことに心から感謝します。とくに、私はスリランカの仏教ソーシャルワークに関するデータ分析と執筆の一部等に、微力ながら協力させていただきました。

私自身は2013年以来、スリランカの農村部の「障害と開発」分野を中心に実践と研究に携わってきましたが、当時から宗教と人々の生活、そしてソーシャルワーク実践のあいだにある密接な関係性に関心を寄せていました。たとえば、実践研究の中で、いわゆる「専門職」ではないもののフロントラインで活動している地方行政職等によるソーシャルワーク実践に着目し、その実践の一側面が宗教との統合であることを見いだしました。そのような取り組みに従事していた同時期に、本プロジェクトの分析に協力させていただく機会をいただいたことは幸運でした。

本プロジェクトの調査データはすでに現地の人々の努力によって収集されていたものですが、さらなるデータ分析が必要な状況にありました。その収集済みのデータから少しでも知見の掘り起こしが求められていたところ、私は協力させていただいた、と理解しています。

今回の分析協力の中で、私自身、多くのことを学ぶことができました。仏僧や寺の基本的状況を踏まえ、地域社会に根ざした多様な仏教ソーシャルワーク実践の内容、仏僧自身によって認識されたそのインパクトや課題など、包括的に概観することができました。このような状況分析や実践についてのデータ収集がスリランカの農村部で行われるということについて、これまで見聞きしたことが無かったため、貴重なデータ源であると痛感しました。分析作業も大変刺激的な過程でした。さらに、私自身がこれまでの実践研究で得た知見と、今回の分析結果とでは、直接の対象は異なっても共通するような事象も散見され、興味深かったです。

今回、出版となるスリランカや他国の仏教ソーシャルワークに関する書籍が現地の人々にとって有益なものになっていくこと、そして、その知見を基にした学び合いが将来の教育や実践現場で生かされていくことを心から願っています。私としても、本プロジェクトに参加させていただいた経験とご縁を生かし、今後もアジアの国々のソーシャルワークに関する実践や研究に関わりながら、ともに学びを深めていきたいと考えています。

東田 全央、大阪府立大学大学院人間科学研究科博士後期課程

社会福祉士、精神保健福祉士。日本国内に加え、スリランカおよびモンゴルにおいて、「障害と開発」領域を中心にソーシャルワークの実践および研究に従事。2019年9月よりアジア国際社会福祉研究所リサーチフェローを受嘱。

タイチーム報告

松 蘭 祐子



タイチームは、ソパ先生(タイソーシャワー協会会長)、スライ先生(マハーマクトット仏教大学教授・仏僧)の協力を得、ARIISW プロジェクト研究員の安藤徳明とともに充実したプロジェクトを展開できた。2016年から2017年にかけて、現地で寺院の活動の先進事例のケーススタディを行うとともに、タイの仏教寺院での福祉的活動とその要因を探索する量的調査を実施した。事前にいくつかのタイプの調査票を用いた予備調査を共同研究者とともに実施し、マハーマクトット仏教大学の協力を得て寺院への

配布回収を実施した。2018年には英語版の書籍「Buddhist Social Work: Roots and Development of the Social Welfare System in Thailand」を、2019年度には日本語版『タイにおける社会福祉の起源と発展』を刊行した。この間、日本で開催した複数回の国際フォーラムでは共同研究者の2名が参加し、さまざまな意見交換や有益な議論を行うことができた。

タイにおける「ソーシャルワーク」(サンコム・ソククロ)は慈悲や四無量心などの仏教の教えに基礎づけられる起源をもつ。スリランカから伝わった上座部仏教は、国王のガバナンスと結びつき、人々のコミュニティでの生活に浸透した。近代化、民主化を経る間には教育・医療・福祉の補完的役割をも担っていた。1932年の立憲革命以降、社会福祉制度やプロフェッションとしてのソーシャルワークの導入、教育制度が整備されてきた。専門サービスの充実にともない、寺院の社会福祉的活動の役割の重要性は減少している。

本研究では、先進的事例として5つの寺院と僧の活動を取り上げている。高齢者のリハビリテーション、低所得者向けの雇用開発、HIV患者およびその家族支援、癌患者のオルターナティブな医療介護、コミュニティ福祉基金である。これらの活動の出発点は、僧の深い宗教心でありそれを支える在家信者であった。また、これらの活動の背景として、制度の隙間となりがちな変化の激しい現代社会の姿があった。活動の継続には、寄進を集められる傑出した僧や財団は不可欠である。量的調査によれば、現代の一般的な寺院の活動の中心は宗教的活動であり、地域活動としては寺院の施設や物品の貸し出しであることが実態である。しかしながら、寺院のもつ人(モノや場所)、組織やネットワークは地域連携を進めるソーシャルワークにとって重要な社会資源であるといえるだろう。

これらを踏まえて、現代のタイの福祉制度と寺院や僧が取り組む社会福祉的活動について考察をおこなった。現代のタイの社会福祉制度は、仏教原理に基礎づけられる一方、近代化以降の国王のガバナンスと仏教、立憲民主制期における西欧起源のプロフェッションとしてのソーシャルワーク、社会福祉制度の複合的な結果である。寺院と僧によるソーシャルワーク活動は、福祉社会構築に向けてコミュニティの強化、生活の質の向上をめざす社会的パートナーとして位置づけられる。

松 蘭 祐子 淑徳大学総合福祉学部教授 研究領域は都市社会学、地域社会学、アジア研究。タイにおいて、スラム、農村、人口移動、コミュニティ開発など多くのフィールド調査経験を持つ。

海外の共同研究員より

モンゴル 国立教育大学

Oyut-Erdene Namdaldagva, MSW
Tsendsuren Tumeer, PhD
Jargalsaikhan Otgon, MA
Baigalmaa Chuluunbaatar, PhD
Mongolian National University of Education

Learning and promoting Indigenous Social Work through Buddhist Social Work Project



Pic 1. Team of researchers of the Mongolian National University of Education: from the left Jargalsaikhan Otgon, Oyut-Erdene Namdaldagva, Tsendsuren Tumeer, Baigalmaa Chuluunbaatar

A team of social work researchers of the Mongolian National University of Education had a great opportunity to participate in the Buddhist Social Work research project since 2015 (Pic 1). Under the guidance of Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku University, Japan we conducted Buddhist social work study to explore a role of Buddhism in social work and Mongolian Buddhist social work activities. Our collaboration resulted in production of the first its kind book on Buddhist Social Work in

Mongolia. The book “*Growth of the Buddhist Social Work activities in Mongolia*” in English and Mongolian languages became an important educational and informative resource on Buddhist social work (Picture 2). Research findings were distributed via presentations at international and national conferences, publication of articles, organization of workshops, and guest lectures. Important discovery as a result of the study was various contributions of Buddhist monastery and monks to wider society. According to the International study on Buddhist Social Work in Asian countries and the Mongolian study on Buddhist social work, Buddhist temples and monks organize various activities for the wellbeing of people and their families. We found Buddhist social work provides functionally alternative social work services and social workers have many opportunities to collaborate with Buddhist temples and monks to provide services for the wellbeing of the society and the people.

Participation in the Buddhist Social Work project was beneficial in many ways especially in promoting indigenous social work. We expanded our professional networking at national and international arena. We became a part of Asian Buddhist Social Work Research network in 2017. School of Educational Studies, Mongolian National University of Education and ARIISW, Shukutoku University, Japan signed MoU in 2018 to build a mutual collaboration system regarding multicultural issues, social work activities in Asia and academic research exchange (Pic 3). Mongolian National University of Education, National University of Mongolia, and Academy of Sciences of Mongolia became close counterparts in the Buddhist social work research and activities. Social work and

religious departments and scholars share their knowledge and expertise in developing indigenous social work.

Pic 2. ARIISW Shukutoku Exploring Buddhist Social Work Research series

 <p>Research Series No.1</p> <p>Growth of the Buddhist Social Work Activities in Mongolia</p> <p><i>Exploring Buddhist Social Work</i></p> <p>Edited by Josef Gohori Hiroaki Ogawa</p> <p>Research coordinated by Demberel Sukhbaatar Oyut-Erdene Namdaldagva Altaibaatar Jargal</p> <p>ARIISW - Shukutoku GAKUBUNSHA</p>	<p>Josef Gohori, & Hiroaki Ogawa (Editors). (2018). <i>Growth of the Buddhist Social Work activities in Mongolia</i>. ARIISW Shukutoku Exploring Buddhist Social Work Research series №1. Gakubunsha, Tokyo, Japan</p> <p>Research coordinated by Demberel Sukhbaatar Oyut-Erdene Namdaldagva Altaibaatar Jargal (in English language)</p>
 <p>Япон улсын Шукүтүкү Их Сургуулийн Олон Урсам Нийгэмийн Ажлын Алба Судалгааны Институтийн Буддаст нийгэмийн ажлын судалгааны цуврал ном №1</p> <p>МОНГОЛЫН БУДДЫН ШАШНЫ НИЙГЭМ ХҮМҮҮНЛЭГИЙН ҮЙЛ АЖИЛЛАГАА</p> <p>ARIISW - Shukutoku GAKUBUNSHA</p>	<p>Oyut-Erdene Namdaldagva, Demberel Sukhbaatar, & Altaibaatar Jargal (Editors). (2018). <i>Growth of the Buddhist Social Work activities in Mongolia</i>. ARIISW Shukutoku Exploring Buddhist Social Work Research series №1. Ulaanbaatar, Mongolia (in Mongolian language)</p>

Pic 3. After the signing ceremony between School of Educational Studies, MNUE and ARIISW, Shukutoku University, Japan in 2018.



BUDDHIST SOCIAL WORK PROJECT- LECTURERS AND PARTNER OF THE NATIONAL UNIVERSITY OF MONGOLIA



Dr. Dagzmaa Baldoo (Head of Department of Philosophy and Religious Studies, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia)

It was rewarding and interesting for us to take part in the project of Buddhist social work. It was a new experience for us to consider Buddhist philosophy and doctrines in social work and compare Buddhist Social Work with Western Social Work.

An important outcome of the project was a joint international research conference of 2018 organized by the Asian Studies Institute for International Social Work (ASIISW) at the University of Shukutoku and our School of Arts and Sciences at National University of Mongolia (NUM) in Ulaanbaatar, Mongolia. The main purpose of this conference was to build a foundation of the partnership among scholars from the state funded research institutions and universities and Buddhist monks who engage in social work and humanitarian works. Thanks to good support of ASIISW, professor Tatsuru Akimoto and Dr. Josef Gohori, we organized the conference successfully. Taking this opportunity I would like to express our sincere gratitude to Dr. Josef Gohori and Professor Tatsuru Akimoto.

Also, I would like to highlight the following outcome of the project. The international conference on Buddhist Social Work that was held in Ulaanbaatar, provided opportunities to share their research findings and experiences of Buddhist activities to our international and national scholars by expanding their horizons of knowledge and creating new areas of their research. In this sense the project contributed to knowledge building of different disciplines through discussion Buddhist Social Work.



Dr. Yanjinsuren Sodnomdorj (Lecturer Department of Philosophy and Religious Studies, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia)

Our collaboration with ARIISW, Shukutoku University were beneficial to us as University Community and Buddhist Communities in the following ways.

1. We completed our joint research on Buddhist and Humanitarian Work in Mongolia successfully and published in English and Mongolian. As a result, comprehensive information on Buddhist organizations and their humanitarian activities became available to scholars, practitioners and Buddhist communities.
2. The international conference on Buddhist social work in UB was organized and provided opportunities to scholars, practitioners and representatives of Buddhist organizations to share their research and activities. The participants of the conference heard and discussed achievements and challenges of the humanitarian activities of Buddhist organizations.
3. My colleagues, lecturers of our university attended in international conference on Buddhist Social Work abroad.
4. International collaboration with NUM has been expanded.
5. The Department of Philosophy and Religious Studies became capable to provide methodological advices on humanitarian activities of Buddhist organizations.



Dr. Altaibaatar Jargal (CEO of the Mongolian Association for the Study of Religion)

(Former academic researcher in Mongolian Academy of Sciences)

Research field: religiosity, religious organizations, RNGO, new religious movements, public policy on religion

altaibaatar@gmail.com)

I would like to thank a team of the Asian Research Institute for International Social Work at Shukutoku University in Japan for giving me the opportunity to participate on behalf of the Mongolian Academy of Sciences in the international research project with aims to identify aspects and experiences of "Buddhist Social Work". This research has contributed in discussions to find solutions of many challenging issues in Mongolia and the world.

Buddhism is an integral part of Mongolian culture and heritage, which promotes the perfection of the inner mind of the individuals. The result of our research project informed possibilities of applying the perfection of the inner mind of the individuals to social work practice. This was one of the valuable contributions of the project, I think.

In addition, the research findings informed a lot of ideas, experiences, practices and resources for loving sentient beings and helping others in the Mongolian tradition of Buddhism. As part of this research project we studied activities of Buddhist NGO in Mongolia and agreed to have common understanding of the activities of Buddhist NGOs.

I would like to thank Professor Tatsuru Akimoto, Professor Josef Gohori, Professor Hiroaki Ogawa for their supports and advices in conducting our research. I also would like to express my gratitude to team of the ARIISW at Shukutoku University for organizing and managing the project.

Finally, I would like to express my sincere appreciation to the Government of Japan, which provided financial supports to implement the project that provided us the opportunity to be part of international research and publications.



Demberel Sukhbaatar (PhD candidate, Lecturer, Department of Philosophy and Religious Studies, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia)

It was my honor to act as a coordinator managing a team of National University of Mongolia in the project of the Buddhist social works in Asia, which was initiated by ARIISW.

From the beginning of the project, the ARIISW team provided us with the clear illustrious guidelines and instructions of the program, which helped a lot to accomplish our goals of studying and building partnership on Buddhist Social work in Mongolia.

The goal of our Mongolian team was to explore the present status and features of social work activities provided by monasteries, Buddhist NGO, monks, nuns and lay people in Mongolia.

By doing this research we had opportunities to learn and improve research methodology and skills in the field of social work. In addition we participated in international forums and conferences on Buddhist social works in Asian countries, and established collaboration with local and international research scholars.

The outcome of the Buddhist social work project was beneficial to our researchers, Buddhist communities and our country.

I would like to express my gratitude to ARIISW team, particularly professor Tatsuru Akimoto, professor Josef Gohori and other research members for providing us opportunities to benefit from helpful and inspiring Buddhist Social Work project.



Dr. Batkhishig Adilbish (Lecturer, Department of Sociology and Social Work, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia)

Participating in project activities of Buddhist Social Work was an eye opening experience to me in terms of connecting our culture related to Buddhism with social work practice. The project has been beneficial to us and me in different ways. First, we studied issues around Buddhist Social Work in home country and shared findings of the research in publications with different languages thanks to ARIISW supports. We had also opportunities to participate in the international forums and conferences on Buddhist Social Work. Most importantly, we became a part of the international network of Buddhist Social Work. All these events and collaborations were magnificent thanks to committed staff of ARIISW led by professor Tatsuru Akimoto. Personally, I have impressed by commitments and dedications of ARIISW team, particularly professor Tatsuru Akimoto, professor Josef Gohori, Mrs Kana Matsuo, professor Yusuke Fujimore, Mrs Kana Nonaka and their colleagues of Ryukoku University who demonstrated their genuine and generous supports and encouragements to local and international colleagues and people who engaged in the project activities. It was amazing to see active involvement of scholars, monks, NGO leaders and practitioners across the region and world who contributed greatly into growing and never ending discussions on Buddhist Social Work. At the end, not least I would like to express my sincere appreciation to Japanese donor organization and individuals who made wonderful ideas of ARIISW project to plant seeds of Buddhist Social Work on the earth into a reality.



Dr. Tumennast Gelenkhuu (Lecturer, Department of Sociology and Social Work, School of Arts and Sciences, National University of Mongolia)

As social work lecturer, my involvement in the project of Buddhist social work were beneficial in the following three ways: First, my views influenced strongly by western social work histories and thoughts have expanded by Asian, in particular Buddhist philosophy and beliefs. I started to believe that we could develop another strong social work paradigm that can be parallel with Western social work paradigm. Second, I became a part of network of Asian Buddhist social work scholars. I believe our network with ARIISW, Ryukoku and scholars from other Asian countries will be strengthened in the future. Third, collaborations with local and international Buddhist organizations have been established. I would like to contribute significantly to the

development of Buddhist Social Work in my home country and region as well. I would like to express my gratitude to professor Tatsuru Akimoto, professor Josef Gohori and team members of the project who provided me opportunities to benefit from this project.

Mrs. Burmaa Sambuu (Executive Director, Asral Buddhist Center)



Asral NGO, where I work as an executive director, is a Buddhist Center for Children and Seniors that was established in 2001 by Panchen Otrul Rinpoche with support of His Holiness of Dalai Lama. Our center offers spiritual, social, and educational and health services for disadvantaged children and seniors.

Two years ago, the Department of Social Work and Sociology of NUM invited us to present our project activities at the International Conference on Buddhist Social Work that was held in October, 2018 in Ulaanbaatar. At this conference we shared our activities with the conference participants who were social work scholars and practitioners and Buddhist Community. After this conference, our collaboration with social work lecturers and students has been expanded. Our Buddhist center became a placement of field practice of social work students. Last year, I worked together with lecturers of NUM in conducting a comparative study on essences and features of the centers for seniors and children representing Buddhist Centre.

I am proud of working with lecturers and students of NUM. Thanks to the Buddhist Social Work project we met at the conference and started work together in practice to develop Buddhist social work and humanitarian works of Buddhist Community. I believe our partnership will be flourished in the future. Many thanks to all members of the project teams and donors.

スリランカから

Buddhist Social Work in Asia, and the Asian Research Institute for Buddhist Social Work (ARIISW) Prof. Herath, University of Peradeniya



Buddhism is a product of the Great Indian Sasthu Sakyamuni Siddhartha Gauthama Buddha. The major concern of Buddhism is to initially reduce, and subsequently totally eliminate human suffering. It is an individual achievement based on meritorious activities, “**work for others**” that will help to reduce desires (thanha) of humans. Once you start working to serve others that help to reduce the suffering of individual, then the family and then the whole community and the country and finally human beings in the whole world. At least during the past period of more than 2500 years, Buddhism was activated as well as encouraging others to practice this theory in Asia, by yellow robed disciples of Buddha. They did not have a true voice, salaries, or payments. But they worked for the village level poor, and also up to the urban level rich, to , to alleviate social disabilities, without expecting any income or profits.

This Gigantic Social Work program was identified by Asian scholars as Buddhist Social Workers in Asia. Five years ago Specially one of the prestigious universities in Japan, namely Shukutoku University and the well known Social Work Scholar Prof. Tatsuru Akimoto, and a handful of Asian scholars pioneered this program, under the name of Asian Institute of International Social Work (ARIISW). Almost all Buddhist social work scholars in Asia, were positively involved in establishing this institution, and, they initiated accumulating knowledge on the concept of Buddhist Social Work, theory and practical aspects of Buddhist Social Work. To overcome this new challenge against the professional social works in the western society, during the last five years, ARIISW has conducted a large number of research projects at country level in Asia and that empirical knowledge was transmuted into Buddhist social work theory to enrich the practical knowledge base in the subject.

This knowledge base included publications in book form, research papers, country reports, pamphlets, handouts, speeches, training programs, subject curriculums, teaching materials etc. Finally, a considerable number of Buddhist universities began to conduct courses in this new subject and train students in the degree levels. As Asian Buddhist Scholars, we very proudly and respectfully appreciate the Shukutoku University and its persevering efforts leading to the new Buddhist Social Work era of the 21 st century. In addition we express our sincere and thankful appreciation to all the Asian Buddhist social work scholars and their very generous and valuable contributions towards the establishment of ARIISW.

プロジェクト報告

「テキストマイニングを用いたインタビュー分析を振り返って」

選択式アンケートの集計や分析と比較して、アンケートの自由記述欄やインタビューの分析は相対的に難しい。自由記述欄の文章には、選択式アンケートには反映できない、回答者の知見や洞察が記述されていることが想定され、記述内容を集約や集計し、活用することが望まれている。

そこで、本プロジェクトでは、東日本大震災後に継続して支援活動を行なった団体を対象としたアンケートの自由記述欄を用いて、その活動の変化の分析を試みた。具体的には、東日本大震災における仏教系団体による支援活動のアンケートの自由記述欄に対し、テキストマイニングの手法を用いて、その活動の変化の分析を試みた。分析結果からは、支援活動の変化が、時間軸に沿って単語の出現頻度の変化として現れることと、単語間の関連性の変化として現れることが明らかになった。一方で、別の機会に行われた社会協議会の方へのインタビュー記録で同様の分析を試みた結果は、報告にまとめることができなかった。これは、活動内容が多岐に富んだことから、複数のインタビュー記録間で共通の話題を示すと考えられる「単語とその頻度」といった何らかの特徴を発見に至らず、分類できなかったことが原因である。

これらの結果から、インタビュー分析を振り返ると、テキストマイニングの技術を用いた分析により、自由記述欄に対しても、単語の出現頻度や共起する単語といった特徴に着目することで、その内容を推測できる可能性がある。加えて、同一形式の継続的な調査を行うことで、時系列上の変化を検出できる可能性もある。これにより、単語といった単純な特徴に着目するだけでも、アンケートの自由記述欄という相対的に扱いが難しい定性的なデータに対しても、内容の分類や集計ができることが明らかになった。

但し、この分析結果からは記述の変化の傾向を明らかにすることはできたが、仮説の提案や新しい知見を得ることは難しい、と言える。アンケートの分析により、次回の調査に向けた有用と考えられる仮説や知見を得るためには、分析結果が示唆する内容を洞察できる、調査目的や調査対象をよく理解している分析者が必要であろう。さらには、複数の自由な会話の中から共通の話題を見つけることは人間であっても難しいことから、アンケートの設計の時点で、テキストマイニングの技術の利用を想定して、記述内容を比較することが可能な質問項目の配置や質問項目の文言の選択が必要であろう。

齊藤 鉄也(Saito Tetsuya)

淑徳大学経営学部教授

2002年博士課程満期退学、修士(政策・メディア)

情報分析法、情報処理論、デジタルメディア論等の科目を担当

仏教ソーシャルワークに関する研究プロジェクトを振り返って

今回の研究プロジェクトで、本研究メンバーは「日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発」について、2016年から2018年にかけて東日本大震災の被災県である岩手県・宮城県・福島県の4県の被災を受けた社会福祉協議会及び後方支援に当たった社会福祉協議会の調査を行った。合計46社会福祉協議会から回答を頂いた。その中で、東日本大震災に際して寺院が担った福祉的実践活動の事例を複数得ることができた。

地域住民の生活基盤の一つである寺院が、震災を契機として地域との新たな連携に関する事例について振り返ってみる。

岩手県釜石市にある日澤山仙寿院では、東日本大震災の記憶と津波発生時の教訓を後世に伝えることを目的として2014年2月から韋駄天競争を開催している。

この「新春 韋駄天競争」は、「東日本大震災の記憶を千年先の未来に伝える」という意味を込めて、節分追儺会に合わせ仙寿院の主催で実施されている。

2019年、2020年の2回、研究メンバーで行事の実地調査を行った。2018年、仙寿院への訪問調査で芝崎住職から韋駄天競争開始に至る経緯や、東日本大震災時に境内や建物内に合わせ750名以上の被災者を受け入れたことなど、地域の中で寺院が果たすべき役割について伺うことができた。また、芝崎住職は2011年3月19日、釜石市内（大槌町）の17寺院による釜石仏教会立の立ち上げにも中心的役割を担った。

この韋駄天競争は、一寺院が単独で行う行事として開催されたわけではない。釜石市を応援するボランティア団体「釜石応援団 ARAMAGI Heart」が「震災で得られた教訓を未来に残して行きたい」津波からの避難を後世に残したいと考えていた。その趣旨に対して仙寿院住職が単なるイベントとしての行事ではなく、寺院で行っている節分行事と一緒にすることを決め「千年先の未来に伝える」地域の行事となった。

韋駄天競争は2020年2月に第7回目の開催となった。幼児から中高年齢者まで参加者は毎年100名を超えている。主催は日澤山仙寿院であるが、地元のボランティア団体、市の消防団も運営サポートに入っている。

こうした取り組みについて本研究グループでは、社会的活動から仏教社会福祉への視点で韋駄天競争が減災という社会的な活動であるだけでなく、仏教者として寺院が核となり地域住民の安寧を守り支える役割を担えるという視点に着目した。仏教寺院を、文化、教育、福祉における地域資源とみなし、更に地域社会に寄与しうる社会資源として再認識することができるのではと考えた。

今回の事例調査で、韋駄天競争を契機とした地域との連携について、寺院が地域福祉における社会資源として、寺院（住職）の認識の有無にかかわらず、その社会的活動を仏教社会福祉の視点で評価できるのではと考えた。また、今後、寺院が地域で果たす役割と方向性として、地域社会の様々な諸問題を仏教者の視点で地域住民や地域の団体との協同で解決していく役割を担う（える）意義を検討する契機となった。

改めて、各地の地域に根差した仏教寺院の福祉的実践活動事例に着目することが、仏教ソーシャルワーク研究の一助になるのではないかと考えている。

渡邊 義昭 Yoshiaki WATANABE

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所 プログラム研究員
2005年 開発学修士〔国際開発専攻〕（杏林大学、日本）

災害時や日常における寺院・僧侶の役割について

本研究を通して、東日本大震災以降の各種被災地の調査の結果、日頃から檀信徒組織という形で「地縁」を有する寺院には、災害時には一時避難所として、復興過程では集いの場として地域住民への支援の役割が期待されていることがわかった。実際にそのような役割を果たして来ている寺院も多数存在する。

しかしそうした寺院も、近隣住民と変わらぬ「被災者」であり、被災した檀信徒や困窮している地域住民に手を差し伸べたいという思いの一方、つまり「自らも被災者でありながら支援者の役割も求められる苦悩」が浮かび上がってきた。「被災者生活」という、経験したことのない状況の中、慣れないことでもあり、ノウハウもわからないため、その両方の役割をこなすことが負担になっている僧侶がいることもまた事実である。炊き出しなどに参加した方が良いことはわかっているが、なかなか足が向かずに、被災後1カ月ほど経って「最初の炊き出しに顔だけでも出しておけばよかったのだが…」と、初動が出来なかったことで、コミュニティーが復興していく過程に上手に関わっていくことが出来ない苦悩を語られるご住職もいた。

そのような被災地寺院の負担を減らすためには、①全国の宗派内寺院、または宗派や宗教を越えたネットワークの利用、②地域の組織である社会福祉協議会（以下、社協）との日常からのつながり、が必要である。

災害時には被災地での活動のみが災害支援ではなく、資金や物資、情報の収集と提供などは広域的に支援を行う必要がある。全国に組織を持つ宗派のネットワークが有用となってくる。浄土宗で言えば、義捐金活動はもちろん、滋賀・大分・熊本・佐賀・福岡などの寺院が檀信徒に1升ずつお米を持ち寄ってもらい各種被災地に20トンを超えるお米をお届けしてきた「米一升運動」もその一例であろう。逆に九州の水害の際には、山形・福島からのお米をお届けしている。また大本山にあがった鏡餅をつき直し、避難所や仮設住宅の住民、またひとり親支援や路上生活者支援団体にお配りする「鏡餅のお福わけ」活動、寺院の災害備蓄品を普段おいしくいただくことができるレシピをつけてお配りする「災害備蓄品のお福わけ」（レシピ考案：淑徳大学）といった活動もネットワークを活かした活動といえる。

もちろん宗派・宗教を越えたネットワークとなればなおさら選択の幅は広がる。平成23年に東京大学島藺進教授(当時)が発起人となり、宗教学者と宗教者で構成される宗教者災害支援連絡会もその役を担ってきた。

ただ、外部からの支援があったとしても、適切な支援先に適切なタイミングでお届けする難しさもある。多くの方は「どのように支援を集めるか」に意識が向くが、どんなに支援を集めたところでその活用先が確保されていなければ意味がなく「どこにお届けするか」の選定は実は集める

以上に難しい問題を含むことも調査を通してわかった。この点、社会福祉の専門家ではない寺院が被災者の支援をするにあたっては、その方法論や活動上の注意点など地域の特性もあるアドバイスを受ける必要がある。またいち早く支援を繋げていくためには、どこに、どのような支援を必要としている人がいるのか、の情報を的確にとらえることが重要で、その点でも社協との協働は有用である。ただ日常から行っている必要がある。普段からの協働を通じて、地域で今何が問題となっているのかを把握し、また社共との信頼関係を築くことが、災害時のスムーズな活動にとって重要である。

全体を通して、地域社会の災害時の対応や復興、また住民の精神的安定において寺院が果たすことができる役割があり、また期待もされていることがわかった反面、被災地寺院の活動にしても、外部からの支援活動にしても、これまでそのほとんどが宗や財団からの助成、あるいは寄付金頼りで、それ以外であれば一部寺院が負担することで行われていることが懸案事項でもある。一般企業や規模の大きい奉仕団体に比べて、寺院の支援活動は急性期にはそのスピード、規模ともに及ばない。その分、息の長い、継続的な活動が強みでもあり、また地域に根差す寺院としては信頼を得ていくためにも重要である。一方、助成金などは年限も限られており、使途も限定される場合もあり「目の前にある必要とされる支援」に使用できない場合もある。「助成が下りるか下りないかで支援できるか決まります」というのは、支援を受ける側からすると不安定で頼りないものである。外部助成に頼り過ぎず、かといって一部の寺院が無理な負担をすることなく支援が行える方法も、今後調査を通して検討していく必要がある。

※なお本文中では「寺院」は「僧侶」とほぼ同義として使用した。

宮坂 直樹 (Miyasaka, Naoki)

浄土宗総合研究所研究員

1999年 教育学修士 [英語教育専攻] (早稲田大学、日本)

寺院の災害対応研究、寺院版災害支援アドバイザーの有効性研究、自死ならびに自死遺族に関する研究、宗立宗門学校における宗教情操教育の現状調査等の研究を担当。

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」について

2011年に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に未曾有の被害をもたらした。被災地の復興に向けて多くの僧侶が被災地で様々な活動を行う中で伝統仏教界の意識も変わり、広く社会も伝統仏教界の社会貢献活動に注目するようになった。

ソフト・ハードの面から見ると、ハードとして寺院は被災者の避難所として機能し多くの困難を抱えながら被災地で重要な役割を果たした。

また、ソフトとしては僧侶の社会貢献がある。宗教者だからこそできる様々な活動が行われ、その中から「臨床宗教師」「臨床仏教師」など被災者の心に寄り添う活動が始まり、青年僧を中心に多くのボランティアが被災で災害支援にあたった。その活動には宗派単位・地位単位に止まらず今までの活動の枠を超えた様々な姿があった。

しかし、東日本大震災支援活動が長期にわたり被災地も徐々に復興していく中で、ボランティア活動は徐々に縮小し解散する団体も出てきた。また、伝統仏教教団内の災害支援部門も縮小する動きがあり、様々な場面得たノウハウが失われていく懸念を感じるようになってきた。

その時、「仏教社会的実践活動プラットフォーム」の構想が具体化に向けて動き出した。

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」に、東日本大震災などの災害支援に止まらず様々な社会貢献活動の経験とノウハウを集約し発信していくことは、今後の伝統仏教界にとって必要不可欠である。

今後、「仏教社会的実践活動プラットフォーム」をより活性化させていくには、「プラットフォーム」に参加する団体を増加させていくことが必要である。

それには、伝統仏教界の多くの宗派・都道府県仏教会・各種仏教団体が加盟する「公益財団法人全日本仏教会」と協力関係を築くとともに、各宗派の理解・協力を得ることが、「仏教社会的実践活動プラットフォーム」への参加団体増加には不可欠である。

伝統仏教界にとっても、今までの社会貢献活動を宗派を超えて共有するとともに、個々のボランティア団体の活動・経験を共有することにより、今後発生するであろう災害に備えることは必要とされる。

また、新たな形の社会貢献活動としての「おてらおやつクラブ」「こども食堂」のような活動にも理解を得ていくことによって、「仏教社会的実践活動プラットフォーム」がその役割をより一層を果たしていくことになると思う。

久喜 和裕 (KUKI KAZUHIRO)

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所プログラム研究員

曹洞宗清水寺住職

◆アジア国際社会福祉研究所運営委員会

・2016年 第1回運営委員会

(日 時) 2016年4月28日 15時00分～16時00分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 足立 叡、田中 秀親、千葉 浩彦、戸塚 法子、西塚 洋
秋元 樹、藤森 雄介

(オブザーバー) 長谷川 匡俊

(議 題) 1. 辞令の交付

2. アジア国際社会福祉研究所の概要説明

3. プログラム研究員・訪問研究員について

4. 大学院連携プログラムについて

5. その他

・2016年 第2回運営委員会

(日 時) 2016年10月6日 15時30分～16時30分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 足立 叡、田中 秀親、戸塚 法子、西塚 洋
秋元 樹、藤森 雄介、

(オブザーバー) 長谷川 匡俊、村上 信

(事 務) 相澤 修一郎

(議 題) 1. アジア国際社会福祉研究所の活動状況

2. 大学院連携プログラムについて

3. 支援事業関連「海外リサーチ」について

4. 支援事業関連「国内開発」について

5. その他

・2017年 第1回運営委員会

(日 時) 2017年6月1日 15時00分～16時30分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 磯岡 哲也、山口 光治、村上 信、西塚 洋
秋元 樹、藤森 雄介

(オブザーバー) 田宮 仁、石川 到覚

(事 務) 相澤 修一郎

(議 題) 1. 平成28年度アジア社会福祉研究所決算(案)

2. 平成28年度アジア社会福祉研究所活動報告

3. 平成29年度アジア社会福祉研究所予算(案)

4. 平成29年度アジア社会福祉研究所活動計画(案)

5. 平成29年度ビジティング・リサーチャー選考委員(案)

6. その他

・2017年 第2回運営委員会

(日 時) 2017年11月9日 15時30分～16時30分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 村上 信、西塚 洋、秋元 樹、藤森 雄介、

(オブザーバー) 長谷川 匡俊、田宮 仁、石川 到覚

(事 務) 相澤 修一郎

- (議 題) 1. アジア国際社会福祉研究所活動状況
2. ビジティング・リサーチャー論博プログラム
3. 支援事業「海外リサーチ」
4. 支援事業「国内開発」
5. 中期経常費計画
6. その他

・2018年 第1回運営委員会

(日 時) 2018年4月26日 15時30分～16時30分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 磯岡 哲也、山口 光治、西塚 洋、秋元 樹、藤森 雄介

(オブザーバー) 長谷川 匡俊、田宮 仁、石川 到覚

(事 務) 相澤 修一郎

- (議 題) 1. 平成29年度アジア国際社会福祉研究所決算(案)
2. 平成29年度アジア国際社会福祉研究所活動報告(案)
3. 平成30年度アジア国際社会福祉研究所予算(案)
4. 平成30年度アジア国際社会福祉研究所活動計画(案)
5. 平成30年度ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員の選考
について
6. 研究所研究員及び研究所訪問研究員の推薦について
7. 社会連携等の方針への意見について
8. その他

・2018年 第2回運営委員会

(日 時) 2018年11月1日 15時30分～16時15分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室

(参加者) 磯岡 哲也、山口 光治、戸塚 法子、村上 信、西塚 洋、秋元 樹、藤森 雄介

(オブザーバー) 長谷川 匡俊、田宮 仁、石川 到覚

(事 務) 相澤 修一郎

- (議 題) 1. ビジティング・リサーチャー論博プログラム
2. 支援事業「海外リサーチ」
3. 支援事業「国内開発」
4. 国際ソーシャルワーク関連

5. アジア国際社会福祉研究所の今後の在り方について
6. その他

・2019年 第1回運営委員会

(日 時) 2019年5月23日(木) 15時00分～17時00分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室2

(参加者) 磯岡 哲也学長、山口 光治副学長、大橋 靖史総合福祉学部長、秋元 樹所長、
藤森 雄介所長補佐、西塚 洋大学事務局長

(オブザーバー) 長谷川 匡俊最高顧問、田宮 仁顧問、下山 昭夫副学長

(事 務) 伊皆 修一

- (議 題)
1. 2018(平成30)年度アジア国際社会福祉研究所決算(案)
 2. 平成30年度アジア国際社会福祉研究所活動報告(案)
 3. 2019年度アジア国際社会福祉研究所予算(案)
 4. 2019年度アジア国際社会福祉研究所活動計画(案)
 5. 2019年度ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員の選考について
 6. 研究所訪問研究員の推薦について(資料12)
 7. 2020年度以降の研究所の組織と活動

・2019年 第2回運営委員会

(日 時) 2019年10月3日(木) 15時00分～17時00分

(場 所) 淑水記念館2階 同窓会会議室2

(参加者) 磯岡 哲也学長、山口 光治副学長、下山 昭夫副学長、大橋 靖史総合福祉学部長、
秋元 樹所長、藤森 雄介所長補佐、西塚 洋大学事務局長

(オブザーバー) 長谷川 匡俊最高顧問、田宮 仁顧問、下山 昭夫副学長

1. ビジティング・リサーチャー論博プログラム
2. 支援事業「海外リサーチ」
3. 支援事業「国内開発」
4. 国際ソーシャルワーク関連
5. 研究所訪問研究員の推薦について
6. 2020年度アジア国際社会福祉研究所事業計画
7. スリランカ仏教ソーシャルワーク記念切手の発行
8. その他

◆年間活動記録

2016年

- 4月5日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.1 刊行
8日 第1回所員会議
14日 第2回所員会議
21日 第3回所員会議
23日～25日 出張 宮城県①（藤森 雄介、渡邊 義昭）
28日 第4回所員会議
28日 第1回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
5月12日 第5回所員会議
19日 第6回所員会議
19日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.2 刊行
20日～22日 出張 愛媛県（秋元 樹）
26日 第7回所員会議
6月2日 第8回所員会議
6日～10日 出張 カンボジア①（藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ）
12日 日本共生科学会第8回淑徳大学東京大会に参加（報告：松尾 加奈）
16日 第9回所員会議
23日 第10回所員会議
26日～30日 出張 韓国① ソーシャルワーク教育社会開発世界会議に参加
（報告：菊池 結 参加：秋元 樹、松尾 加奈）
7月1日 第11回所員会議
1日 ブラジルから2教授の訪問
5日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.3 刊行
6日 臨時所員会議
8日 第12回所員会議
11日～20日 出張 ネパール ブータン（秋元 樹、藤森 雄介、松尾 加奈）
14日 ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員会
22日 第13回所員会議
22日～26日 出張 カンボジア② ASEAN 経済共同体（AEC）主催の国際会議に参加
（報告：郷堀 ヨゼフ）
26日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.4-2 刊行
27日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.4 刊行
28日 第14回所員会議
29日 タイから1教授と8名の修士課程院生の訪問
31日～6日 出張 韓国②（劉 光鍾、藤田 則貴）
8月15日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」 No.5 刊行
22日～28日 出張 タイ①（松蘭 祐子、安藤 徳明）
29日～3日 出張 ミャンマー（山口 光治、松尾 加奈）
9月5日 出張 福島県①（藤森 雄介、渡邊 義昭）
5日～9日 出張 モンゴル（小川 博章、郷堀 ヨゼフ）
11日～17日 出張 韓国③（劉 光鍾、藤田 則貴）
15日 第15回所員会議

- 27日～10月4日 出張 スリランカ 国際社会開発コンソーシアム
アジア太平洋支部及びペラデニヤ大学による国連SDGsに関する国際会議に参加
(セッション議長：秋元 樹)
- 9月29日 第16回所員会議
- 10月4日～9日 出張 ロシア アジア太平洋ソーシャルワーカーサミットに参加
(報告：郷堀 ヨゼフ)
- 5日 ワンワディ・ポンポクシン氏 (第1期ビジティング・リサーチャー) 来日
- 6日 第17回所員会議
- 6日 第2回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
- 12日 ワンワディ・ポンポクシン訪問研究員へのオリエンテーション
(プログラム全体の概要を説明)
- 13日 第18回所員会議
- 20日 第19回所員会議
- 20日～24日 出張 タイ② (松菌 祐子、安藤 徳明)
- 27日 第20回所員会議
- 11月1日 ～4日 出張 ラオス (藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、渋谷 哲)
- 8日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション①
- 10日 第21回所員会議
- 10日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション②③
- 11日～12日 出張 韓国④ (秋元 樹、郷堀 ヨゼフ)
- 14日～15日 出張 宮城県② (藤森 雄介、渡邊 義昭)
- 15日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション④
- 16日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション⑤
- 17日 第22回所員会議
- 21日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション⑥
- 22日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション⑦
- 24日 第23回所員会議
- 24日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション⑧
- 26日 淑徳大学社会福祉学会第26会大会へ出席
(問題提起：郷堀 ヨゼフ、発表：ワンワディ訪問研究員)
- 28日 論博プログラム招聘講師ズルカルナイン・A・ハッタ氏 セッション⑨
- 30日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.6 刊行
- 12月1日 第24回所員会議
- 2日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.6-2 刊行
- 6日 スリランカから僧侶を含む5名の訪問
- 8日 第25回所員会議
- 9日 マレーシア・サバ州立大学からアディ・ファハルディン教授の訪問。
- 10日 日本社会事業大学主催の第25回環太平洋社会福祉セミナー (東京) の第1セッション
を共催 (発表：ワンワディ・ポンポクシン訪問研究員)
- 15日 第26回所員会議
- 16日～19日 出張 中国① (金 潔)
- 22日 第27回所員会議
- 22日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.7 刊行
- 22日～23日 出張 宮城県③ (藤森 雄介、渡邊 義昭)

2017年

- 1月9日 ～12日出張 ベトナム（秋元 樹、松尾 加奈）
12日 第28回所員会議
19日 第29回所員会議、第1回研究員研究会
19日～21日 出張 岩手県①（藤森 雄介、渡邊 義昭）
26日 第30回所員会議
26日～27日 出張 宮城県④（藤森 雄介、渡邊 義昭）
2月2日 出張 福島県②（藤森 雄介）
9日 第31回所員会議
11日 ワンワディ・ポンボクシン訪問研究員に対し日本のソーシャルワーク事情の講義
及び千葉療護センターを見学
16日 第32回所員会議
16日～17日 出張 宮城県⑤（藤森 雄介、渡邊 義昭）
20日～22日 出張 岩手県②、宮城県⑥、福島県③（藤森 雄介、渡邊 義昭）
23日 第33回所員会議
24日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.8 刊行
27日～1日 出張 岩手県③（藤森 雄介、渡邊 義昭）
3月2日 第34回所員会議
2日～3日 出張 宮城県⑦（藤森 雄介、渡邊 義昭）
4日～7日 出張 中国②（石川 到覚、新保 祐光、金 潔）
5日～6日 出張 福島県④（藤森 雄介）
9日 第35回所員会議
10日～12日 出張 宮城県⑧ 岩手県④（藤森 雄介、渡邊 義昭）
16日 第36回所員会議
22日～23日 アジア仏教主要国を招いての第2回国際学術フォーラムを主催
24日 スリランカとの共同研究PBRの最終報告会議「フォーラム・プラス」を本研究所にて
開催
24日 明治学院大学における国際シンポジウムへ出席
（ワンワディ・ポンボクシン訪問研究員）
30日 第37回所員会議、第2回研究員研究会

2017年

- 4月 6日 第1回所員会議
14日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.9 刊行
20日 第2回所員会議
20日～24日 出張 岩手県①、宮城県①、福島県①（藤森 雄介、渡邊 義昭）
5月 2日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション①
3日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション②
8日～14日 出張 スリランカ ナガナンダ国際仏教大学開学記念学術シンポジウムへの参加
（長谷川 匡俊、講演：秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ）
18日 第3回所員会議
21日～22日 出張 宮城県②（藤森 雄介、渡邊 義昭）
21日～24日 出張 中国① 第4回実践調査国際会議への参加（発表：秋元 樹）
25日 第4回所員会議

- 6月1日 第1回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
8日 第5回所員会議
8日～9日 出張 宮城県③（藤森 雄介、渡邊 義昭）
出張 東京都① 日本共生科学会第9回八王子大会への参加（発表：松尾 加奈）
15日 第1回ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員会
15日～19日 出張 マレーシア①（藤森 雄介、松尾 加奈）
17日 第2回ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員会
22日 第6回所員会議
22日～24日 出張 岩手県②（藤森 雄介、渡邊 義昭）
24日～29日 出張ザンビア共和国 2017 ソーシャルワーク・教育・社会開発アフリカ合同会議
への参加（発表：松尾 加奈）
- 7月 2日～6日 出張 ベトナム①（秋元 樹、相澤 修一郎）
17日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション③
20日 第7回所員会議
23日～24日出張 岩手県③（藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 8月 7日～9日 出張 福島県②（藤森 雄介、渡邊 義昭）
17日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション①
18日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション②
25日～26日 出張 東京都②（藤森 雄介、渡邊 義昭、須田 めぐみ）
29日～30日 出張 福島県③（藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 9月 4日～ 5日 出張 茨城県（藤森 雄介）
8日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション③
8日～11日 出張 京都府 日本仏教社会福祉学会第52回大会への参加
（報告：藤森 雄介、渡邊 義昭）、長野県
14日 第8回所員会議
25日～29日 出張 中国② アジア太平洋地域ソーシャルワーク会議への参加
（秋元 樹、発表：郷堀 ヨゼフ、松尾 加奈）
- 10月3日～7日 出張 ベトナム②（長谷川 匡俊、秋元 樹、藤森 雄介、中村 裕雅）
8日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション④
11日～15日 出張 マレーシア② ボルネオ国際ソーシャルワークシンポジウムへの参加
（基調講演：秋元 樹）
12日 第9回所員会議
12日～14日 出張 福島県④（藤森 雄介、渡邊 義昭）
13日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション④
22日～23日 出張 岩手県④、宮城県④（藤森 雄介、渡邊 義昭）
26日 第10回所員会議
30日 デチェン・ドマ氏（第2期ビジティング・リサーチャー）来日
- 11月2日 デチェン・ドマ訪問研究員へのオリエンテーション（プログラム全体の概要を説明）
7日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.10 刊行
9日 第11回所員会議
9日 第2回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
12日～13日 出張 福島県⑤（藤森 雄介）
16日 インドネシアでの社会政策・社会開発に関する国際会議へ出席（発表・基調講演：ワン
ワディ・ボンポクシン訪問研究員）

- 27日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.11 刊行
 30日 第12回所員会議
 12月1日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション⑤
 4日～12日 ベトナム国家大学と共催でベトナム専門家会議を開催（参加者：山口 光治、秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、松尾 加奈、デチェン・ドマ）
 13日 タイから教授1名と修士課程院生6名の訪問
 11日～16日 出張 カナダ（稲垣 美加子、郷堀 ヨゼフ）
 21日 第13回所員会議
 23日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション⑤

2018年

- 1月2日～7日 出張 バングラデッシュ ソーシャルワークと持続可能な社会の発展に関する国際会議への参加（発表：郷堀 ヨゼフ）
 11日 第14回所員会議
 15日 論博プログラム「論文作成指導」セッション①
 16日 論博プログラム「論文作成指導」セッション②
 17日 論博プログラム「論文作成指導」セッション③
 18日 論博プログラム「論文作成指導」セッション④
 18日 アメリカ、イタリアから教授ら2名の訪問
 20日 第3回国際学術フォーラムを主催、論博プログラム「国際ソーシャルワーク」セッション①
 31日 第15回所員会議
 2月7日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.12 刊行
 8日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション⑥
 14日 論博プログラム「論文作成指導」セッション⑤
 15日 第16回所員会議
 16日 論博プログラム「国際ソーシャルワーク」セッション②
 21日 論博プログラム「国際ソーシャルワーク」セッション③
 22日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション⑦
 28日 第17回所員会議
 3月1日 論博プログラム「国際ソーシャルワーク」セッション④
 2日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション⑧
 5日～9日 出張 ラオス（渋谷 哲、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ）
 9日～11日 出張 岩手県⑤、宮城県⑤、福島県⑥（藤森 雄介、渡邊 義昭）
 14日 第18回所員会議
 14日 論博プログラム「国際ソーシャルワーク」セッション⑤
 21日～23日 出張 新潟県（秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、松尾 加奈）
 第1回研究所研究会
 25日～30日 出張 アメリカ（稲垣 美加子、郷堀 ヨゼフ）
 29日 第19回所員会議

2018年

- 4月 5日 第1回所員会議
 12日 ～14日出張 岩手県、宮城県（藤森 雄介）

- 15日 ～23日 出張 タイ、スリランカ (秋元 樹)
- 19日 第2回所員会議
- 21日 ～22日 出張 宮城県 (藤森 雄介、渡邊 義昭)
- 26日 第1回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
- 27日～5月5日 出張 アメリカ (秋元 樹、松尾 加奈)
- 5月 10日 第3回所員会議
- 24日 第4回所員会議
- 25日 ビジティング・リサーチャー論博プログラム選考委員会
- 6月 4日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.13 刊行
- 6日 第1期VR 特別養護老人ホーム淑徳共生苑・千葉市若葉保健福祉センター訪問
- 7日 第5回所員会議
- 12日 出張 東京都 (藤森 雄介)
- 15日 第2期VR 千葉ダルク (薬物依存者生活支援団体) 訪問
- 18日 論博プログラム「ソーシャルワーク原論」セッション①
- 19日 論博プログラム「ソーシャルワーク原論」セッション②
- 20日 論博プログラム「ソーシャルワーク原論」セッション③
- 21日 第6回所員会議
- 論博プログラム「ソーシャルワーク原論」セッション④
- 22日 論博プログラム「ソーシャルワーク原論」セッション⑤
- 7月 2日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.14 刊行
- 4日 ～8日 出張 アイルランド (松尾 加奈)
- 12日 第7回所員会議
- 18日 ～19日 出張 熊本県、福岡県 (藤森 雄介、宮坂 直樹)
- 23日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.15 刊行
- 26日 第8回所員会議
- 31日～8月1日 出張 京都府 (藤森 雄介、久喜 和裕)
- 8月 2日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.16 刊行
- 24日～26日 出張 奈良県 日本仏教看護・ビハーラ学会第14回年次大会での発表
(藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ)
- 27日～30日 出張 パキスタン (藤森 雄介、松尾 加奈)
- 9月 6日 第9回所員会議
- 8日～9日 出張 京都府 日本宗教学会第77回学術大会での発表 (藤森 雄介)
- 13日～15日 出張 京都府 浄土宗総合学術大会での発表、長野県 (藤森 雄介)
- 14日～17日 出張 ベトナム (郷堀 ヨゼフ、菊池 結)
- 19日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.17 刊行
- 20日～23日 国際会議 モンゴル国立大学主催仏教ソーシャルワークシンポジウムを後援 (参加者：
秋元 樹、郷堀 ヨゼフ、相澤 修一郎)
- 20日 第1期VR 研究所へ論文提出
- 21日 インドネシア及びマレーシアから来訪
- 27日 第10回所員会議
- 28日～30日 出張 山梨県 日本仏教社会福祉学会第53回学術大会での発表
(秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、渡邊 義昭)
- 29日 第1期VR 帰国
- 10月 11日 第11回所員会議

- 18日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.18 刊行
- 25日 第12回所員会議
第1回特別企画研究会を開催
- 11月 1日 第2回アジア国際社会福祉研究所運営委員会
第2回特別企画研究会を開催
- 3日～4日 出張 神奈川県（郷堀 ヨゼフ）
- 6日～8日 出張 岩手県、宮城県（藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 8日 第13回所員会議
- 9日～10日 出張 京都府（郷堀 ヨゼフ、松尾 加奈、相澤 修一郎）
- 12日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.19 刊行
- 15日～22日 出張 スリランカ（秋元 樹、松尾 加奈）
- 16日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション①
- 17日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション②
- 20日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.20 刊行
- 26日～28日 出張 京都府、滋賀県（藤森 雄介、久喜 和裕）
- 29日 第14回所員会議
- 12月 4日～8日 出張 ベトナム 仏教文化に関する国際シンポジウムでの発表（郷堀 ヨゼフ）
- 5日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション③
- 13日 第15回所員会議
- 18日 出張 東京都（藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 19日 第3回特別企画研究会を開催
- 20日 第16回所員会議
第1期VR 博士論文予備審査願提出
- 21日～23日 国際会議 龍谷大学と共催でシンポジウムを開催
参加者：山口 光治、田宮 仁、秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、松尾 加奈、
相澤 修一郎、野中 夏奈、渡邊 義昭、安藤 徳明、劉 光鍾、藤田 則貴、
デチェン・ドマ

2019年

- 1月 10日 イタリアなどから6名の研究者が来訪
国際会議 IASSW 理事を招いて円卓会議を開催（第2期VR参加）
- 17日 第17回所員会議
「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.21 刊行
- 17日～18日 出張 岩手県（藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 27日～29日 出張 長野県、滋賀県、京都府（藤森 雄介、久喜 和裕）
- 31日 第18回所員会議
- 2月 1日～3日 出張 宮城県、岩手県（秋元 樹、藤森 雄介、渡邊 義昭）
- 4日～5日 出張 東京都 浄土宗総合研究所災害支援アドバイザー研究班研修会への参加
（藤森 雄介、安藤 徳明、須田 めぐみ、荻須 真尚）
- 7日 第19回所員会議
- 11日～17日 国際会議 スリランカワークショップを開催
（参加者：山口 光治、秋元 樹、藤森 雄介、郷堀 ヨゼフ、デチェン・ドマ）
- 15日 出張 京都府（久喜 和裕）
- 21日 第20回所員会議
- 22日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅰ：定量的調査」セッション④

- 22日～28日 出張 韓国（劉光鍾、藤田則貴）
 24日～3月3日 出張 カナダ、アメリカ（稲垣美加子、郷堀ヨゼフ）
 25日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション①
 26日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション②
 27日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション③
 27日～3月3日 出張 台湾（藤森雄介、吉水岳彦）
 3月 3日～5日 出張 京都府、和歌山県（藤森雄介、久喜和裕）
 7日 第21回所員会議
 10日～11日 出張 岩手県（藤森雄介）
 13日～17日 出張 バングラデシュ 第1回国際会議にて基調講演（秋元樹）
 19日 「アジア国際社会福祉研究所 kara」No.22 刊行
 22日 論博プログラム「調査研究法と調査研究設計Ⅱ：定性的調査」セッション④
 28日 第22回所員会議
 第1期VR 博士論文予備審査合格

◆2019年度 主な活動記録

海外リサーチ

1. 研究成果報告及び研究活動に関する情報発信

- 5月 基調講演 ブータン：ソーシャルワークに関する国際会議
 7月 紹介コーナー 国内：日本ソーシャルワーク学会
 8月 紹介コーナー 国内：日本仏教看護・ビハーラ学会
 9月 紹介コーナー 国内：日本仏教社会福祉学会
 9月 発表 フィンランド：国際ワークショップ
 9月 学会発表 国内：日本社会福祉学会
 12月 第4回国際学術フォーラム（東京品川）

2. 出版物

- 7月 ラオス調査に関する報告書（渋谷プログラム研究員）
 11月 龍谷大学との共催シンポジウムに関する報告書
 3月 スリランカのワークショップに関する報告書
 3月 第4回国際学術フォーラム報告書（英文）
 3月 研究叢書4号（和文）タイにおける仏教ソーシャルワーク
 3月 研究叢書5号（英文）スリランカにおける仏教ソーシャルワーク
 3月 研究叢書6号（英文）北米の視点からみた仏教ソーシャルワーク

3. 海外出張・海外調査

- 5月 ブータン（秋元所長）
 8月 ラオス（渋谷プログラム研究員）
 11月 カナダ（ヨゼフ、稲垣プログラム研究員）

◆「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」助成出版物一覧 発行順

- * 「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」助成
- 1* 「宗教とソーシャルワーク ～仏教の場合～イスラム教の場合～」2016年9月（文部科学省平成28年度助成）日本社会事業大学主催・淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター共催「第24回環太平洋社会福祉セミナー アジア型ソーシャルワークを構築する」2015年12月12・13日の会議録の増し刷り
- 2* Akimoto, Tatsuru, sv. Fujioka, Takashi, hd. Matsuo, Kana, ed. Religion and Social Work: How Does Islamic “Social Work” Operate in Asia? March 2017. 日本社会事業大学との共同研究報告書（文部科学省平成28年度助成）
- 3* “How is Asian Buddhism Involved in People’s Life?” Shukutoku University 2nd International Academic Forum on Buddhist Social Work Program, March 2017（文部科学省平成28年度助成）
- 4* 「第2回淑徳大学国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク アジアの仏教は人びとの生活の問題にどうはたらくか」プレゼンテーション資料2017年3月
- 5* Akimoto, Tatsuru, sv. Gohori, Josef and Etsuko Sakamoto, ed. How is Asian Buddhism involved in People’s Life? Shukutoku University 2nd International Academic Forum on Buddhist Social Work Proceedings, September 2017（文部科学省平成29年度助成）
- 6* 秋元樹監、郷堀ヨゼフ、佐藤成道編 「第2回淑徳大学国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク：アジアの仏教は人びとの生活の問題にどうはたらくかー 仏教ソーシャルワークの探求ー ーアジア仏教ソーシャルワーク研究ネットワークの形成ー」報告書2017年11月（文部科学省平成29年度助成）
- 7* Gohori, Josef, Tatsuru Akimoto, Yusuke Fujimori, Yui Kikuchi and Kana Matsuo, ed. From Western-rooted Professional Social Work to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research Series No.0) , Gakubunsha, 2017（文部科学省平成29年度助成）
- 8* Nguyen Hoi Loan, ed. Vietnam Buddhism: From Charity to Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research Series No.2) , Gakubunsha, 2017（文部科学省平成29年度助成）

- 9* Gohori, Josef and Hiroaki Ogawa, ed. Growth of the Buddhist Social Work Activities in Mongolia (Research Series No.1) , Gakubunsha, 2018 (文部科学省平成 29 年度助成)
- 10* 西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ 0 号) 学文社 2018 年 3 月 (文部科学省平成 29 年度助成) 著者：秋元樹、H.M.D.R. ヘラ (スリランカ)、石川到覚、N.H. ロアン (ベトナム)、S. オノパス (タイ)、K. サンボ (ネパール) 編者：郷堀ヨゼフ
- 11* Demberel, Altaibaatar, Erdene, Ogawa, Gohori, ed. Growth of the Buddhist Social Work Activities in Mongolia (Series “Exploring Buddhist Social Work” No.1) ※モンゴル語
- 12* Shibuya, Satoshi and Sanesathid, Outhoumphone, ed. The Current Situation of Buddhist Social Work in Lao PDR (Research Series No.3) , Gakubunsha, 2018 (文部科学省平成 30 年度助成)
- 13* Akimoto, Tatsuru and Maki Hattori, ed. Working Definition and Current Curricula of Buddhist Social Work, September 2018 (文部科学省平成 30 年度助成)
- 14* モンゴルにおける仏教ソーシャルワークの誕生と成長～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ 1 号) 学文社 2018 年 10 月 (文部科学省平成 30 年度助成) 編者：郷堀ヨゼフ、小川博章
- 15* Batkhisihg, Adilbish, Bulgan, Tumeekhuu, Bujinlkham, Surenjav, Dagzmaa, Baldoo, Demberel, Sukhbaatar, Tumennast, Gelenkhuu, and Yanjinsuren, Sodnomdorj, ed. Development of The Asian Buddhist Social Work Activities, December 2018 (文部科学省平成 30 年度助成)
- 16 Matsuo, Kana, Tatsuru Akimoto and Maki Hattori, ed. What Should Curriculums for International Social Work Education Be? January 2019
- 17 松尾加奈、秋元樹、服部麻希編 「第 3 回淑徳大学国際学術フォーラム 国際ソーシャルワーク教育のカリキュラムはいかにあるべきか」 報告書 2019 年 3 月
- 18* ラオスにおける仏教ソーシャルワーク実践の概説～仏教ソーシャルワークの探求～ (研究シリーズ 3 号) 学文社 2019 年 2 月 (文部科学省平成 30 年度助成) 著者：オートンフォン・サネサティッド、サイチャイ・シラデ、カンシング・シリパンヤ、ソンチャイ・ブリダン 編著：渋谷哲

- 19* ベトナム仏教－慈善事業から仏教ソーシャルワークへー～仏教ソーシャルワークの探求～
（研究シリーズ2号）学文社 2019年3月（文部科学省平成30年度助成）著者：グエン・ロイ・
ロアン、グエン・ティ・タイ・ラン、ブイ・タイン・ミン、グエン・フウ・クアン、グエン・ト
ウ・トラン、ルオン・ビック・トゥイ 編者：グエン・ロイ・ロアン 和文編者：菊池結、郷堀
ヨゼフ
- 20* Matsusono, Yuko, ed. Buddhist Social Work: Roots and Development of the Social Welfare
System in Thailand (Research Series No.4) , Gakubunsha, 2019（文部科学省平成30年度助成）
- 21* Shibuya, Satoshi, ed. Buddhist Social Work in Lao PDR –research report-. July 2019.（文
部科学省平成31年度助成）
- 22* 郷堀ヨゼフ編「2018年度龍谷大学国際社会文化研究所・淑徳大学アジア国際社会福祉研
究所共同研究シンポジウム開催事業 アジアの仏教ソーシャルワーク ～日本が忘れてきたもの
～」報告書 2019年10月（文部科学省平成31年度助成）
- 23* 「第4回国際学術フォーラム 仏教ソーシャルワーク 仏教ソーシャルワークの旅」プレ
ゼンテーション資料 2019年12月（文部科学省平成31年度助成）
- 24* タイにおける社会福祉の起源と発展～仏教ソーシャルワークの探求～（研究シリーズ4
号）学文社 2020年3月（文部科学省平成31年度助成）著者：ソパ・オノパス、プラマハ・ス
ラカイ・チョンブンワット、安藤徳明 編者：松園祐子
- 25* Tatsuru, Akimoto, ed. Buddhist Social Work in Sri Lanka Past and Present: Exploring
Buddhist Social Work (Research Series No.5) , Gakubunsha, 2020（文部科学省平成31年度助
成）
- 26* Mikako, Inagaki, Koko, Kikuchi, Josef, Gohori, ed. Towards New Horizon Beyond the
Buddhist Social Work: Exploring Buddhist Social Work (Research Series No.6) , Gakubunsha,
2020（文部科学省平成31年度助成）
- 27* Gohori, Josef, ed. The Journey of Buddhist Social Work～Exploring the Potential of
Buddhism in Asian Social Work～, March 2020.
- 28* Kana, Matsuo, Tatsuru Akimoto, ed. Round-table Discussion on the Future of the IASSW
～What the IASSW Expects from Japanese Members and What Japanese Members Expect from
the IASSW～ March 2020.

29* Tatsu, Akimoto, ed. The Next Action Based on the Working Definition of Buddhist Social Work and Beyond -Theory, Research, Education and Practice- March 2020.

30* 東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設（仏教寺院・神社等）との連携に関するアンケート調査 報告書 2020年3月（文部科学省平成31年度助成）

第2部 国際学術フォーラムの記録

(支援事業の成果と今後の展望)

From the ABC Model to the Definition of Buddhist Social Work

*Josef Gohori
ARIISW, Shukutoku University*

Introduction of the research project, an overview of main targets, methods, and core findings, focusing on the ABC model and working definition of the Buddhist social work.

A few years ago, researchers and experts from Shukutoku University were asked to assist the development of social work education programs for Buddhist priests in Sri Lanka. When the Japanese team introduced some basic social work concepts, methods, and theories to the Sri Lankan priests and monks, they were surprised by their reaction. “What’s new?!” After hearing the introduction to social work theory and practice, Buddhist monks said that social work was almost the same they had been doing for more than 2500 years. At this moment, we realized that there is an unexplored field of social work activities provided by Buddhists for a long time. This is one of the causes that have started our present research project on Buddhist social work.

Subject and purpose of the research project

“Exploring Buddhist Social Work” is a research project coordinated by the Asian Research Institute for International Social Work at Shukutoku University, Japan. The project is focused on social work and other social activities provided by Buddhists and Buddhist temples in the Asian region. Target countries and regions are (in alphabetical order) Bhutan, Cambodia, China, Laos, Mongolia, Myanmar, Nepal, South Korea, Sri Lanka, Taiwan, Thailand, and Vietnam; mainly-Buddhist societies in the Asian region. The purpose of this international joint research project is very simple. Since various activities provided by Buddhist around Asia are still not recognized and (except some interest in socially engaged Buddhism) there no research has been done in this field, we wanted

- 1) to know the actual state of Buddhist social work activities in mainly-Buddhist countries in Asia
- 2) to collect basic data necessary to systematize the concept of Buddhist social work
- 3) to publish research book series helping students as textbooks (or reference books) to learn about Buddhist social work

The project is being international, interdisciplinary, and interfaith. ARIISW is now working together with our colleagues and counterparts from more than 10 Asian countries and regions. This is another characteristic of this international joint research project which aims to build a research network to connect researchers, practitioners, and scholars from various countries and regions. Together we conduct meetings, workshops, fieldwork, and research assistance to explore the Buddhist social work, to systemize it, and to set the definition of it.

Core findings

As a result of our research activities, we can see, that Buddhist temples and monasteries are not only religious centers but also provide a huge number of social work activities. In some cases, not only Buddhist temples, but also Buddhists followers, Buddhist monks and nuns as individuals, and Buddhist NGO's, etc. are involved in those activities. We can see activities for children, the elderly, and the poor, which are typical for Buddhist social work and very similar to Western-rooted social work as developed in Europe and the US. But we can find also educational programs, hospitals for chronic-ill patients and HIV/AIDS patients, rehabilitation centers, agricultural support, donations, building roads and bridges, protecting forests, and many other activities provided by Buddhists. Temples serve as institutions for religious practice and at the same as places for social activities, medical care, and social work.

When compared to the Global Definition of Social Work Profession (2014) we can find that above-mentioned activities are different in

- 1) Target (Some activities are targeted on protecting forests, mangroves, etc., not only on humans. But in results they aim to improve the human environment or living conditions.),
- 2) Existence of Professional Social Workers and Professional Standards (There are almost no practitioners educated as social work professionals. Only a few activities follow professional standards as set in the western-rooted social work.)
- 3) Social Work Education
- 4) Core Concepts and Theories
- 5) Methods
- 6) Areas of Activities (There are many activities focused on medical care, construction, infrastructure, etc., showing that Buddhist social work operates in a broader context than western-rooted professional social work.)

Above mentioned differences show that the Buddhist social work (even if we can see many similarities) has been shaped in a different way than western-rooted professional social work. Similar points and differences may be the background for discussions on the Buddhist social work definition and its framework. At the present moment, research activities have been finished and books published in Mongolia, Vietnam, Laos, and Thailand. I hope we will share reports from Sri Lanka and other countries and regions very soon. Those will help us to

explore the Buddhist social work activities in more detail and to discuss the social work in a broader, international context.

The ABC model

This model was introduced by Akimoto (2017), allowing us to distinguish between Western-rooted, indigenized-, and indigenous models of social work in Asia. When we focus on social- and community activities provided by Buddhist temples, monks, and nuns in various Asian regions, we can see that many of them following the Western-rooted model (A) as defined in the global definition. Using the same approaches, methods, and theories makes it a copy of its “Western” original. However, in some cases, these copies don’t work properly in the same way as their originals do in Western Europe or North America. That is the reason why many activities, approaches, and methods have been indigenized or modified to fit the target society and its cultural background. Those may be called as the model B. But there is also the model C, the original, indigenous model of social work reflecting characteristics of the society and its culture, using different methods and approaches while being underpinned by completely different values, beliefs, and principles. In my previous texts, I have clarified how different might be some core values and interpretations (Gohori, 2019). Moreover, this ABC model may be explained and verified by tracking the historical development and expansion of social work (Gohori, 2017).

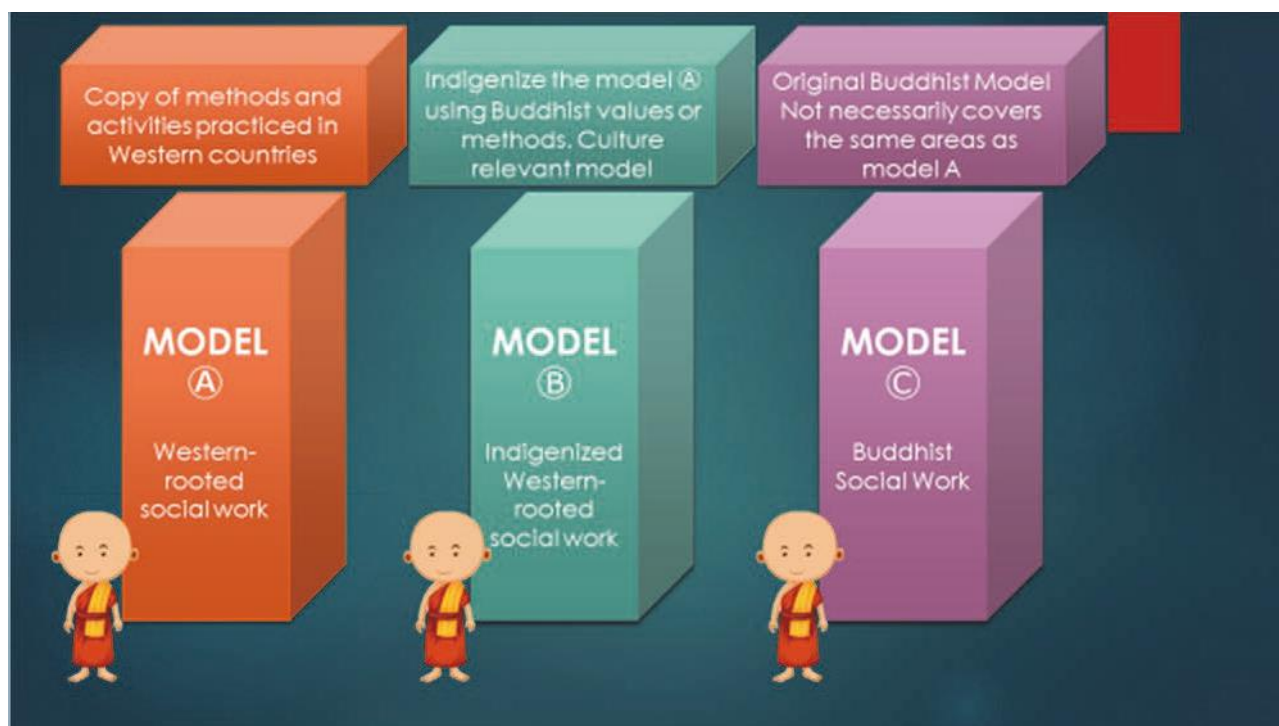


Fig. 1 The ABC model

Beyond the Project on Buddhist Social Work: What is next?

In this text, I have already pointed out some differences and commonalities between Buddhist social work and Western-rooted practice. As written later in this report, a research project called Can/Can't is one of the attempts to clarify and empirically prove some characteristics of Buddhist social work practice (cf. p. 51). In my previous articles, I have discussed the need to consider core concepts and values. We have to pay more attention to cultural aspects and recognize that the same term and definitions may be interpreted in various ways depending on the cultural background. This will inevitably lead us to the discussion on a paradigm underlying social work practice and theories. This step is necessary to establish the model C (Gohori, 2019). Some authors refer to the working definition of Buddhist social work adopted during the Hanoi Expert Meeting in 2017. However, we have to refine both definitions. One another issue is the profession. We have already professional social workers, but we have to ask if we need professional Buddhist social workers. Do we need them? This may bring us in front of another question. What is social work? And who are people conducting social work? I hope that future activities of ARIISW, of our colleagues, and the Buddhist social work research network members, will address these questions and issues.

References

- Akimoto, T. (2017). The ABC model. In Gohori, J. (ed) *From The Western-rooted Professional Social Work to the Buddhist Social Work*. Tokyo, Japan: Gakubunsha.
- Gohori, J. (2017). The 5000 years old story In Gohori, J. (ed) *From The Western-rooted Professional Social Work to the Buddhist Social Work*. Tokyo, Japan: Gakubunsha.
- Gohori, J. (2018). Introduction of the International Joint Research Project on Buddhist Social Work. In Adilbish, Demberel (eds.) *Report on the international joint symposium on the development of Buddhist social work in Asia*. Ulaanbaatar, Mongolia: National University of Mongolia.
- Gohori, J. (2019). Religion and social work. In Tran Nhan Tong Institute (eds) In *The Cultural and Philosophical Uniqueness of Tran Nhan Tong and Truc Lam Buddhist Sect*. Hanoi, Vietnam: Vietnam National University Press, pp.107-114.

Asian Buddhist Countries: What Have We Done?

What Have We Achieved?

Buddhist Social Work Practice with the Drug Users: Case Study from Phap Van Temple and Rehabilitation Center No2

Nguyễn Hồi Loan, Nguyễn Thị Kim Hoa, Nguyễn Thị Thái Lan,

Bùi Thanh Minh

University of Social Sciences and
Humanities, Vietnam National University



The philosophy of Buddhism has been applied in solving a practical problem: helping drug addicts to detox. While the western model shows some difficulties in providing effective support to drug abusers in Vietnam, the Buddhist approach can open a “new way” in helping this vulnerable group. Buddhist social work is also consistent with the trend of "authentication" of professional social work in the 21st century. Through our comparative survey conducted in a temple and a drug detox center in Hanoi, there is evidence to demonstrate that Buddhist social work practice with drug addicts more successful in terms of satisfaction level and in reducing the number of relapses. The research results also

point out that the differences in results come from differences in approaching philosophy, detoxification processes, and support as well as the supportive relationships between two models.

In Buddhist philosophy, human suffering is due to greed, hatred, and delusion is due to "craving". There are three forms of dukkha, from physical and mental pain; suffering from dissatisfaction with changes as well as the interaction between action and karma. Therefore, according to Buddhism, eradicating suffering means eradicating “craving”, including greed, hatred, and delusion. The process of eradication of suffering must be based on the Eightfold Path. Because of such conception, Phap Van monks considered drug addiction as suffering due to "craving" for drugs. That suffering is suffering physically and mentally; unpredictable future situations and both



karma in the past and future. Therefore, when applying the Buddhist philosophy to help drug users, the temple focuses on strengthening personal strength to abandon the drug-induced "craving" by changing thoughts and enhance physical health. Besides, drug addicts are also encouraged to conduct many good deeds to solve their karma. That is the beginning of the differences and the success of this model compared to the state-run rehabilitation center model.

Keywords: *Buddhist social work, Drug users, authentication*

A Journey with Asian Buddhist Countries: Buddhist Social Work in Thailand

Sopa Onopas

Social Work Professions Council,
Thailand

Introduction

A journey with Asian Buddhist Countries was set out to survey Buddhist social work activities and reasons for monks, nuns, faithful followers and temples in Asian to engage in social work activities. Thailand first joined the Buddhist Social Work Project with Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku University in 2015 through the research entitled “Buddhist Social Work Activities in Thailand.” The research aimed to study and collect information on Buddhist temples, monks, nuns, and followers in Buddhist organizing Buddhist social work activities on what kind of activities they performed, and why they performed such social work activities.



Methods

The research methodology was a qualitative study examining the social work activities carried out by the Buddhist monk leaders of five well-known temples in Thailand. The methodology comprised of survey questionnaires in Chiang Mai Province. Only the qualitative findings corresponding to the five temples are reported in this article.

Results

The finding in the social work activities carried out in the five case studies is probably an emphasis on creating an environment where individuals and communities live in harmony and cultivate mutual support such as schools rendering services in both religion and general educational curricula for the communities, health care centers, places for learning and sharing information on traditional Thai herbs and medicine, palliative care for cancer and HIV/AIDS patients, shelters for the poor, orphans, and the elderly, meeting spots of members of the communities for dispute resolution, and venues for cultural and religious festivals.

The result from the creative initiation of abbots in their effort to alleviate or end the suffering of community members and societies. Another conclusion is that it is crucial both to relieve the discomfort of the body through secular means, such as physical and financial resources and to enlighten sufferers about the uncertainty of life and ultimately to calm their souls through religious approaches. Moreover, the Buddhist teaching of The Sangahavatthu 4 and Brahmavihara 4 are the major reason that the 5 monks provide social work activities to people. Sangahavatthu is a dharma precept aimed at integrating family and community members into a bonded group so that they can be more helpful to one another.

Sangahavatthu 4 include: giving, sacrificing (Dana), kind and polite words (Piyavaca), mutual assistance (Atthacariya), displaying of consistent behavior deemed appropriate as per one's social status (Samanattata). The Brahmavihara 4 principles apply to the virtues of people in power as well as the kind-hearted people. The four Brahmavihara virtues include Loving-kindness (Metta), Compassion (Karuna), Appreciative joy (Mudita), Equanimity (Upekkha).

Discussion

The five Buddhist monks reveal important Buddhist teaching that the pursuit of helping fellow human beings overcome suffering or life obstacles should be based on the principle of rationality. In Buddhism, it is believed that every event that occurs will be a precursor to another event. Therefore, a problem that arises accords with its cause, and the right solution is one in which the cause is dealt with. Once the cause is addressed, the problem and suffering resulting from such a problem will be ended - a law of nature. This Buddha teaching being applied in the present context, social work activities should comprise physical support in tandem with mental support that will not cause suffering to oneself or any parties involved to gather momentum and be sustainable. All this seems to reveal an independent social work model that is not influenced by western social work ideology focusing mainly on the needs, rights, and freedom of varied groups of people.

The researchers participating in the Buddhist Social Work in Asia Program learned that although each country has a dominant denomination of Buddhism, the core value is to teach people to realize the nature of life is suffering. Hence, to end suffering, people need to treat other people and beings nicely and equally, with the same standards. Buddhist monks and temples do not isolate themselves from society, or only practice Buddhism to reach Nirvana. Instead, Buddhist monks help people face their challenges and problems. They unite people and communities in society. Finally, in 2017, the researchers in the program gathered together, defining Buddhist social work as:

“Buddhist Social Work is human activities to help other people solve or alleviate life difficulties and problems in life based on the Buddha-nature. Buddhist Social Work always finds causes to work on both the material or social arena, as well as in the humane, or inner arena, working on both arenas in tandem. Its

fundamental principles include compassion, loving-kindness, and mutual help and interdependency, and self-reliance. The central value is the Five Precepts. The ultimate goal is to achieve the wellbeing of all sentient beings and peace.” (Akimoto, T., 2017)

Conclusion

The definition of Buddhist social work is different from professional social work, as defined by the International Federation of Social Workers (IFSW). Buddhist social work is not a profession. It does not focus on the social structures leading to injustice or discrimination—necessitating people to fight for their rights and equality. Buddhist social work encourages suffering people to: understand their problems are part of life; solve problems on their own; and be self-sustaining. Buddhist monks, nuns, and followers are key in using the ethical principles of Buddhism to help people and other beings live together in harmony, despite constant and dynamic changes in the world.

References

Matsusono, Y. (ed) (2019). *Buddhist Social Work: Roots and Development of Social Welfare System in Thailand*. Tokyo, Japan: Gakubunsha

*Contributors: Sopa Onopas, Phra Maha Surakrai Congboonwasana, and Noriaki Ando. Akimoto, T., Hattori, M. (eds.) (2017). *Working Definition and Current Curricula of Buddhist Social Work: Hanoi International Expert Meeting*. Chiba, Japan: Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku University.

Exploring Buddhist Social Work in Mongolia

Oyut-Erdene Namdaldagva

Jargalsaikhan Otgon

Mongolian National University of Education,
Mongolia



Buddhism is a traditional and dominant religion in Mongolia. Today Buddhists constitute 86.2 percent of the religious population, according to the latest population census. Nationwide there are around 140 Buddhist monasteries and temples. Besides, several Buddhist non-governmental organizations contribute to Buddhist practice and teaching. However, Buddhist social work is a new concept for Mongolian social workers since 2015. It has become popular as a result of the joint international research project which is coordinated by the Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku University, Japan. We have learned a lot by studying

Buddhist social work activities in Mongolia comparing to its situations in Asian countries. The study on Buddhist social work versus the western-rooted professional social work provided insights in terms of social work alternative services. In this presentation, the author discusses what Mongolian scholars in the field of social work and religious studies achieved in the process of identifying the characteristics of Buddhist social work in Mongolia. The author presents the core findings of the research on Buddhist social work in Mongolia. Also, the presentation includes a description of the project outcomes and provided an analysis of the role of the project in the process of building a research network in Mongolia. The Buddhist social work research network in Mongolia involves three institutions, namely, Mongolian National University of Education, National University of Mongolia, and Mongolian Academy of Sciences. The author points out the importance of the collaboration within the Asian Buddhist Social Work Research Network. Future steps involve review and analysis of the social work and religious studies' curricula, curriculum development of new courses, and other research initiatives. Evaluation of the international joint research project indicates the success of the project in terms of institutional as well as professional development for research counterparts.

Keywords: *Buddhist social work, social work, religion*

Core Findings and Summary of the Field Research in Japan

*Yusuke Fujimori,
Yoshiaki Watanabe*

ARIISW, Shukutoku University

Introduction of core findings of the Buddhist social work research lead by ARIISW, evaluating the joint research project and the role of the research network.



This paper reports on the theme No.2 of our research project which is focused on the development of the collaboration model of social work and Buddhism in Japan, within the Japanese community. The report is based on the survey on the relief or support work done by Japanese Buddhists and temples after the 3.11 earthquake and tsunami disaster (strong earthquake hit Japan in March 2011). Moreover, we have been focusing on the process of problem solving and improvement of temples activities and sharing information via a web platform. In other words, we have done similar work as our counterparts from abroad. We think that Buddhist monks and temples have been carrying out social-work-type activities after the 3.11 disaster.

We carried out three specific surveys. Number one is the work done by denomination groups and sects and second, was the work done by temples or temple organizations in the stricken areas. Also, in stricken areas, temples provided quite a bit of relief work to the affected people. Furthermore, local communities received such relief supports. They established support centers led by the council of social welfares. Therefore, we wanted to know what they did in detail.

First of all, the Social Welfare Councils' (Shakyo) survey at the time of 03/11/2011, there were several programs conducted by the community social welfare councils, and we asked the members of the councils (Shakyo) to look back at the first three months immediately after the disaster and tell us what they have done. This survey was conducted in the Tohoku region (Iwate, Miyagi, and Fukushima prefecture), badly affected regions. We picked 12 communities in Iwate and 15 communities in Miyagi and 5 in Fukushima.

One of the questions was about the kind of activities local people expected from temples and Buddhist monks. Of course, many answered they had wanted ceremonies and funeral services, however, we found out that they expected religious people to provide mental care or psychological care to those who had been stricken by the disaster. Furthermore, we asked what they expected of social welfare councils and religious institutions as far as their collaborations are concerned, many responded that they should cooperate more often, not only in disaster-related activities.

During our survey, many interesting comments have been shared. The following comment is from a monk in the disaster-affected community. “People in the community tend to find temples as places they don’t usually enter but after the 3.11 disaster, I felt that temples must belong to residents and monks must always be on their side. After the 3.11 disaster, I opened my temple as a sort of a saloon where local people can meet, gather, and build close relations with the temple. That helped everyone at the time of disasters. I want to also launch a food bank at my temple to assist residents in advanced age.” Concerning this comment, we can see that the Japanese still feel sort of a distance between social work and religious work. However, in various cases, we can see how Buddhist social work values are effective and how temples play a very important role in the community.

In Japan, after World War II, the public security system has been built and improved and the principle of the separation of religion and state was introduced. This was accepted by temples as well because the temples had reflected their problematic and negative role during the war. As the principle once accepted by people, the role of religion in social welfare service diminished and became invisible. However, more than 50 years after the war, social welfare needs are diversified and post-war welfare service for the poor is losing its validity. The reform of the system was necessary. Therefore, in 2000, the basic structural reform of social welfare system took place in Japan. Thus, the social welfare system in Japan has been changed but the reform has not been completed yet.

Society is changing very rapidly even today and reform needs to be carried on. However, there is a shortage of social workers and other people who serve, venues, and resources. But there are 75,000 temples in Japan, 370,000 monks and after the 3.11 disaster, temples in Japan collected ¥5.5 billion as donations. Thus, I believe temples can make a great contribution to society in Japan. Monks, of course, are engaged in different social work activities; however, they did not recognize it as social work.

Contribution of Our Joint Work, Contribution of ARIISW

*W.K. Anuradha Wickramasinghe
Small Fishers Federation of Lanka*



Anuradha Wickramasinghe during the presentation of the post stamp dedicated to Buddhist social work, released by Sri Lankan government in December 2019.



Shukutoku University: Building the Strategic Research Infrastructure

*Project on Buddhist social work as a core factor for
building the strategic research infrastructure at Shukutoku
University*

Building the Strategic Research Infrastructure

*Koji Yamaguchi
Shukutoku University*

Impact of the international joint research project on Buddhist social work on the Shukutoku University strategic research base (infrastructure) building. Review of the fulfilled tasks and future tasks and issues.



First, the Ministry of Education, Sports, and Science and Technology provides this kind of grant for private universities to establish their strategic research infrastructure, based on the managing strategy of each university. The final goal is to contribute to the promotion of science and technology not only in Japan but also in Asia as well as in international society.

As already mentioned, the research product is focused on the potential of Buddhism in social work in Asia and there are two themes, both highlighted in previous texts reflecting the morning session. The first one focused on social work and Buddhism in Asia, and the second one on the domestic practice in Japan as reported by Professor

Fujimori. However, both research themes are combined to promote research activities at Shukutoku University.

In the last five years, research activities have been conducted based on the management strategy of the university and for the school cooperation, the Daijo Shukutoku Gakuen's ground design has the research activities as one of the priority policies. Moreover, the school aims to become an advanced university for international academic exchange in the areas of international social welfare and Buddhist welfare as highlighted in the ground design we have adopted as a mid-term plan (2019-2022), where objectives such as contributing to the social work in Asia, and to contributing the society are set to raise the core values of the university philosophy. At the same time, the university has a mid-term plan stating that we should strengthen cooperation and collaboration with overseas universities regarding social work.

Furthermore, based on this research project outputs, we need to reconsider the way how social work is being practiced and taught, because of the difference in history and cultural perspectives. Whether it's possible to pursue social work as a profession or not? This might

be one of the items to discuss, as we can see how temples and Buddhists in Japan have been providing social work services in the tsunami and earthquake-affected areas, and how the practice of social welfare has been provided at religious places, including temples and monasteries. The question is, how the research outcomes should be reflected and utilized in the future.

In the future, based on the systematization of Buddhist social work, we would like to provide new perspectives as well as develop the education programs. I think this is very close to the philosophy of our university, while Ryoshin Hasegawa, the founder of the Shukutoku University, emphasized practice in social welfare underpinned by Buddhist teaching. He was a monk and also a practitioner of social welfare and he founded Shukutoku University to educate the next generation.

Based on Mahayana Buddhism, the spirit of the university aims for human development through the promotion of social welfare and education and aims to develop a human resource that contributes to social development. This spirit, maybe I should say the philosophy, is underpinned by the concept of altruistic coexistence. People are living together with others and people help others. That's the mission of the school. And, that is the reason why is the research project on Buddhist social work so important for Shukutoku University. And, at the same time, the reason to move forward, continue our research activities with colleagues from various regions and deepen our discussion and understanding of Buddhism and social work in the Asian region.

Furthermore, the research activities and the education in graduate school and undergraduate school of Shukutoku University need to be linked with each other means that the research. However, these activities should not be confined only within Shukutoku University. During the forum, we had participants, professors and researchers from different universities in Japan and we need to cooperate with them to advance our research.

My last point is the need to think about the change. Everything changes today and there is nothing immune to change. People change, the way people think changes and society changes, too. Thus, we need to respond to these changes. And Shukutoku University should become the hub of Buddhist social work. Moreover, we should address some changes in society while exploring new directions in the education of social work in Japan. Social work education should not be focused only on national accreditation. Looking at other Asian countries, where people have been supporting each other in villages and monks have been supporting people, I think, that this way of community life should be incorporated into the Japanese social work education.



Theories, Surveys, Education, and Practice:

**Brief Reports on Ongoing
Projects and Expectation to
Buddhist Social Work**

Development of Buddhist Social Work Discipline in Sri Lanka from 2014 to 2019

H.M.D.R.Herath
University of Peradeniya

Introduction

Since the 3rd Century B.C., Sri Lankan history records the Buddhist value system and its operational pattern. Those days Buddhist monks advised and guided kings to perform administration according to Dasarajadamma (ten principles to be as the guideline stated by the fully enlightened person).

Those principles are,

1. Granting Gifts (*dana* donation)
2. Be Virtuous (*seela*)
3. Generosity (*pariccagam*)
4. Honesty (*ajjavam*)
5. Kindness (*majjavam*)
6. Austerity (*tapam*)
7. Non- anger (*akkodo*)
8. Non –violence (*ahimsa*)
9. Patience (*kanthi*)
10. Conformity to the law (*aviroda*) (Rahula1970:123).

In addition to that, laymen of the country also followed meritorious activities, those are directly connected to the present-day Buddhist social work and those days they were introduced as *parameda* (work for others) Those are,

1. Gifts (*dana*)
2. Virtuous acts (*seela*)
3. Meditation (*bavana*)
4. Respect (*apaciti*)
5. Rendering a service (*veyyavacca*)
6. Transference of merit (*pattenuppadana*)
7. Devotedly rejoicing at merit (*abbanumodana*)
8. Advocating dhamma (*desana, Savena*)
9. Listening to dhamma (*ditthijjukamma*)
10. Rectitude views (Deerananda 2004:397).

As a result of following those guidelines the, rulers of the country and the citizens together built the community based peaceful society. The following picture and the table show the evidence.



Picture 1: Mihintale Bhiksu hospital, 3rd century B.C (Uragoda 1994:44)

Table 1: Names of the Hospital established in the 3rd century B.C.

Pali name	Sinhalese Name	English Name
Sivi sala	Mathru nivasa	Maternity Hospital
Gilana sala	Gilan hal	General Hospitals
Veijja sala	Veda hal	Local Hospitals
Panguna	Wikalanga rohal	Peadiatrics Hospitals
Pasarantheenan	Presava nari vedaya	Gynocology Hospitals
Kanang Salake	Akshi rohal	Eye Hospitals
Upasagga roga vejjesala	Bowanaroga rohal	Community Diseases Hospitals
Bikku vejjesala	Bikshu rohal	Monks Hospitals

(Uragoda 1994: 38)

At the same tradition, we had started a new outlook in 2014 in Sri Lankan society introducing Buddhist Social Work with the collaboration of Shukutoku University, Japan. The main objective of this short essay is to provide a brief history of Sri Lankan Buddhist social work from the year 2014 up to 2019.

Training and Awareness Programs for Buddhist monks on Buddhist social work in Sri Lanka

During the first part of the year 2014, before the establishment of the ISWEBM institution,

there were several discussions conducted with Chief incumbents of the three chapters namely, the Siyam chapter, the Ramanna chapter, and the Amarapura chapters. In the second stage, we selected District level representatives from every chapter and appointed them as District level coordinators. After appointing coordinators, first, we conducted seminars

introducing the new subject and the importance of the subject for the development of the Buddha Sasana. Subsequently, all the 25 senior Buddhist monks who represented in District Level organizations, delivered the Buddhist Social work message comprehensively at the grass-root level. After this message was received, young Buddhist monks in the country eagerly disclosed their willingness to get admitted to the ISWEBM.



Extraction of Buddhist social work literature from the various sources

With the introduction of the new subject discipline into the social science field in Sri Lanka, Buddhist monks, academics as well as professional social work practitioners educated in the Western countries tried to explore the new field and academic boundaries in Buddhist literature. Especially, they were searching for literature in the *Sutta Pitaka*, the *Vinaya Pitaka*, and the *Abhidhamma Pitaka*. Meanwhile, some Buddhist scholars were confused about Buddhist Philosophy and Buddhism and their relationship to the new subject. And they were searching for exact Buddhist social work subject and referred thousands of Buddhist books.

Establishment of the Institute of Social Work Education for Buddhist monks in Sri Lanka (ISWEBM)

After several discussions with the Ministry of Buddhasasana, we established the Institute of Social Work Education for Buddhist Monks, officially at the Buddha Sasana Ministry premises in Colombo, 22th April 2014 at No135, Darmapala Mawatha, Colombo7.

Policy guidance

All the Social work education system is based on Buddhist social development policies that practiced in 2500 years history of Buddhism in Sri Lanka. Secondly, it provides background knowledge systems on contemporary social work policies practice by modern social work institutions elsewhere in the world.

The diploma courses and degrees are purely for the Buddhist monks whose desire to be social work practitioners in the community.

After completion of the diploma or degree of Buddhist social work education, the monk must be work for four years with the assigned community by the Institute. If the monks do not complete this requirement, they do not eligible for “Buddhist Social Work Higher Education”.

Council of the ISWEBM

1. The most Venerable Niyangoda Vijithasiri Nayaka Thero, Deputy Chief incumbent of Siyam Chapter (Advisor)
2. Ven. G Pamarathana (Chairman)
3. Dr. Anurada Wikramasinghe (Council member)
4. Prof. Tatsuru Akimoto (Council member)
5. Prof. H.M.D.R. Herath (Director)
6. Mr. S.W. Pathirana (Council member)
7. Mr. M.K.B. Dissanayake, a representative from the Ministry (Council Member)
8. Mrs. Ganga Rohini Dissanayake (Registrar)

Vision of the institution

To be the main Social work education institute for Buddhist monks in Sri Lanka by practicing theory and its penetration and deliverance of Buddhist social work and its value system for the betterment of the community.

Mission

To provide awareness, knowledge, skills, attitudes, and commitment to Buddhist social work for young Buddhist monks who stay and work with the community in the Buddhist temples. To promote cultural and social values related to Buddhism that were practiced historically in Sri Lanka to alleviate the social suffering in society.

To build the personality of Buddhist monks as vitreous, disciplined and dedicated monks to work with the community for social change. The Buddhist monks to be the practitioners and the counselors to alleviate the social illnesses of the community.

Strategy

- To offer interdisciplinary diploma and degree courses in Buddhist studies and contemporary social work studies by focusing on the practitioner’s personality development and social development.
- Undertake learning by doing approach training within the community and engage in applied social research and to achieve the knowledge-base with practical applicability of the

community by working with community organizations.

- Carry out assigned social problem focus research work and provide facilities on social work projects to work with the community.

- Work with the community on an assignment basis on specific social problems and geared toward social change.

Buddhist Social Work Knowledge-Base

Different disciplines of Buddhist Social Work Education- theoretical presentation in eight (08) months. ISWEBM presents ten comprehensive social work courses in the Diploma Level as follows.

DSWSU101 Introduction to Buddhist Social Work

DSWSU 102 Buddhist Social Philosophy, History, Value systems and diversity

DSWSU 103 Human behavior, Psychological and Sociological aspects of counseling
DSWSU 104 Contemporary society,

DSWSU 105 Social Policy, Social Development, and Social

resources
DSWSU 106 Research Methods in Buddhist Social work

DSWSU 107 Project Management. Planning, Monitoring, and Evaluation

DSWSU 108 International social work perspectives, and indigenous perspectives, and approaches

DSWSU 109 Social work practice with individuals, family, and

groups
DSWSU 110 Language and computer literacy (ISWEBM)

Impact of Buddhist social work program to temple-based traditional Buddhist social work activities

Since the 3rd century, B.C. Sri Lankan Buddhist temples maintained multi-functional roles to reduce the suffering of different communities in the country. The whole life of a Buddhist monk was devoted to service to others. Their learning and teaching were directed to protect others' lives. In Sri Lanka, at least there about 15000 temples and 30000 monks and 3000 nuns have traditionally defined, social work programs they were operating. After hearing these new programs, they started a new type of organization and new institutions in their temples. Further, they are ready to send their students to new social work institutions for training to acquire and organize knowledge and skills.

Buddhist Social work subject and its impact on the other universities in Sri Lanka

Most of the Universities in Sri Lanka,(excluding technical universities) have offered courses in the traditional liberal arts category with British and American traditions. Under those degree programs, some universities offered Pali and Buddhist studies with their

specializations. They taught courses Buddhist Social work under; community studies, Buddhist leadership, Socially Engaged Buddhism, Buddhist Counseling, Psychology, Buddhism and Social Development, Buddhism and Personality Development, etc. Even in the Government Institute of Social Work in Sri Lanka, there was a reluctance to introduce Buddhist Social work, as a subject in their institute. This institute was established under the colonial Government. There are two Buddhist Universities in the country, namely Pali and Buddhist University in Colombo and the Bikshu University in Anuradapura was also teaching Buddhist social work under different disciplines.

After several discussions with Professor Akimoto, following revolutionary changes happened in our University system.

1. The Pali and Buddhist University started a new curriculum including Buddhist social work The Bikshu University of Sri Lanka, Anuradapura also included Buddhist social work subject into their curriculum.
2. The University of Peradeniya, Department of Sociology started a research wing to support Buddhist social work.
3. The University of Kelaniya is planning to conduct a conference on Buddhist social work in March 2020 to promote the discipline.

In 2018, when our ARIISW – ISWEBM Collaborative Buddhist social work conference in Sri Lanka, there were very fruitful Buddhist social work research papers presented by Sri Lankan Buddhist scholars. This is a good sign of the development of the new subject.



Picture 2: Bikshu University of Sri Lanka

Prominent Scholars published new books and research articles under Buddhist social work discipline

In the last five year time period most of the Buddhist scholars published excellent research articles after presenting papers in international conferences. Very recently Ven. Professor W. Wijesumana Thero published a book that was based on Suttapitaka and child personality development. Those are indicators of future development of the Buddhist social work in Sri Lanka.

Commemoration of five years of Buddhist social work and the government issuing a stamp with the highest recognition

For the first time in Sri Lankan history, the government issued a stamp to recognize the Japan-Sri Lanka relationship and the importance of Buddhist social work, on 8th December 2019. Before the modern democratic system, the temple was the live wire of the country. The whole social binding force developed in the temples. Even today, Mahasngha (Buddhist monks) play a multi-functional role in the development of Sri Lankan society. That was recognized by the government at least after 2600 years.

Buddhist monks higher studies in Japan

As a result of the collaborative Buddhist social work between Shukutoku University, Japan and Sri Lanka, one Buddhist monk started higher studies on Suttapitaka and Buddhist social work that would help us to share his knowledge in the future. Further, in the future, there will be more and more collaborative work and knowledge exchange programs can be implemented with other countries in Buddhist Asia.

Expectations towards Buddhist social work

With the regime changes in Sri Lanka in 2019, we hope to reprogram the ISWEBM institute in 2020. Then this will be the first Buddhist social work institute in the world with the government affiliation. Within the next five years' time, we hope to introduce Buddhist social work subject for degree programs in the ISWEBM and the rest of the universities in Sri Lanka.

Buddhist Social work Publications

Prof. Akimoto, the ARIISW and the rest of the Buddhist countries, in the Buddhist Social work network have identified the scarcity of Buddhist Social work literature among those countries including Sri Lanka. We hope to collect, Buddhist Social Work-related articles, conferences, papers, and relevant materials, and republish them in the future.

“Monk’s vocation is not selfish and luxuriates in their life. They should travel for the welfare and happiness of many people. No two monks go the same way. Mediate with people for the social reality for the alleviation of their suffering” (Armstrong 2002:109).

References

- Deerananda, H. (2004). *Rajyathwaya, Rajyaya saha Agama*. Warakapola, Ariya Publisher.
- Rahula, W. (1970). *Budunwadala Darmaya*, Colombo: M.D.Gunesena and Company.
- Uragoda, C. G (1994). *A History of Medicine in Sri Lanka*. Colombo: Sri Lanka Medical Association.

Buddhist Social Work Curriculum Improvement at Buddhist Universities in Thailand

Phramaha Surakrai Jinabuddhisiri (Congboonwasana)

Mahamakut Buddhist
University, Thailand



Presently in Thailand, there are six (6) public and private universities offering courses in social welfare. The first four namely Thammasart, Huachiew Chalermprakiet, Prince of Songkla Pattani campus and Pibulsongkram Rajabhat universities offer courses for the general public while the other two namely Mahamakut and Mahachulalongkornrajavidyalaya universities, known as Buddhist university, for both monks and the general public, have integrated Buddhist teaching into their social welfare curriculum. Even with the emphasis on Buddhism as the course should have been, the curriculum and course structure still focus on course description based largely on western ideologies. Each university offers not less than 30 credits (10 courses) on general subject, not less than 30 credits (10 courses) on Buddhism, not less than 68 credits (44 courses) on social work yet only 18 credits (6 courses) on Buddhist social work and social development of which

are 12 credits (4 courses) by Mahamakut Buddhist university and 6 credits (2 courses) by Mahachulalongkornrajavidyalaya University. In that respect, this article aims to study the direction to improve the curriculum specifically on Buddhist social work through the study of relevant documentation from both Buddhist universities with expected outcomes of a more precise and appropriate direction for the improvement of the social work curriculum of the Buddhist universities in Thailand.

Keywords: *Buddhist University, Improvement of Social Work Curriculum*

Introduction

To talk about the origin of social work, it would be difficult to say exactly when it started. It could start before the Buddhist era, during the Buddhist era, or maybe since the beginning of mankind when everybody helped each other, which we do not have evidence to support it.

But if we consider the word "social work" in Thai language, which has its roots from the Pali language, it is to believe that a social work emerged with the religion in a way that the religion acted as an institution for providing humans with welfare, so letting them help each other and coexist peacefully.

In Thailand, two Buddhist universities are open to monks and the general public to study. Both universities are under the supervision of the Sangha Supreme Council and the Ministry of Education. The reason why both universities were established was that many of the Sangha Supreme monks found that public education had been improved and changed to keep up with modern technology while the education of the clergy had not been changed to be in line with the changing society. At that time, the study of the Buddhist scriptures, especially in Pali and Dhamma sections, gained less popularity in Thai society as well as got little support from the government. Therefore, they saw it appropriate to improve the education of the clergy, in which monks and novices get to study the Buddhist scriptures along with ordinary worldly subjects, and so will have the knowledge, ability, and better understanding of the present society as well as modern sciences.

Social Work Studies at Buddhist Universities

The Social Work Program is another modern science that is offered in both Buddhist universities. It integrates Buddhist principles into the curriculum, aiming to make the graduates to have professional knowledge in social work integrated with Buddhism as well as having volunteering mind and feeling responsible for helping fellow humans and society. The curriculum consists of basic education courses, Buddhism courses, social work core courses, and elective courses. The content of the program mainly focuses on western social work. The Buddhism courses include the study of Pali literature, Pali grammar, Pali translation, Tripitaka studies, *Vinaya Pitaka*, *Sutta Pitaka*, *Abhidhamma Pitaka*, and History of Buddhism, all of which is the foundation of religious knowledge that learners may not yet be able to see how to apply to Buddhist social work. There are only one or two courses concerning the practical application of Dhamma teachings.

The management of a curriculum structure in the social work of two Buddhist universities is in line with higher educations and the identity of each university. The details are as follows:

1. Bachelor of Social Work- B.S.W, Mahamakut Buddhist University: the philosophy and objectives as follows:

Social Work Study is a study for creating social justice, social development; accepting diversity in various dimensions; creating a happy and non-discriminated society; respecting and valuing dignity of humanity, human rights, and the right to access social welfare of all sectors; serving the society and creating awareness of responsibility by properly integrating Buddhism with Social Work and multidisciplinary professions.

Objectives

1. To produce undergraduates who uphold value of morality, ethics, public-mindedness, and code of conduct, and to guide society towards the right path.
2. To produce undergraduates who have professional knowledge and attitude as well as social work methods and skills and who can apply and develop social work tools for application at micro and macro levels.
3. To produce undergraduates who are capable of integrating social work knowledge and skills as well as dharma principles of Buddhism into social works.

The 151 credits of the curriculum structure are as follows:

- 1) General study courses, the courses that promote complete humanity, broad knowledge, understanding and appreciation of others. Total credits are no less than 30 credits.
- 2) Required courses for social work degree 115 credits. The details are as follows:
 - 2.1 Buddhism courses. These courses demonstrate the identity of the university. They are History of Buddhism, *Tipitaka* Studies, Buddhism and Thai Ways of Life, Pali for Buddhist Research, Mahayana Buddhism. The credits are no less than 30 credits.
 - 2.2 Required courses for social work major are Introduction to Social Work, Ethics of Professional Social Work, Social Problems and Social Measures, Social Work Research, Social Case Work, Social Group Work, Community Work, Social Welfare Policy and Administration. The credits are no less than 63 credits.
 - 2.3 Fieldwork practicum, no less than 22 credits.
- 3) Free Elective courses are courses that students choose from courses offered by the university. The credits are no less than 6 credits.

2. Bachelor of Social Work- B.S.W, Mahachulalongkornrajavidyalaya University

The curriculum structure includes 140 credits. The details are as follows:

- 1) General study courses, the courses that promote complete humanity, broad knowledge, understanding and appreciation of others. Total credits are no less than 30 credits.
- 2) Required courses 104 credits. The details are as follows:
 - 2.1 Buddhism courses. These courses demonstrate the identity of the university. They are Pali Literature, Pali Grammar, Pali Composition and Translation, *Tipitaka* Studies, Vinaya Pitaka, Suttanta Pitaka, Abhidhamma Pitaka, History of Buddhism. The credits are no less than 30 credits.
 - 2.2 Required courses for Social Work are Social Work Philosophy and Concepts, Principles and Methods of Social Case Work, Social Work Research Methodology, Principles and Methods of Social Group Work, Field Visit and

Seminar, Principles and Methods of Community Work, Social Work and Social Welfare Administration, Field Work Practice in Case Work, Field Work Practice in Community Work. The credits are no less than 33 credits.

2.3 Specific Courses are Technique for Working with Clients, Professional Ethics and Human dignity, Social Work Counseling, Human Rights Strengthening in Social Work, and Social Work and Criminal Justice. The credits are no less than 32 credits.

2.4 Major Elective Courses are Buddhism and Social Work, Buddhism and Social Development, and ASEAN Community and Social Welfare. The credits are no less than 9 credits.

3) Free Elective Courses are courses that students choose from courses offered by the university. The credits are no less than 6 credits.

Improvement of Social Work Studies Program

Any bachelor's degree programs must be reevaluated every five years according to the announcement of the Ministry of Education. It specifies in detail the program's teacher qualifications, program structure, and the quality assurance of the program to guarantee quality graduates. The program must meet the standard of learning results as stipulated by the Higher



Education Commission and must cover at least five areas which are (1) morality and ethics (2) knowledge (3) intellectual skills (4) interpersonal skills and responsibilities (5) skills in numerical analysis, and communication and information technology use.

Social Work Professions Organizations

The curriculum improvement not only must meet the criteria of the Ministry of Education, but also those of the professional organizations related to social work studies programs, which are the following.

1. Thai Association of Social Work and Social Welfare Education (TASWE), a cooperation among the universities that offer social work programs in Thailand, has drafted the standard of bachelor's degree in social work studies to be a guideline for curriculum development and improvement. The curriculum structure must meet the 4-year undergraduate degree program standards of the Ministry of Higher Education, Science, Research and Innovation, that is, the students must have at least 120 credits in total.

2. Social Work Professions Council, founded under the Social Work Professions Act 2013, is

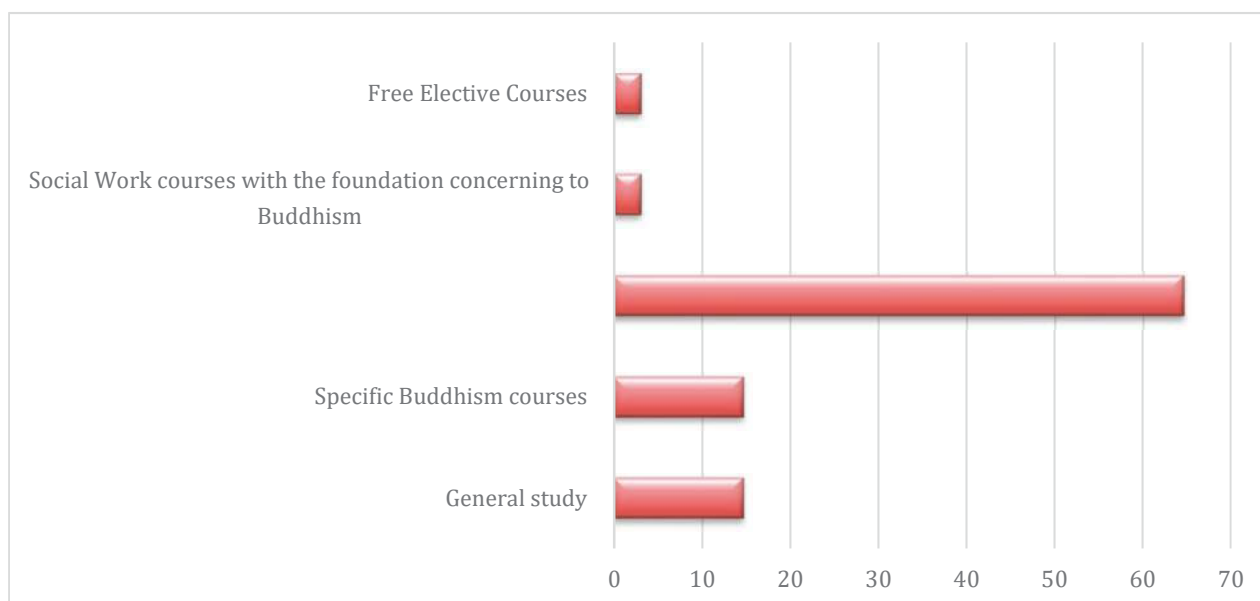
in charge of setting standards and ethics, promoting and developing the social work profession. For the benefit of applying for membership, it sets the service standards of social work professionals and certifies the degrees from various institutions. It gives opinions and recommendations regarding the curriculum of the social work vocational program in higher education institutions. The Council of Social Work Professions certifies the programs that meet the specified criteria ensuring the professional standards of the Social Work Professions Council with the following: the undergraduate and the graduate of social work curriculum evaluation forms.

Curriculum Analysis Results

The analysis results of the bachelor degree in social work studies program of both Buddhist universities show that the curriculum structure that the number of courses and credits of the Social Work Program of Mahachulalongkornrajavidyalaya University, it is found that there are 68 courses and the total credits are no less than 140 credits. They are 1) 10 courses for General study (30 credits) or 14.7 percent. All courses must be studied together. 2) 10 courses for Specific Buddhism courses (30 credits) or 14.7 percent. All courses must be studied together. 3) 44 courses for Required courses for Social Work with the foundation from the west (68 credits) or 64.7 percent and 2 Social Work courses (6 credits) or 2.95 percent with the foundation concerning Buddhism. 4) 2 Free Elective Courses (6 credits) or 2.95 percent.

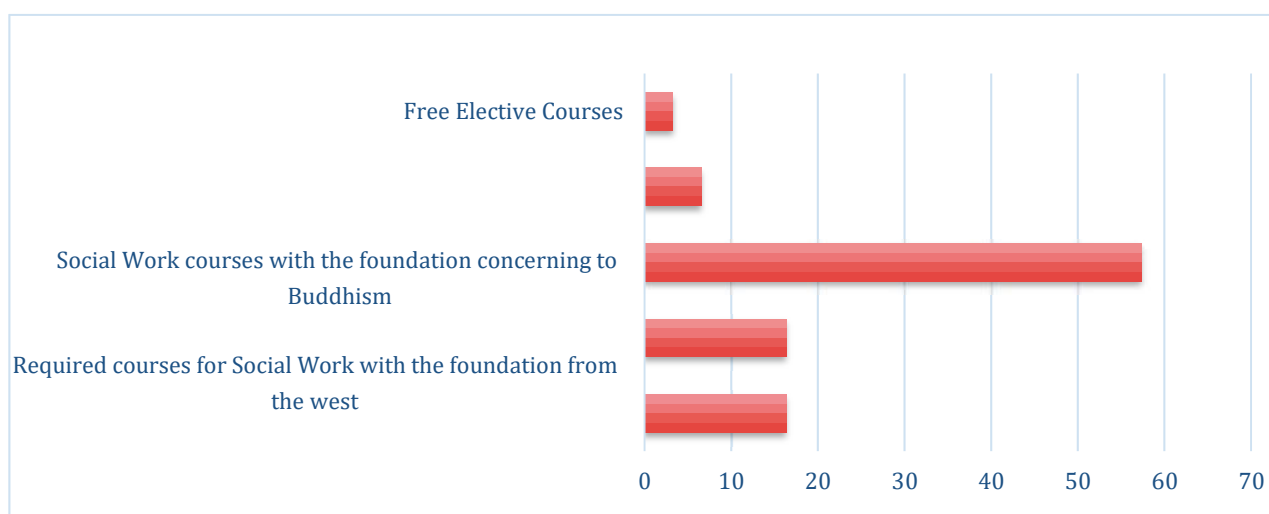
The number of courses and credits of the Social Work Program of Mahamakutbuddhist University, it is found that there are 61 courses and the total credits are no less than 151 credits. They are 1) 10 courses for General study (30credits) or 16.39 percent. All courses must be studied together. 2) 10 courses for Specific Buddhism courses (30 credits) or 16.39 percent. All courses must be studied together. 3) 35 courses for Required courses for Social Work with the foundation from the west (73 credits) or 57.40 percent and 4 Social Work courses (12 credits) or 6.55 percent with the foundation concerning Buddhism. 4) 2 Free Elective Courses (6 credits) or 3.27 percent.

Table 1.1: Courses and credits of the Social Work Program of Mahachulalongkornrajavidyalaya University



Source: Curriculum in Bachelor of Social Work of mahachulalongkornrajavidyalaya University

Table 1.2: Courses and credits of the Social Work Program of Mahamakutbuddhist University



Source: Curriculum in Bachelor of Social Work of Mahamakut Buddhist University

The analysis results of the bachelor degree in social work studies program of both Buddhist universities show that the curriculum structure that wants to create a unique Buddhist program requires 30 credits in basic Buddhism courses, 30 credits in general education courses, 74 to 85 credits in western social work core courses, and 6 credits in elective courses. In total, the programs at these universities require 151 and 140 credits, which are higher than what is specified by the Thai Association of Social Work and Social Welfare Education, which is 120 credits.

Regarding the curriculum development to be more Buddhist-oriented than western social work, it is found that the Social Work Professions Act 2013 has provided a leeway to create specialties within the social work program, but no institution has offered any specialties. Mahachulalongkornrajavidyalaya University offers built-in specialized courses in their curriculum structure. Although Mahamakut Buddhist University does not offer any specialized courses, many Buddhist courses in the curriculum can be applied to social work. Those courses are, for example, Buddhism and Social Work, Buddhism and Social Development, Buddhism and Social Work for Chronic and Hospice Care, Buddhism and the Elderly. It also offers practicum courses, for example, the practical training where the Sangahavathu 4 is introduced only in the cases that have already been supported by research reports, or practical training in the community where the monk's working ethics are studied with the Aparihaniyadhamma 7 principles, or the seven conditions of welfare.

Conclusion

The current social work studies curriculum of both Buddhist universities can potentially be developed to be more Buddhist-oriented by introducing Buddhism principles and concepts into the courses to replace the western ones. To be even more unique, it could introduce the Dhamma principles and the process of leading the way to subdue sufferings with *Ariyasacca 4* (the Four Noble Truths).

References

- Matsusono, Y. (ed) (2019). *Buddhist Social Work: Roots and Development of the Social Welfare System in Thailand*. Tokyo, Japan: Gakubunsha
- Faculty of Social Sciences Mahamakut Buddhist University. (2016). Curriculum in Bachelor of Social Work. n.p.
- Faculty of Social Sciences Mahachulalongkornrajavidyalaya University. (2017). Curriculum in Bachelor of Social Work. Retrieved from http://mcuaad.mcu.ac.th/ac/curr/show_pdf.php?t=5&tq=2&f=798873f982e27d313c9d4c50e7f7dcc6.pdf
- Ministry of Education. The Standard criteria for Bachelor degree programs Act B.E. 2558 (2015).
- The Council of State. The Royal Gazette. Vol.132, 13 November, 2015. Retrieved from http://www.mua.go.th/users/bhes/front_home/criterion58/criterion_b58.PDF
- Social Work Profession Act. B.E. 2556 (2013)
- Thai Association of Social Work and Social Welfare Education. The Standard of Bachelor's Degree in Social Work. n.p.

The Demand and Solutions to Development of Buddhist Social Work in Vietnam

Bùi Thanh Minh
University of Social Sciences and Humanities,
Vietnam National
University

Humanistic Buddhism is currently a global trend and Buddhist social work is one of the applications of Buddhism in supporting people to tackle their problems in achieving happiness. The article discusses what is Buddhist social work and the role of Buddhist social work. Since then, from the specific challenges and opportunities, solutions to develop Buddhist social work in Vietnam are proposed.

Keywords: *Buddhist social work, Vietnam, Solutions, Development*



What is Buddhist Social Work?

Humanistic Buddhism is currently a global trend. Dharma practice is not just going to the temple, reciting Buddhist scriptures, but it also the way the monks and nuns live with their family, with their sangha, with their followers as well as with the people in their country or the world. It can be seen that the development of paradox has happened when economic development is accompanied by inequality, poverty, armed conflict, social issues, environmental problems... These issues caused people to failed in achieving happiness which is their desire. Therefore, all of Buddhism and its philosophy should come into life, from the grocery store to the schools, hospitals as well as prisons and so on... To leading and supporting people, communities and the whole nation is looking for an inclusive development approach. Buddhist economics, Buddhist culture, and Buddhist social work are the paths and the inevitable combination. This combination creates “the gate of Upaya/gate to the Truth” for Buddhism to participate in all aspects of social life and is also an appropriate approach to the indigenous cultural characteristics of each nation's economic activities, culture, and social work.

Buddhist social work is not a new topic because Buddhism has engaged in social work activities in the process of developing and practicing its philosophies. In Buddhism, there are not terms such as "social work", "social security" or "social welfare" but the spirit of those terms is expressed in the writings of Buddhism (Luong Gia Tinh 2012, p.419). Thinking, words and deeds are the means to help people to enlighten and liberate themselves following the Buddhist philosophy. The final goal of Buddhism is to enter the real world, save suffering, rescue the vulnerable. However, the definition of Buddhist social work is controversial depending on different angles. Is it the involvement of Buddhism in Western social work or a parallel combination or does it exist as an independent branch of social work in Asian countries where Buddhism plays crucial roles? They are questions that we have to answer so that we can understand "Buddhist social work" comprehensively.

There are three main approaches to the definition of Buddhist Social work. The first approach derives from the Western social work, which emphasizes the difficulty of social service delivery system. Since then, with the positive activities of temples, monks, and nuns, the authors propose the connection between Buddhism and Social work (Nguyen Ngoc Huong 2012; Hoang Thu Huong et al 2018). This approach emphasizes the auxiliary role of the Buddhism generally and temples specifically in supporting the state's social service system, so it can be considered as taking advantage of Buddhism as resources in providing services for people. From there, the authors propose solutions to professionalize Buddhist activities in the social work system.

The second approach affirms that Social work and Buddhism share similar values and goals. Therefore, connecting Buddhism and social work can create an independent part of social services provision. This combination can help the vulnerable group have more resources to approach in tackling their problems. This approach emphasizes the relative independence of Buddhism in the combination but still focuses on helping individuals, groups and communities is the responsibility of social work and Buddhism can participate in this process.

The third approach is Buddhist social work rooted in the social activities of Buddhism, not relating to Western social work. This approach is the most appropriate when tracing the roots of the Western social work and its development process as well as the actual role of Buddhism in helping, supporting people and communities in Vietnam and other countries in Asia historically. It can be seen that Western social work has religious roots when churches organized supportive activities and the professionalization process of these activities was the origin of social work as a profession. Due to the division and conflict between state and religious institutions, social work was separated from its origin. Social work even becomes a public service in western society when personnel and quality assurance systems are managed, paid and evaluated by the government (Gohori, J., 2019). Moreover, in the US where social work is professional, religious institutions still carry out rehabilitation, crime education, and parenting skills education (Conan & Boddie 2002, cited by Nguyen Ngoc Huong, 2012).

Regarding the role of Buddhism, in Vietnam's history, Buddhism involved in many areas such as the orientation of life values, teaching parenting skills, emergency assistance, and intervention for the mentally ill throughout roles of village's temples...It can be seen that in Vietnam, the village is the most important administrative unit throughout history for its functions: economic management, tax collection, and public services provision. Paul Doumer, the highest leader of French authority when France invaded Vietnam once remarked that Vietnamese villages "are a small republic, a tribute to the system ..." (Pham Duy Nghia 2018). Hence, the village and its institutions implemented the state's functions including social support for villagers. In a village, public land was rented to help the vulnerable: widow lands, orphan lands... Besides, every village has a temple where "its gate is always opened for all" to help villagers. Specifically, the monks and nuns apply Buddhist philosophy to supporting people in tackling their problems. Therefore, Buddhist social work had already existed and played an important role in supporting people in Vietnam. Currently, approximately 15.000 temples in Vietnam which are providing: (1) Charity work; (2) Shelters for orphans, the elderly, the disabled...; (3) Psychological services, even suicide prevention; (4) Emergency supports; (5) Education for parents and the youth and so on. To conclude, it is clear that Buddhism appears in every important event of an individual's life: when he/she was born to the time he/she passes away and Buddhist social work had already existed and played an important role in supporting people in Vietnam before Western Social work appeared.

2. What are the challenges and opportunities in the developing of the Buddhist social work in Vietnam

Certain difficulties have to be overcome in the development of Buddhist social work in Vietnam and Asian countries. First of all, western social work is a mainstream approach in Vietnam. The social security system and the social work profession are built by learning from the United State of America's and Australia's models. Secondly, Vietnam is not a religious state. That can prevent Buddhist social work to become an independent part of the social work provision system. Last but not least, Buddhist social work is only a part of Buddhism. This could lead Buddhist institutions and temples to not concentrate their entire resources to develop Buddhist social work.

Opportunities always come with challenges. In Vietnam's and global context, there are plentiful resources to develop Buddhist social work as an independent discipline. Firstly, Buddhism's tradition in helping disadvantaged group is respected by communities. Regarding charity activities, Thich Phuong Chi (2012) points out the involvement of Buddhism in addressing the negative consequences of various social problems. According to the summary report of Vietnam Buddhist Sangha in the term of 2012-2017, temples, monks and nuns

participating in humanitarian blood donation, environmental protection, natural disaster prevention and response, HIV/AIDS prevention, vocational training, job services (Vietnam Buddhist Sangha 2017, p.33). Furthermore, there are professional supportive models built and run by monks and nuns. They have become effective models to help people with special need such as orphans, HIV/AIDS, mental health patients and drug abusers. Pagodas such as Phap Van, Phap Bao, Ky Quang 2, Dieu Giac ... have become reliable addresses in supporting people with HIV/AIDS and the addicted (Nguyen Hoi Loan et al, 2014). Besides, the trend of humanistic Buddhism and the limitation of Western social work in Vietnam made the actual need to develop Buddhist social work as an indigenous social work to meet the need of the whole society.

Solutions to develop Buddhist social work as an independent social work in Vietnam

Develop the Buddhist social work is an urging demand from actual social issues. To achieve the tasks, numerous solutions have to be implemented step by step. First, establish a comprehensive foundation of Buddhist social work: definition, applied theories, helping process...and delivering it to scholars, social workers, policymakers...Second, design a professional model of Buddhist social work to share useful examples in reality: for HIV/AIDS patients, drug users, health care system...Third, design and train an intensive course on Buddhist social work: Curriculum, textbooks, trainer preparation and the last is policy advocacy to lay Buddhist Social work services in national social work services provision.

Conclusion

“When you are bitten by a snake, look at your surroundings for medication”. This Vietnamese proverb means that Buddhist social work is the answer to tackle social issues in Asian context. Develop Buddhist social work in Vietnam can be difficult. However, the development of Buddhist social work could bring advantages for more people especially people in special need.

References

1. Akimoto, T. (2018). How is Asian Buddhism involved in People’s Life. In Gohori, J (eds) *Proceeding: “Exploring the Buddhist Social work – Building the Asian Buddhist social work research network”*. Chiba, Japan: Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku University
2. Brown, C. (2017). *Buddhist Economics: An Enlightened Approach to the Dismal Science*. Bloomsbury Press.
3. Hoang Thu Huong, Trang T Nguyen and Jerry F Reynolds, II (2018) *Buddhism-based charity*,

- philanthropy, and social work: A lesson from Vietnam*. In *International social work journal*. 62 : 3, pp.1075-1087.
4. Gohori, J. (2019). Religion and social work. In Tran Nhan Tong Institute (eds) In *The Cultural and Philosophical Uniqueness of Tran Nhan Tong and Truc Lam Buddhist Sect*. Hanoi, Vietnam: Vietnam National University Press, pp.107-114.
 5. Luong Gia Tinh (2012). The actual demand in designing and training social work's subject in Buddhist training program. In *Buddhist education in Vietnam: Orientation and Development*. pp.419 – 430.
 6. Ngo Thi Phuong Lan (2015). *The humanistic activities of Theravada Buddhism of Khmer ethnic group in Ho Chi Minh city*. In *Religious Research Journal*. Vol 6 (144). 2015. pp.64-73.
 7. Nguyen Hoi Loan et al (2014). *The values of Buddhism with social work in the global context*. Hanoi, Vietnam: Vietnam National University Hanoi Press.
 8. Nguyen Ngoc Huong (2012). *Connecting Buddhism and Social work: Propose a model in social work services provision in Vietnam*. In *Sociology Journal*. Vol. 1 (117). 2012.pp.23-35.
 9. Nguyen Ngoc Huong (2018). Designing an awaken society: Experiences from the Buddhism application on cooperated project between the US and Vietnam in elderly care. In *The Cultural and Philosophical Uniqueness of Tran Nhan Tong and Truc Lam Buddhist Sect*, Vietnam National University Press, pp.91-106.
 10. Nguyen Trong Chuan (2012). Environment Protection and the role of Buddhism. In *Buddhist education: Orientation and Development*. Religious Press. pp.431-437.
 11. Thich Duc Dao (2012). Buddhist education and sustainable development. In *Buddhist education: Orientation and Development*. Religious Press. pp.383-389.
 12. Thich Gia Quang (2017). Humanistic Buddhism and the contemporary social issues, proceeding of international conference “Humanistic Buddhism and the contemporary social issues”. Ninh Binh, Vietnam.
 13. Thich Khe Chon (2012). Buddhist education and environment protection. In *Buddhist education in Vietnam: Orientation and Development*. Religious Press. pp.389-397.
 14. Thich Phuoc Chi (2012). Social Charity is Buddhist interest. In *Buddhist education: Orientation and Development*. Religious Press. pp.428-431.
 15. Pham Duy Nghia (2018). *Develop a powerful centralized government: a premise for sustainable development*. In *Legislative Research Journal*. Vol 20 (372).
 16. Venerable Thubten Chodron (2011). Buddhism in modern society. In *The Path to Happiness*. <https://thubtenchodron.org/2011/06/dharma-opportunities/> Retrieved: October the 11. 2018.
 17. Venerable Dhammapala (2013). *What is the Role of the Buddhist Sangha in the 21st Century?*, Buddhist door Global. <https://www.buddhistdoor.net/features/what-is-the-role-of-the-buddhist-sangha-in-the-21st-century>. Retrieved: October 11th, 2018.

Comparative Study on Features and Essences of Activities at Different Centers for Seniors and Children

Batkhashig Adilbish
Demberel Sukhbaatar
Burmaa Sambuu
Tumennast Gelenkhuu
Altaibaatar Jargal
National University of Mongolia



The current study aims to examine features and essences of ‘social work’ activities at the Buddhist Centre, Asral NGO compared to the activities of typical daycare and welfare centers for children and seniors in Ulaanbaatar, Mongolia. A group of scholars, NGO leaders, and monks have come to argue that the Buddhist religion is distinctive in its emphasis on conveying indigenous cultural knowledge to social work in Asia (2; 3). In the latest Global Definition of Social Work, indigenous cultural knowledge has been acknowledged as a type of knowledge asset of particular importance for social workers (7). This leads to a growing need to study indigenous

knowledge including Buddhist philosophy and put it into practice to elaborate social work practice that is more culturally relevant in Mongolia.

Using exploratory qualitative research method, the research team members that consisted of lecturers of the National University of Mongolia and manager of Asral NGO collected qualitative data from participants and followers of the selected centers. The findings of the study were analyzed with the help of two different perspectives: Western social work and Buddhist social work. The findings revealed that the activities of the selected centers

vary in terms of consistency, accessibility, and motivation of participants/followers and service providers of the centers. Additionally, they suggested demand for further detailed studies to be carried out by joint teams that include scholars of social work and religious studies, monks and practitioners in the relevant field to determine the impact of cultural and religious activities on children and seniors.

Literature review

In Mongolia, social work is a relatively new field with slightly over 20 years of experience as a profession. Mongolian social workers, with support of international scholars, have made attempts to apply Western rooted traditional and modern social work theories and practice into the national standard and curriculums of social work education and practice (1; 9; 10). This process of integrating Western practice into the Mongolian context is viewed as westernizing, colonizing or globalizing and blamed for disseminating western values, theories and concepts of social work across diverse contexts (2; 6). Since social work is a value-driven profession, social work principles play an important role in the social work domain.

According to the Global Definition of Social Work, concepts such as social justice, human rights, collective responsibility and respect for diversities are key principles of social work (7). However, non-western social work scholars view the latest Global Definition of Social Work as an ethnocentric term exclusively Western in nature and as so is bound to introduce various models of social work neglecting contextual nuances of non-western social work perspective (2; 3; 6). One of their proponents is Buddhist Social Work (2; 3). Historians point out that Shamanism and Buddhism played an essential part in the social and cultural lives of Mongols for several hundred years. Buddhism fosters genuine worship putting more emphasis on selflessness and altruism and doing good deeds for the wellbeing of all sentient creatures in the world (3; 6; 13). It should be noted that both Shamanism and Buddhism have been exerting great influence on forming social and cultural consciousness of the Mongolian nation (13). As historical recordings indicated, Buddhist temples had played and still play an important role in the provision of survival as well as moral and emotional support for vulnerable stratum in times of need in Mongolian society (11; 12; 13; 14; 15). Anyway, some scholars argue that Buddhism encompasses a variety of traditions, beliefs and spiritual insights including indigenous cultural knowledge and practice (2; 3; 6).

Some scholars describe culture as an integral part of human behavior that includes thoughts, communications, actions, and customs, beliefs, values, and institutions of racial, ethnic, religious, or social groups (8) whereas other scholars argue that “culture is best seen as a source rather than a result of human thoughts and behaviors” (5). Culture is central to social work (6) therefore it tends to draw greater attention to social work practice. As Webb states, the key issue for social work in the twenty-first century is finding culturally relevant

ways of knowing and helping (6). Since people's beliefs - religion and spirituality - are important parts of culture, social workers are expected to understand the underlying philosophy and principles of the people's belief system that influences their everyday lives.

Methodology

An exploratory qualitative study was carried out in Ulaanbaatar, Mongolia aiming to understand features and essences of social work activities at the Buddhist Asral NGO compared to the activities of a typical after-school center or daycare centers for children and seniors. Primary qualitative data were collected via individual interviews (N=20) and secondary data were collected through literature, project document and social media post reviews to answer the following key questions "What are the features and essences of the activities at the selected centers?" and "What are the beliefs and driving forces that push children or their parents and seniors to take part in the activities at the selected centers?" There were 21 participants including ten children with ages between 7 and 13 and nine senior adults ages between 45 and 69. The average age for children was nine and 58 for adults. The participants were beneficiaries of three different centers of the same district of Ulaanbaatar, Mongolia. The first center was a District Senior Citizen Center established in 2018 by a district governor. The second was a Private Day Care Center for children established in 2015 by owner, and the third was a Buddhist Center for Children and Seniors established in 2001 by Panchen Otrul Rinpoche with support of His Holiness of Dalai Lama (4).

Findings

Features and essences of the activities at the centers

Depending on the goals, the three Centers' focused on different activities. The purpose of the Asral NGO Buddhist Center was introducing prevention strategies to keep disadvantaged children away from street life and promoting a greater family cohesion (4) whereas Private Day Care Center emphasized developing children's social and cognitive skills and focused on supporting their learning process. The common areas of both Centers include childcare before and after school, giving an opportunity to do homework and review class materials and practice, relax and play, organize various child development courses and providing regular hot meals. Moreover, chess and drawing classes were given at the Private Day Care Center while Little Buddha class was held weekly at the Buddhist Center.

Another difference is recruitment of teachers, fees and welfare services that the centers provide. The Private Day Care Center hires young teachers with limited work experiences shortly after graduation. In contrast, the Buddhist Center prefers more mature candidates with years of teaching practice and with experience in Buddhist philosophical debates. Also the children enrolled in the Private Day Care Center have to pay a fee and are not provided welfare service whereas the Buddhist Center provides various types of free of charge welfare services based on official permission from the Governor's Office, social worker and Buddhist

Center's social worker. It was obvious to the researchers that differences in recruiting teaching staff and relevant payment methods at two centers actually affect teacher-children relationships and learning environment. For instance, the teacher-child relationship at the Private Day Care Center was characterized as more formal inherent for schoolteacher-student environment while the relationship at the Buddhist Center was described as more casual and similar to a grandparents-child relationship.

Thus, the activities at the three centers selected for the study differed according to the purpose and services provided. Although participants in the three centers were hired on a volunteer basis, their activities differed depending on whether the center services were paid or not. As to characteristics in common for two Centers' activities for seniors is that the elderly volunteered to participate and they are entitled to exemption from payment of any charges. Another difference was that the Senior Citizen Center funded by District Governor's Office provides health, nursing, fitness services, training and counseling for the elderly whereas the Buddhist Center provides an opportunity to attend classes on Buddhism and rejoicing the wisdom of Buddha's teachings on important religious days.

Beliefs and driving forces of the involvement

It should be noted that the participants' beliefs and motivation in the activities of centers under study related to the purpose of the centers as well as the participants' age, needs, interests and family support, namely parental support for children and family support for the elderly. The children enrolled at the Private Day Care Center are mostly from middle-class families and their parents pay a fee for their enrolment at the center to provide them a better education. Nonetheless, the children become fond of going to a daycare center to avoid being alone at home, making new friends, and improving their academic performance. Likewise, the children who attend the Buddhist Center are motivated with an opportunity to make friends, review class materials, have hot meals and attend Little Buddha classes even though they pay no charge thanks to available funds raised by Buddhist followers and students of Panchen Otrul Rinpoche. Besides attending classes the children at the Buddhist Center named doing charity, committing no wrongdoing and respecting parents and teachers as virtues to be cherished.

Along with the purpose and scope of the center's activities, the elderly people indicated their values as prerequisites of their motivation to participate in centers' activities. The District Senior Citizen Center members expressed their commitment to the membership as an opportunity to do fitness, go dancing, do a recreational activity, exercise to improve their health and socialize. Meanwhile, the elders at the Buddhist Center expressed their commitment to increase their comprehension of Buddhism, practice charity, socialize and share their knowledge about Buddhism with their family members and children. Also, the findings demonstrated that the interests and beliefs of the seniors at the two centers differ. For the seniors at the District Senior Citizen Center, health and well-being are of higher significance whereas elderly people at the Buddhist Center indicated high importance of the

well-being of their family, children, and the environment in addition to personal peace of mind.

Conclusion

Historically, Mongolians have practiced Shamanism and Buddhism for centuries as a pillar of everyday life values and a solution to their daily problems. The findings of this study show that there is a discrepancy from the traditional approach in the beliefs and values of children and elderly people in Mongolia. Also, the study identified similarities and differences in the purpose and outcome of the three centers' activities. In particular, the interests and beliefs of children at the Private Day Care Center and the elderly at the District Senior Citizen Center are either success-oriented or focused on promoting own health and physical well-being whereas the children and the elderly at the Buddhist Center are more motivated to satisfy the needs of spiritual well-being and worshiping rather than success and self-achievement. Additionally, this study demonstrates that in Mongolian society may exist groups with different religious, belief and lifestyle preferences and accordingly different centers aimed to meet the emergent needs of the society are operating in Mongolia. Finally, the findings indicated an urgency for social workers, religious scholars, practitioners, and monks that there is a need for a comprehensive examination that people of different ages seek different approaches to handle their problems and make choices that match their lifestyles and beliefs.

References

1. Adilbish, Batkhishig (2016). Mongolian social workers' perceptions of protective factors against child maltreatment. PhD Dissertation, Flinders University. SA
2. Akimoto, T. (2017). The globalization of western-rooted professional social work and exploration of Buddhist social work. In Gohori, J. (Eds.) *From western-rooted professional social work to Buddhist social work* (pp. 1-4). Tokyo, Japan: Gakubunsha.
3. Akimoto, T. (2018). What is Buddhist Social Work? Why are we interested in Buddhist Social Work. In Development of the Asian Buddhist social work activities. International Conference, 22 September 2019. UB, Mongolia
4. Asral: Keeping families together (2019). History Retrieved from <https://www.asralmongolia.org/about/history/>
5. Crotty, M (1998). *The foundations of social research: Meaning and perspective in the research process*. Grows Nest. NSW: Hampden Press.
6. Gray, M., Coates, J., & Bird, M. Y. (2008). Introduction. In M. Cray, J. Coates, & M. Y. Birds (Eds.), *Indigenous social work around the world: Towards culturally relevant education and practice* (pp. 1-12). Hampshire, GU11 2 HR, England: Ashgate Publishing Limited.
7. IFSW (2014). Global definition of social work IFSW (2014), Global definition of

social work, Retrieved from <http://www.ifsw.org/get-involved/global-definition-of-social-work>

8. Lum, D. (2011). Culturally competent practice: A Framework for understanding diverse groups and justice issues. Belmont, CA: Brooks/Cole, Cengage Learning
9. Namdaldagva, Oyun-Erdene, Mayagmarjav, S., & Burnette, D. (2010). Professional Social Work Education in Mongolia: Achievements, Lessons Learned and Future Directions. *Social Work Education: The International Journal*, 29(8), 882-895.
10. Батхишиг. А (2018). Бүлэг 1.3. Монголын нийгмийн ажлын боловсролын хөгжил . Оюут-Эрдэнэ, С. Дэмбэрэл, Ж. Албайбаатар нарын хянан тохиолдуулсан Монголын Буддын шашны хүмүүнлэгийн үйл ажиллагаа номны 29-36 х. УБ. Номхур Хэвлэлийн үйлдвэр.
11. Оюут-Эрдэнэ. Н, Байгалмаа. Ч. (2018). Бүлэг 2.1: Буддист нийгмийн ажлын үйл ажиллагааны жишээ. Оюут-Эрдэнэ, С. Дэмбэрэл, Ж. Алтайбаатар нарын хянан тохиолдуулсан Монголын Буддын шашны хүмүүнлэгийн үйл ажиллагаа номны 37-55 х. УБ. Номхур Хэвлэлийн үйлд в э р
12. Оюут-Эрдэнэ, С. Дэмбэрэл, Ж. Албайбаатар (ред) (2018). Монголын Буддын шашны хүмүүнлэгийн үйл ажиллагаа. УБ. Номхур Хэвлэлийн үйлдвэр
13. Мөнхтөр Д (2008). Социологи дахь бүлийн судалгааны уламжлал ба Монголын нүүдэлчний соёлын онцлог. Хот хөдөөгийн социологийн лекцүүд. Хэвлэгдээгүй
14. Жаргалсайхан. О, Оюут-Эрдэнэ. Н (2018). Бүлэг 2.2: Монгол дахь Буддын шашны нийгэм хүмүүнлэгийн ажлын дүр төрх. Оюут-Эрдэнэ, С. Дэмбэрэл, Ж. Албайбаатар нарын хянан тохиолдуулсан Монголын Буддын шашны хүмүүнлэгийн үйл ажиллагаа номны 56-69 х. УБ. Ном х у р Хэвлэлийн үйлдвэр
15. Цэндсүрэн. Т. (2018). Бүлэг 2.3: Буддын шашны сүм хийдийн үйл ажиллагаа. Оюут-Эрдэнэ, С. Дэмбэрэл, Ж. Албайбаатар нарын хянан тохиолдуулсан Монголын Буддын шашны хүмүүнлэгийн үйл ажиллагаа номны 70-77 х. УБ. Номхур Хэвлэлийн үйлдвэр



ARIISW Project:

**"What
Buddhist Social Work
Can Do, While Western-
rooted Professional
Social Work Can Not"
(Empirical Proof)**

What Buddhist Social Work Can Do While Western-rooted Professional Social Work Can Not

Tatsuru Akimoto

Josef Gohori

ARIISW, Shukutoku University



Buddhist temples/pagodas/monasteries and monks/nuns and Western-rooted professional social work agencies and workers have been engaged in similar and same works/activities. Both have been serving for various physical and mental and social and economic sufferings of people—the poor, children, the elderly, the diseased, people with disabilities, disaster and war victims, and many others. We temporarily name those activities by Buddhist temples and monks & nuns “Buddhist social work” in this research albeit they do not necessarily use the term of social work.

We would like to find out the difference between the two social works beyond the difference of players. We would like to find the “essence and features” of “Buddhist social work”.

We have asked coresearchers from Vietnam and Sri Lanka to

- (1) find out an effective or successful Buddhist social work practice whose parallel practice by Western-rooted social work did not work effectively or successfully, in a specific subfield of social work such as counseling, a recovery program for withdrawals, casework on the poverty and crime, disaster relief, and mobilization of resources,
- (2) conduct close observational research to collect empirical data,
- (3) describe both of the cases of Buddhist social work and Western-rooted professional social work in detail—how they have been practiced and functioning,
- (4) analyze why and how the Buddhist social work practice worked effectively and successfully because of Buddhism while Western-rooted professional social work did not, and
- (5) extract the essence and features of Buddhist social work in that specific case.

A group of monks, university professors, and NGO leaders formulated a working definition of Buddhist social work in 2018, which signified some “essence and features” of Buddhist

social work extracted inductively and conceptually through discussion and writing. They are, however, still at the hypothetical level. They must be more rigid, being tested and refined by empirical research and data. Without documentation of those findings, Buddhist social work could neither be transmitted to the current other practitioners and the next generation practitioners nor communicable with the Western-rooted professional social work. Without this process, Buddhist social work could never improve itself to serve people better and more effectively. The empirical data collection and their accumulation are indispensable steps towards the construction of Buddhist social work.

Diverse Applications of Buddhist Social Work in Mental Health Care in Vietnam

Huong Nguyen

University of South Carolina, USA



This paper aims to showcase the diverse applications of Buddhist social work in the area of mental health care in Vietnam. In particular, the paper reports the results of three interconnected research studies exploring the use of Buddhist practices to help people with mental health problems in three settings: Buddhist temples, psychiatric hospitals, and in the community.

Study 1: Buddhist social work performed by Buddhist monks and nuns at temples in Vietnam.

At present, Vietnam has nearly 54,000 Buddhist monks and nuns, and 19,000 Buddhist temples and monasteries. The majority of temples are situated in the communities and performing many activities to help people with mental health problems, including individual and family counseling, meditation, chanting sutras and mantras, performing rituals and good deeds, and exorcism. Between 2012 and now, I had conducted an ethnographic study and in-depth interviews with monks at Buddhist temples in Vietnam about their help activities. The results of the study showed that Buddhist temples were able to help people with various mental disorders to reduce and recover completely from their symptoms. In many cases, Buddhist monks served as the last resort for patients who were deemed untreatable by psychiatric hospitals.

Study 2: Mental health professionals used Buddhist therapy with mental health patients Mai Huong Psychiatric Hospital in Hanoi, the only daytime psychiatric hospital in Vietnam, has been using a meditation therapy as group therapy to help mental health patients, especially those with depression, anxiety disorders, and stress-related disorders. From 2014 to 2016, I conducted in-depth interviews and surveys with mental health patients and professionals here to learn about the benefits of meditation therapy and how Buddhism can be further applied to mental health care. The results of the study showed that most patients

found Buddhism-based therapies to be helpful, especially to stress-related disorders. They strongly supported the offering of Buddhism-based therapies in formal mental healthcare settings. However, most of them believed the therapies would be best offered together with medication. They also believed that having monks and nuns providing therapies would improve the quality of the therapies.

Case 3: Doctors, nurses, and social workers used Buddhist stress-reduction techniques to help family caregivers of elderly people with Alzheimer's disease.

Vietnam is one of 10 fastest aging countries in the world, with an increase in the number of elderly people having Alzheimer's disease and other dementias. The burden of caring for elderly people still fall on family members, many of whom develop depression, stress, and other mental disorders while providing care. Since 2016, the doctors, nurses, and social workers at Vietnam National Geriatric Hospital have been using Buddhist stress-reduction techniques to help family caregivers reduce stress and burden. They also used these techniques to help themselves reduce stress when working with distressed family caregivers and patients.

Keywords: *Vietnam, Buddhist social work, mental health*

Is Indigenization an Answer?

Social Work Practice in Canada: Weaving Together Indigenous, French and English Roots

Nicole Ives

McGill University, Canada



The question of “What is Canadian social work?” cannot be answered without adequately understanding the complexity of Canadian histories and contexts. First, a historical overview summary of social work in Canada will be provided, highlighting Indigenous, French, and English approaches to addressing needs. In the Canadian context, “Indigenous” refers to First Nations, Métis and Inuit Peoples. These elements of Canadian history are unpacked, illustrating how they have shaped and informed contemporary social work practice in Canada. Second, implications for social work education will be presented through a discussion of one path of Indigenization in the School of Social Work in

Montreal, Quebec, Canada. Two of the Truth and Reconciliation Commission of Canada’s Calls to Action focused on Indigenous child welfare and justice will be discussed, with three examples from McGill University School of Social Work’s reconciliation path. The final section is devoted to how indigenizing social work can be practiced on the ground in communities and whether social workers could be effective if they fail to question social work practice’s “transportability across cultures and languages or its relevance to the contexts in which is it being transplanted” (Gray & Hetherington, 2013, p. 27).

Understanding social work history in Canada is critical to ensuring that contemporary practice is respectful, relational, and supportive of client well-being as professional social work has had a largely negative history with Indigenous Peoples in Canada. Social workers removed children from their homes, placing them in non-Indigenous homes during the 1960s and 1970s during “the Sixties Scoop.” From a contemporary perspective, Indigenous children are placed in foster care by child welfare social workers at a rate substantially higher than non- Indigenous children (Blackstock, 2012). Addressing social issues effectively within Indigenous

communities through helping and healing was present before colonization by English and French settlers, yet the importance of such foundations has been overlooked historically by the social work profession. Exploring Indigenous helping and healing traditions centres on learning from oral histories passed down through centuries. Approaches to helping have been experienced with Indigenous Elders, traditional healers, and helpers who have shared their knowledge, abilities, spiritual paths, and experiences through role modeling, storytelling, ceremonies, and sharing circles (Arnaquq, 2015; Hart, 2009). From a professional perspective, contemporary Indigenous social work is “a form of social work which seeks effective culturally appropriate research, education and practice. In this sense it is a decolonized form of social work” (Grey & Hetherington, 2010, p. 27).

Indigenous scholars and Elders in Canada have described foundational Indigenous worldviews which offer insight into how Indigenous Peoples have experienced and continue to experience helping and healing (Ives, Denov & Sussman, 2020). Dr. Michael Hart, a Cree scholar, describes the Medicine Wheel as a relevant medium for social work practice for individuals and communities. As individuals seek *mino-pimatisiwin*, a Cree concept of “the good life”, they journey toward the centre of the Medicine Wheel, integrating wholeness, balance, connection, harmony, growth, and healing. When they are healthy in their journey, they are in a position to help others on their path. Inuit have a similar concept called *maligait*, which is Inuktitut for “living the good life”. *Maligait* includes working for the common good, respecting all living things, maintaining harmony and balance, and continually planning and preparing for the future. Indigenous approaches to helping and healing are holistic, which emphasize the importance of relationships and traditions of reciprocity. Thus, unlike the English and French approaches to relief provision which were largely punitive, receiving assistance is not stigmatized. Instead, it is considered “as a natural part of everyone’s life and is central to the health of families and communities” (Baskin & McLeod, 2020, p. 222).

Across Canada, churches played a foundational role in the development of private charity organizations. All assistance was provided by private charity organization societies or religious entities either through outdoor relief, where material assistance was given to individuals and families in their own homes, or more punitively through indoor relief, where assistance was provided in an institutional setting (poorhouse or workhouse). Providers of relief believed two major tenets regarding poverty (Ives, Denov & Sussman, 2020). First, poverty was believed to be a result of individual “flaws” of character. Second, people in poverty were evaluated as bring either “deserving” or “undeserving.” Receiving charity was a privilege, not a right; thus, it was only conferred upon those evaluated as “deserving.” “Deserving” individuals who were in poverty through no fault of their own, such as widows, orphans, people with chronic illness, and the elderly, but only if they were not engaged in “immoral activities” (e.g., substance abuse) as perceived by relief providers. Those considered able to work but who were unemployed (e.g., unemployed men, unmarried women) were seen as “undeserving” and were sent to workhouses. In the late 19th and early 20th century, moving

toward more organized initiatives for relief, Charity organization societies and Settlement House were established across Canada. While Charity Organization Societies viewed families in poverty as dysfunctional within a well-functioning society, followers of the Settlement House Movement saw poor families as doing their best to survive in societal frameworks in need of reform. The Social Gospel Movement brought together theological and social movements focused on social development and change (Ives, Denov & Sussman, 2020).

As we approach contemporary social work practice in Canada, it is imperative to engage in challenging discussions of whether social work can be used to heal ruptures that past events, attitudes, and behaviours have caused. Teaching “generic” social work practice will not heal these



wounds; rather, perpetuating the idea of a “generic” practice maintains the colonial perspectives that brought about the harm in the first place and ignores historically caused present-day trauma. Such discussions must directly address issues of power and an examination of who benefits from the continuation of unjust systems. One way to engage in this discourse is by adopting a decolonizing approach to social work. A decolonizing approach “necessitates a confirmation of Indigenous wisdom’s place in social work curricula, requires social workers to reflect on their privilege in relation to their social location, recognizes the importance of Indigenous rights not only to Indigenous Peoples but also to non-Indigenous Peoples, and addresses issues of power” (Ives & Loft, 2013, p. 244) within professional social work. Thus, central to a decolonizing approach is illuminating past offenses in order to promote healing and forgiveness. This is the purpose of a Truth and Reconciliation Commission (TRC). In 2008, as part of the Indian Residential Schools Settlement Agreement, the Truth and Reconciliation Commission of Canada was established. The TRC was mandated to work with Residential School survivors and others to publicly reveal the truth about Canada’s residential school system and facilitate methods of reconciliation among former student survivors, their families, and communities as well as with all Canadians (2015). To facilitate healing and redress for Indigenous Peoples in Canada, the TRC compiled a comprehensive list of calls to action. Multiple calls to action are explicitly relevant for social work education; three are discussed below.

Call 1 under Child Welfare calls for social workers and others involved in child welfare to be “properly educated and trained about the history and impacts of residential schools”, ensure “that social workers and others who conduct child-welfare investigations are properly

educated and trained about the potential for Aboriginal communities and families to provide more appropriate solutions to family healing” and require “all child-welfare decision makers consider the impact of the residential school experience on children and their caregivers” (TRC, 2015, p. 1). Under Education, Call 10 calls for new legislation to fund and support “improving education attainment levels and success rates” of Indigenous Peoples and “developing culturally appropriate curricula” (p. 2). Under the Justice category, the call targeted law schools in Canada but the call content was directly relevant for social work schools. Call 28 calls for a requirement that “all law students...take a course in Aboriginal people and the law, which includes the history and legacy of residential schools, the United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples, Treaties and Aboriginal rights, Indigenous law... This will require skills-based training in intercultural competency, conflict resolution, human rights, and antiracism” (TRC, 2015, p. 3).

Higher education, like Canadian institutions more broadly, is still grappling with how to effectively enact decolonizing strategies. McGill University’s School of Social Work has been on a path of reconciliation, and, more recently, the School has actively sought to employ decolonizing strategies. Responding to Calls 1 and 10, we have greatly increased Indigenous content throughout the social work curriculum, making conscious attempts to integrate rather than simply add on. In 2007, the School created Indigenous Access McGill, a program to support Indigenous students in social work through student support and curriculum development. Our initial focus was the recruitment and retention of students from underrepresented Indigenous communities. Since its founding, the School of Social Work has graduated 22 Indigenous students; 15 students are currently enrolled in Bachelor of Social Work, the Master of Science in Couple and Family Therapy, and the PhD program. Students have represented the Mohawk, Ojibwe, Inuit, Métis, Mi’gmaq, Wendat, and Cree Nations.

In 2010, under the guidance of Indigenous scholars from a university in British Columbia, in order to create a space where students saw themselves reflected positively in curriculum, we developed a course, entitled Indigenous Field Studies, founded on Indigenous ways of knowing, learning and being, grounded in local contexts of the Mohawk Territory of Kahnawá:ke, near Montreal, Quebec. The course, bringing together Law, Medicine, Anthropology, Nursing and other disciplines has addressed a critical gap in students’ knowledge about Indigenous cultures and worldviews while creating linkages to students’ areas of practice in a community context. Responding to Call 28, in 2016, we required all undergraduate social work students to complete the course First Peoples’ and Social Work before graduation. Moving the course from an elective position to a required one ensures that all social work students are exposed to the history and legacy of residential schools, including how intergenerational trauma has shaped Indigenous communities today.

Contemporary Canadian social work is shaped by national, provincial, municipal, and neighbourhood social, economic, political, legislative and cultural contexts. Commonalities do

exist across these myriad contexts, such as a shared commitment to individual and collective well-being. However, do we all share the same goals? Is our primary goal social justice, is it living a good life, is it social inclusion? Social work must be enacted with local realities at the forefront of practice, shaped by histories and realities of the people who live in the communities. This is an issue that we have wrestled with during this conference. For example, in Montreal and across Quebec, social work practice looks vastly different. Point St Charles, a historically impoverished neighbourhood of Montreal populated heavily by English-speaking Irish Catholics for generations, community practice is enacted differently from social work practice in Outremont, a neighbourhood with a large Hasidic Orthodox Jewish population, and different from social work practice in Côte des Neiges, a region of Montreal populated by Filipino, Jewish and Black English-speaking communities but also by people from Eastern Europe, North Africa, Latin America and Southeast Asia. Over half the population (54%) is a member of the Statistics Canada “visible minority” category and a third of the population is considered low income. Social work practice is also different in Nunavik, Quebec’s Inuit territory, with 14 communities connected only by air or sea in the summer and air or skidoo/dogsled in the winter. There are only two Inuit social workers in Nunavik’s 14 communities. Thus, nearly all social workers are from outside the community, and, most importantly, outside Inuit culture.

Most of us work in universities that, following Akimoto’s (2017) typology, are either Model A structured, where social work follows western-rooted social work relatively uncritically and resembles practice in other places regardless of context, or Model B structured, where social work practice accepts a western-rooted model while seeking “to improve it by making it more complete and more appropriate for their own societies” (Akimoto, 2017, p. 23). I consider Indigenous Access McGill and the Indigenous Field Studies course “Model C” initiatives situated in a Model B School within a Model A-B university. As an independent approach, Model C moves from indigenization as “the adoption and adaptation of theories and practices in social work in ways that are relevant to the local (indigenous) context” towards authentization, an approach to social work theory, education, and practice development derived from locally-based contextual realities (Ives, Denov, & Sussman, 2020, p. 399). Thus, social work practice is an authentic reflection of “social work is born in people’s lives and the cultural of a society...grow[ing] in response to their experiences” (Akimoto, 2017, p. 4).

References

- Akimoto, T. (2017). The globalization of Western-rooted professional social work and exploration of Buddhist social work. In J. Gohori (Ed.), *From Western-rooted professional social work to Buddhist social work: Exploring Buddhist social work* (pp. 1-44). Gakubunsha: ARIISW, Shukutoku University.
- Arnaquq, N. (2015). *Uqaujuusiat: Gifts of words of advice: Schooling, education and leadership in Baffin Island*. In F. Walton & D. O’Leary (Eds.), *Sivumut: Towards*

the future together; Inuit women educational leaders in Nunavut and Nunavik (pp. 11–28). Toronto, ON: Canadian Scholars' Press.

Baskin, C., & McLeod, A. (2020). Indigenous Peoples and social work. In N. Ives, M. Denov, and T. Sussman, *Introduction to social work in Canada: Histories, contexts, and practices*, 2nd edition (pp. 219-255). Don Mills, ON: Oxford University Press.

Blackstock, C. (2012). Moving forward in hope. In D. Fuchs, S. McKay, & I. Brown (Eds.), *Awakening the spirit: Moving forward in child welfare; Voices from the prairies* (pp. xvii–xxiv). Regina, SK: Canadian Plains Research Centre.

Gray, M., & Hetherington, T. (2013). Indigenization, Indigenous social work and decolonization: Mapping the theoretical terrain. In M. Gray., J. Coates, M. Yellow Bird, and T. Hetherington (Eds.), *Decolonising social work* (pp. 25-41). London: Ashgate.

Ives, N., Denov, M., & Sussman, T. (2020). *Introduction to social work in Canada: Histories, contexts, and practices*, 2nd edition. Don Mills, ON: Oxford University Press.

Ives, N., & Loft, M. (2013). Building bridges with Indigenous communities through social work education. In M. Gray., J. Coates, M. Yellow Bird, and T. Hetherington (Eds.), *Decolonising social work* (pp. 239-255). London: Ashgate.

Truth and Reconciliation Commission of Canada. (2015a). Honouring the truth, reconciling for the future. Summary of the Final Report of the Truth and Reconciliation Commission. Available at http://nctr.ca/assets/reports/Final%20Reports/Executive_Summary_English_Web.pdf.

Truth and Reconciliation Commission of Canada. (2015b). *Truth and Reconciliation Commission of Canada: Calls to Action*. Available at: http://trc.ca/assets/pdf/Calls_to_Action_English2.pdf.

Objection to Western-rooted Professional Social Work

To Make Social Work Something Truly of the World: Indigenization Is Not the Answer

Tatsuru Akimoto
Yusuke Fujimori
Josef Gohori
Kana Matsuo
ARIISW, Shukutoku University



We would like to make social work, which we love, something of the whole world. Social work should exist to serve all suffering people in this world.

The dissemination of current social work (Western-rooted professional social work; WPSW) is not able to make social work the social work of the whole world. It is simply the globalization of WPSW. Its indigenization—a popular word these days—is not the answer, either. Indigenized social work is still WPSW. The exploration and establishment of an indigenous social work, which is different from but equal in status to WPSW, is necessary to achieve our goal. WPSW must be modest; indigenous

social work must catch up WPSW. Buddhist social work poses a question.

1. Social Work Is One Entity

Wherever we go in Asia, Africa, and Latin America, we hear the chorus of professionalization. We constantly hear such terms as human rights, social justice, empowerment, self-determination, and social reform.

It sounds as if we, those in social work, were all one. Some people even state, “We are a global profession.” What is social work? It’s easy to get an answer. Just ask the social workers and social work teachers around you. All would say the same, most typically, “Look at IASSW/IFSW’s Global Definition of Social Work Profession.”

Social work is a practice-based profession and an academic discipline that promotes social change and development, social cohesion, and the empowerment and liberation of people. Principles of social justice, human rights, collective responsibility and respect for diversities are central to social work. Underpinned by

theories of social work, social sciences, humanities and indigenous knowledges, social work engages people and structures to address life challenges and enhance wellbeing.

The above definition may be amplified at the national and/or regional level.

All the following are included in it: “Social work is a profession,” “an academic discipline,” “social change and development,” “the empowerment,” “social justice,” and “human rights.”

2. “It’s theirs.”

Wherever we go in Asia, Africa and Latin America, we also hear other voices: “Something is wrong,” and “This is theirs,” “The West’s,” “developed countries,” and “It does not fit us.” “Our culture is different.” “Our tradition, life and society are different.”

In the statement that the culture, tradition, life and society are different, there is a mix of two different ingredients, that is, 1) the difference of the degree of industrialization, and 2) the difference of “intrinsic” or “indigenous” culture and traditional life and society.

1) The distribution among the 1st, 2nd and 3rd industries varies. In some countries’ economies, the agriculture, forestry, and fishing industries comprise 60 percent or 70 percent while in some other countries only a small percent. Could the same narrow definition of social work be applicable both in post-industrial societies and pre-industrial societies? The structural development of occupations and their classifications, the level of urbanization, and the percentage of students in higher education are all different. For example, it is not realistic even to imagine “professional social workers” in some countries. There are no—or not sufficient numbers—of professional social workers in most of 200 countries and regions in the world. “This “difference of culture” in this sense may diminish over the time, though.

2) The “intrinsic” or “indigenous” culture is different. Once I said that we could read “individualism”, “modernism”, and “Christianity” between lines in the previous IASSW/IFSW’s international definition of social work. Spontaneously a Buddhist professor in Japan responded, “This is ‘individualism’, ‘modernism’, and ‘Christianity’ themselves.” Theirs are binary thinking (e.g. people vs. the environment, human beings vs. nature), Maslow-like self-actualization, wants/needs, putting yourself at the center, starting with yourself, discarding the “inner” aspect. Ours are harmony, respect of others and elders, help without expecting returns, Buddhism and *kyousei* (coexistence, living together), aren’t they?

3. The Response from “Them”

This social work does not fit us—it is of “developed countries” and “it is the West’s.” Mainstream social work would respond: If “you don’t have any or sufficient professional social workers, import them from us,” or “Produce them”. They know that this is impossible. If “your

culture is different,” then “Change your culture,” or—a little modestly, “Indigenize the social work.” They know that indigenized social work is still WPSW. These sound like colonialists and imperialistic demands and the demand for the globalization of the WPSW itself. In short, social work means WPSW, and must be WPSW. The intention is to make WPSW that of the world with or without modification.

Actually, many professional social workers from the West have worked and are working in social work “undeveloped” countries under colony managing governments, UN programs such as UNICEF, ODA of “developed” countries, international NGO projects, and university programs, or with personal voluntary initiatives. “Social work colonialism!” would be shouted back from the non-Western-rooted social work camp.

While there are at best few professional social workers, people in those “developing” countries have enormous numbers of the same or similar difficulties and problems in their lives as in social work “developed” countries, and also have different problems and difficulties. There is an urgent demand for “social work”. So, then, quickly create huge numbers of professional social workers in countries where only a small percent of young people go to colleges and there is little financial resource. “It is impossible!”

If your culture is different, “Change your culture,” said the then President of IFSW, Ruth Stark, in an international seminar on social welfare held in Tokyo on 10 December 2016 hosted by the Japan College of Social Work. Some participants were frightened.

Another alternative is “Indigenize social work” so that social work could be accepted and would function effectively. Wherever you go these days, you hear the chorus of “Indigenization”, which is another popular word today in the social work community. But can “indigenization” make social work that of the world? The indigenized social work will be still WPSW, won’t it—even if you indigenize much of the WPSW? Can we wait for the accomplishment of the law of conversion from quantity to quality? Remember Christian missionaries who proselytized in Latin America, Africa and Asia a few centuries ago or just several decades ago. They indigenized, for example, decorations of churches, clothes of the priests and the parables they spoke. But the core of what was transmitted was still Christianity.

4. No Thanks for the Globalization of WPSW

WPSW proponents have not even been conscious of the globalization of social work itself. Countries of the WPSW are the absolute minority in the world, only a handful among 200 countries and regions—Europe, North America, Australia, and New Zealand. The overwhelming majority of countries and people on the earth belong to the non-WPSW world. This is a definition of globalization given by a Japanese author (Ohno, K. 2000. *Globalization of Developing Countries—Is the self-sustainable development possible?* Toyo Keizai Shinpo-sha. (in Japanese)):

“Globalization is a process, with a clear direction and hierarchical structure. It values and favors systems of the country at the center over other regions, which tend to either follow or are coerced. It is “self-evident” in the central country’s eyes that their civilization is superior. Globalization implies both a sense of superiority and a sense of mission to extend the benefits to regions that have not enjoyed them yet.

Furthermore, it cannot be denied that globalization has shown a pattern where the central country forces other countries to participate in fields where it has already claimed advantages under rules it has laid down, and then perpetuates that superiority on a progressive scale.” [translated by T. Akimoto]

Was this definition written to describe today’s social work?

5. The ABC Model of Buddhist Social Work

Several years ago, a group of monks, university professors, and NGO leaders began the journey of Buddhist Social Work.

A Vietnamese scholar said:

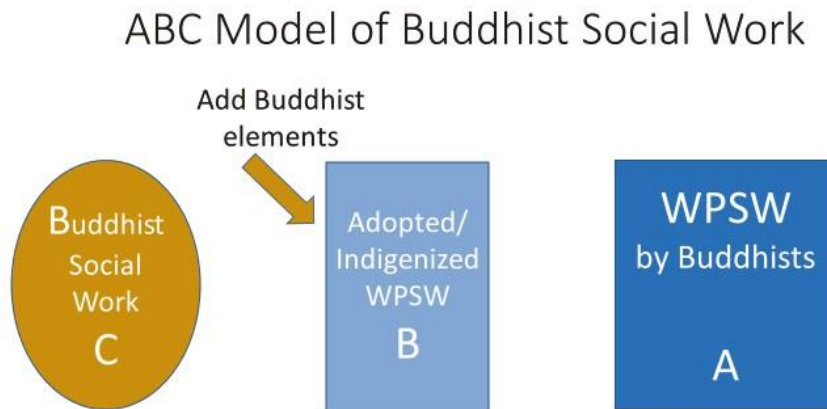
“In our country, social work could not function effectively without considering Buddhism. Elements of Buddhism have infused into every corner of the lives of people, not only Buddhists but also non-Buddhists, Christians and atheists—values, the sense of beauty, the way of feeling and thinking, moral, behavior, and customs. Buddhism came 2000 years ago and has always been with us.”

Some Sri Lankan people had an idea: “Let’s make contemporary social work available to Buddhist monks so that they could serve people in communities better and more effectively.” As soon as they started their discussion, the monks said, “We have been doing the same or similar work for 2500 years,” while WPSW has only done so for 150~200 years, “although we haven’t used the term ‘social work.’”

The Asian Research Institute for International Social Work (ARIISW), Shukutoku University, in the early days of the journey determined three different Buddhist Social Works, or the meaning and usage of the term of “Buddhist social work,” to formulate them as the ABC Model.

Model A Buddhist Social Work is WPSW performed by Buddhists. Only the player (actor) is different. The social work of Buddhist Social Work is the same as WPSW.

Model B Buddhist Social Work is a modification or an indigenization model. Buddhist elements (values, knowledge, and skills) are incorporated into WPSW. The indigenized social work is still Western-rooted professional social work.



Model C Buddhist Social Work is the “intrinsic” or “indigenous” Buddhist Social

Work, not the WPSW indigenized with Buddhist elements. A Bhutanese professor nicknamed it as an ‘organic model’. This Buddhist Social Work does not begin with WPSW but with Buddhism. It is part of the total of Buddhist service/work.

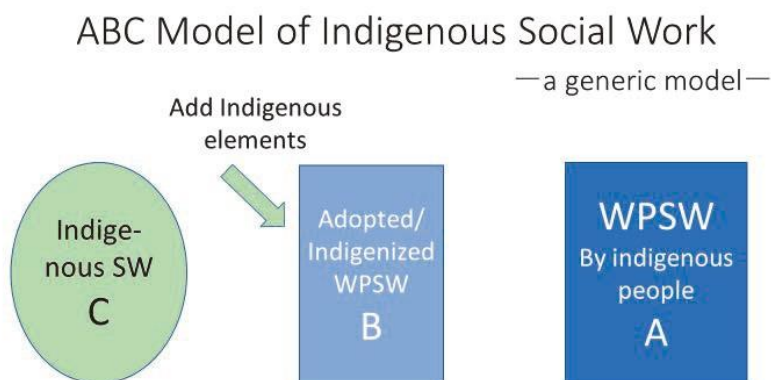
Model A was the understanding until some years ago, and Model B is the popular understanding today. As long as we remain at the levels of Model A and B, we are accepted and even welcomed by the mainstream WPSW, but once we begin talking about Model C, we are rejected by them with the harsh words, “it is not social work,” and are prohibited from using the name of social work.

6. From a Buddhist Social Work Model to an Indigenous Social Work Model

Now, let us replace Buddhist Social Work with Indigenous Social Work to construct a generic model. Indigenous social work here means the social work rooted in the culture, tradition, life and society of indigenous people. The indigenous people here are slightly different from those in the definition of the United Nations and mainstream Western Social Work—“native people,” who “live within geographically distinct ancestral territories (IFSW; Commentary note of IASSW/IFSW Global Definition),” such as Maori, Inuit, and *Ainu* (in the case of Japan). We dealt with Buddhist people in Asia as indigenous people above and applied our concept of Buddhist Social Work’s

ABC Model for indigenous social work in general. In our usage, indigenous people in this paper are not necessarily associated with Western colonization and hegemony and not necessarily confined as a minority in their current countries (cf. above Commentary note), but must have their origins in the community, society, area, region or nation in olden days¹ although “how far” they must go back in history has not been rigidly defined. Included in indigenous social work are Buddhist social work, Islamic social work, Hindu social work, some non-religious social works, Bhutanese social work, Vietnamese social work, Thai social work, etc. as well as social work by indigenous people in the sense of UN and IFSW’s definition above.

The above ABC Model of indigenous social work can be deciphered in parallel with that of Buddhist Social work above. Model A is WPSW performed by indigenous people. Model B is WPSW indigenized with indigenous elements thrown in². And Model C is the “intrinsic” indigenous social work, which begins with the life, culture and tradition of indigenous people, not with WPSW. It is not an indigenized or modified WPSW. Both the highly lauded acceptance and the harsh rejection by the mainstream WPSW are also the same as for Buddhist social work in the section 5 above.



7. An Exploration of Model C

We must explore and establish Model C for four reasons. Otherwise, firstly, it is not interesting intellectually. University professors, or university-men and -women are to pursue something new, something different. Many of people, if not all, talk today about “Indigenization”, that is, Model B, as they previously talked about Model A, describing, for example, Buddhist monks as “Free social workers.” Secondly, if not done, we won’t have our own social work based on our own culture, tradition, life and society forever. Each society should have had “social work” within it. Without it, the society could not have sustained itself. Thirdly, unless we construct our own indigenous social work at the same status as WPSW, not under WPSW, we cannot demote the current social work, WPSW, to a relative position from its sole absolute monarchial position. WPSW and Indigenous social work stand at parity³.

Lastly, even when we discuss on Model B, we do not know what we should throw into Model B as indigenous elements (values, knowledges and skills) without having the Model C of social work, at least conceptually. Words, terms and concepts which are used today as being indigenous features or of different culture, have tended to be daily life commonsense patchwork pieces or impulses, and not to have been examined rigorously⁴. For example, are “*Wa*” (harmony in

Japanese), respect of others, help without expecting returns, and *kyousei*, which were mentioned above, genuinely indigenous features of our society? Or are they “a rice-producing culture,” “Don’t bother/inconvenience other people, ultraism, compassion, and modesty unique culture of our society? We have to know holistically what our own indigenous social work is.

We are interested in the understanding of indigenous social work and its present and future development, but not in the indigenization of nor how to indigenize Western-rooted professional social work nor in the use of “indigenous knowledges” in the IFSW/IASSW Global Definition, to strengthen WPSW⁵.

8. Not to the Third Stage of WPSW but the First Stage for the Social Work of the World? A Letter to WPSW: Conclusion

Our original interest was to make social work something truly of the world (cf. p.1), the common asset of the whole world.

When we set off for the journey of Buddhist social work, we were thinking of leading social work to “the third stage” of its development. Social work was born in Europe (Stage I) and matured in North America (Stage II), and now expands itself to non-Western parts to cover the whole world. We had unconsciously started with WPSW or the equation of social work=WPSW. The realization of ABC Model led us to the new viewpoint of starting with our own culture, tradition, life and society. The meaning of the third stage changed from the dissemination of WPSW, that is, the globalization of social work itself, to the repositioning of WPSW to a relative one equivalent to other social works from the sole absolute one. From the non-WPSW side, it is not “the third stage”, but the first step of another social work, e.g. Buddhist or Indigenous social work—to explore, in order to make social work something truly of the world.

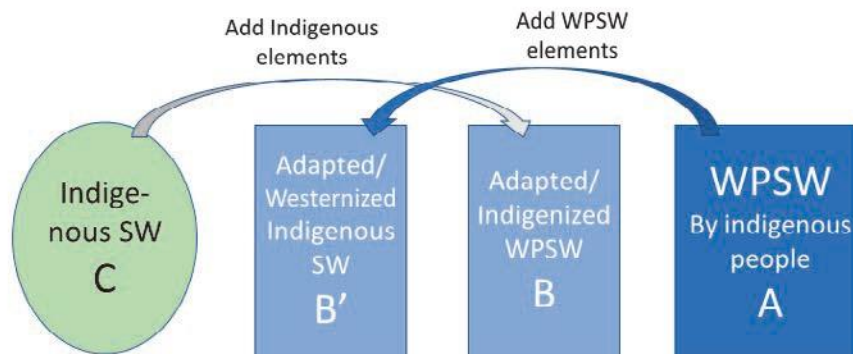
¹ Distinguished from “contextualization”, which lacks the time factor.

² The discussion on “authentication” is not referred in this paper.

³ In order to understand properly the relation and position of Buddhist or Indigenous social work and WPSW, insert Model B', which is an adapted or Westernized Buddhist or Indigenous social work, between Model B and Model C in the above two figures, and you can more fairly and clearly understand the relation and position of WPSW and Indigenous social work, which stand at parity. Previous figures were skewed towards WPSW.

⁴ Most of what they mention as the feature or uniqueness of their culture or e.g. “Buddhism social work” are common with other cultures, or e.g. “Islamic social work,” “Christian social work,” or even “Western-rooted professional social work.”

Put B' to Understand the Relation of 2 Models Fairer & Easier



⁵ IASSW/IFSW's Global Definition does not refer to the indigenization of social work directly although it refers to "indigenous knowledges" as one of foundations which underpins social work engagements with the interest in their "invaluable contribution to science". (Commentary note)

21 December 2019

Dear Western-rooted Professional Social Work,

We respect your efforts and achievements until the present and look forward to further development.

However, please do not proclaim that the only Western-rooted Professional Social Work, or what professional social workers do, is social work, disregarding other “social works” which other people do. You are not entitled to monopolize social work. There could be other social works, too.

On this earth, there are enormous numbers of people who have difficulties and problems in their lives. In most countries and regions, areas and districts, you are not there, or your social work doesn't fit them. You seem to pacify non-Western-rooted Professional Social Work people using the term of “indigenization”, but indigenized social work is still Western-rooted Professional Social Work.

Social work is social work, whoever does it. Rely on various indigenous social works. Otherwise, we cannot deliver social work, which we love, to the overwhelming majority of people with sufferings in the world.

Social work would like to serve people. We would like to make social work something truly of the world. Let's lead social work to its next stage together, not to the globalization of Western-rooted professional social work.

In solidarity,

Tatsuru Akimoto, DSW

Yusuke Fujimori

Director & Professor

Professor

Josef Gohori, Ph.D.

Kana Matsuo, MSW

Sr. Researcher, Asso. Professor

Head Researcher

Asian Research Institute for International Social Work (ARIISW) Shukutoku

University, Chiba, Japan

Closing Remarks

Masatoshi Hasegawa

President, Daijo Shukutoku Gakuen

Head advisor, ARIISW, Shukutoku University



The 4th Shukutoku University International Academic Forum was successfully conducted and completed. I would like to take this opportunity to express my appreciation to ARIISW and all participants, particularly to our guest speakers for sharing their home country's social work practice and education. I am happy to see how researchers and scholars have been working on Buddhist social work research for more than 5 years. I feel honoured to have the privilege to be an advisor to ARIISW and to keep watching on the work of Professor Akimoto and his team from aside.

The outcomes of international academic projects are cross-border collaboration and no such a project succeeds without a strong person in the center of the network. That is why I want to congratulate Professor Akimoto, his team, and all the network members, who have contributed their time and efforts to this joint international research program. I enjoyed listening to presentations and discussions.

During listening to the presentations, one thing came to my mind. It's one of my favorite phrases. Water has a water source, a tree has its root, water flows from the source of water and we benefit from water. Otherwise, we can't live. In the same way, a tree has its root in underground, a trunk, branches, leaves, flowers, and fruits, all grow because there is a root. The title of this forum is the "Journey of Buddhist social work" in Asia. As Professor Akimoto said, where did we come from, where are we going? The next steps of the journey are very important, while the steps we have already taken too. We have to reveal and review the history to explore the root of our culture. That was, I believe, the first step of this journey. Without knowing it, without knowing the roots of our history, how can we find a way forward in this journey?

I have also heard to discussions concerning the indigenous content. Here in Japan, social work education is based on the curriculum which is planned and set to enable students to pass the national examination. However, the curriculum does not include any course on the history

of social work. I had spent 20 years teaching the history of Japan's social work. When I was teaching in the classroom, there was no national qualification exam for social workers. Whether there is a national qualification (certification) or not, the university and me too, have always believed in the importance of this profession. I am worried that social work education has been threatened in the past decades. Students should learn more about pre-modern social work in Japan. During this forum, we heard a lot about the history of social work in each country. However, what about Japan? I am afraid we tend to forget our roots. When we forget and ignore the historical root of social work, that's not good. We tend to look at contemporary and more visible issues, but where are the roots of social work? I think that is all about the indigenous aspects. To say "indigenous" is easy, but to help students to fully understand what indigenous social work means, is very difficult.

There are still huge differences from country to country in the Asian region. Particularly, differences in the vitality of communities, villages, and families. Are they still healthy? Or are they falling apart? The level of vitality of these primary units makes a big difference for the whole country. Activities of Buddhist temples and monks in those communities, and respect for religious groups and monks in South East Asia, is, I think, much higher than here in Japan. In Japan, well, I am one of the monks and I personally regret and feel also responsible for the low esteem and regard. However, I see some little signs of change. As Professor Fujimori and Professor Watanabe reported, during the Hanshin Awaji Great Earthquake and East Japan Great Earthquake, people were struck with big disasters. In the process of reconstruction, temples and Buddhist monks worked very hard in those communities and they helped Buddhist temples to regain trust and confidence from the Japanese people.

The founder of Shukutoku University used to say as follows: "Welfare system could be perfect, but people feel the satisfaction only by people. Systems, institutions do not make people happy. People are made happy only by other people." In many Asian countries, this is already evident. There are social welfare programs and we should continue our efforts to make these programs to work more effectively and address the needs of society. However, public services and social welfare programs, can't, unfortunately, cover every single aspect of people's needs. That's the role of Buddhist monks and temples, which has been neglected and overlooked for a long time. Buddhist social work should focus on communities and people and act there where the needs are not still met by public services and institutions, go and find where there are overlooked or neglected people and communities. I think this is what people and communities are expecting from Buddhist social work. I am fully aware that it is easier said than done. But I would like to keep and follow this approach in social work - Buddhist social work.

Professor Akimoto and researchers at ARIISW are my colleagues. I know that they have worked hard for the last five years. I really appreciate their work. Ministry of Education's

grant to develop strategic research infrastructure enabled this five-years research project. The project will be completed in March 2020. Many people are already questioning what's next? What's beyond this project? I honestly would like to answer this question. Vice President Yamaguchi mentioned that the objective of this grant was to build the strategic research infrastructure. Once the infrastructure is built, what's next? Is this infrastructure strong enough? It will be tested by the future activities we will conduct. And I would like to ask all colleagues, coresearchers, and counterparts to stay with us and keep going on this journey of Buddhist social work.

List of Contributors



Huong Nguyen

Associate Professor, University of South Carolina, USA

Nicole Ives

Professor, McGill University, Canada

Batkhashig Adilbish

Lecturer, National University of Mongolia

Oyut-Erdene Namdaldagva

Senior lecturer, Mongolian National University of Education

W. K. Anuradha Wickramasinghe
Chairman, Small Fishers
Federation of Lanka

H.M.D.R. Herath

Professor Emeritus, University of Peradeniya, Sri Lanka

Phramaha Surakrai Jinabuddhisiri (Congboonwasana)
Lecturer, Mahamakut Buddhist University, Thailand

Sopa Onopas

Secretary-General, Social Work Professions Council, Thailand

Nguyen Hoi Loan

Professor, VNU University of Social Sciences and Humanities, Hanoi,
Vietnam

Bui Thanh Minh

Lecturer, VNU University of Social Sciences and Humanities, Hanoi, Vietnam

Masatoshi Hasegawa

Head Advisor, Asian Research Institute for International Social Work,
Shukutoku University, Japan

President of the Daijo Shukutoku Gakuen

Koji Yamaguchi

Vice President and Professor, Shukutoku University, Japan

Yoshiaki Watanabe

**Program Researcher, Asian Research Institute for International Social Work,
Shukutoku University, Japan**

Tatsuru Akimoto

**Director and Professor, Asian Research Institute for International Social
Work, Shukutoku University, Japan**

Yusuke Fujimori

**Professor, Asian Research Institute for International Social Work, Shukutoku
University, Japan**

Kana Matsuo,

**Head Researcher, Asian Research Institute for International Social Work,
Shukutoku University, Japan**

Josef Gohori

**Associate Professor and Senior Researcher, Asian Research Institute for
International Social Work, Shukutoku University, Japan**

付 録

2019 年国際フォーラムのチラシ
プラットフォームの案内・資料

Asian Research Institute for International Social Work (ARIISW) at Shukutoku University
4th International Academic Forum



The Journey of Buddhist Social Work

Exploring the Potential of Buddhism in Asian Social Work

A group of scholars, monks, and NGO leaders has started a journey to explore the Buddhist social work. To resist the globalization of social work.

Cosponsored by APASWE



December 20 (Fri) and 21 (Sat) 2019
Japan Association for Social Work Education
Seminar Hall Konan 4-7-8, Minato-ku, Tokyo, Japan

Dec 20 (Fri) 9:30 AM : **Journey we've travelled**

1. From the ABC model to the definition of Buddhist social work and beyond (ARIISW)
2. Role of temples, monks, and nuns in the community (ARIISW)
3. Asian Buddhist countries: What have we done? What have we achieved?

Dec 21 (Sat) 9:00 : **Next steps of the journey**

1. Theories, surveys, education, and practice in target countries
2. ARIISW Project: "What Buddhist social work can do while western-rooted professional social work can not" (Empirical proof)
3. Claim on the world social work "Is indigenization an answer? The meaning of indigenous knowledge in the global definition" (ARIISW)

Guest Speakers

Dec 20 : From Asian Buddhist Countries

Nguyen Hoi Loan (Vietnam)
H.M.D.R. Herath and Anuradha Wickramasinghe (Sri Lanka)
Sopa Onopas (Thailand)
Phra Maha Surakrai C. (Thailand)

Dec 21: From Canada

Nicole Ives (McGill University)

This project is funded by Ministry of Education, Culture, Sport, Science, and Technology - Japan

For more details please contact :

ARIISW, Shukutoku University, Daiganji-cho 200, Chuo-ku, Chiba
Tel. +81(43)265-9879 Fax: +81(43)265-7339 asiainst@soc.shukutoku.ac.jp

日本の地域社会におけるソーシャルワークと仏教の協働連携モデルの開発

・淑徳大学アジア国際社会福祉研究所

藤森 雄介

渡邊 義昭

第4回 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所
国際学術フォーラム「仏教ソーシャルワークの旅」
2019年12月20日 日本ソーシャルワーク学校連盟研修室

2.研究の目的

東日本大震災に際して「日本仏教」が担った福祉的実践活動を主たる事例として取り上げて、アンケート調査や現地ヒヤリング等を行ない、その分析から現状や課題の明確化を図り、その課題解決・改善のプロセスを通じて、地域社会における寺院の在り方に関するモデルを提示していく。また同時に、仏教をキーワードに日常的に情報共有ができる「プラットフォーム」の構築と運用を行なっていくことで、日本における仏教SWの実践モデルをアジア諸国の仏教関係団体及び政府機関に示していく。

3.研究の内容

- ・東日本大震災における日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査、分析(宗派調査)
- ・日東日本大震災における仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査、分析(団体調査)
- ・被災地寺院の教訓を今後の寺院防災に活かすアンケート調査、分析(寺院調査)
- ・東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査、分析(社協調査)
- ・東日本大震災被災地域で災害前後以降に地域社会で日常的に取り組まれている寺院を拠点とした諸活動についても、ヒアリング調査、分析(事例調査)
- ・ウェブ上に「仏教社会的実践活動プラットフォーム(仏教プラットフォーム-BPH-)」という日常からの情報共有の場の構築(現時点では、日本語版のみ稼働)
(<https://bukkyoplatform.com/>)

4-1.社協調査概要①

東日本大震災当時(2011年3月11日～概ね3ヶ月間:6月末まで)を振り返り、被災地域で災害ボランティアセンターの運営等を担った、日常から日本の地域社会の福祉ニーズと担い手をつなぐ機能を持つ、被災地の「社会福祉協議会」の担当者に回答して頂いた。

災害大国である我が国において地域住民の生活基盤の一つである仏教寺院や仏教者が、今後どのような役割が求められるか、また担うことができるのかを、「受援」の立場から明らかにするために実施した。

4-2.社協調査概要②

◎調査対象は、甚大な被害のあった岩手県、宮城県、福島県の沿岸部の全ての自治体の社会福祉協議会及び支援を行った社会福祉協議会の一部。

具体的には…

- 1) 岩手県 12協議会 回答数 12協議会(100.0%)
 - 2) 宮城県 15協議会 回答数 15協議会(100.0%)
 - 3) 福島県 5協議会(注1) 回答数 5協議会(100.0%)
- 合計 32協議会 回答数 32協議会(100.0%)

- 4) 岩手県・宮城県・福島県(避難地域及び後方支援) 14協議会(注2) 回答数 14協議会(100.0%)

合計 46社会福祉協議会より回答して頂いた。

注1: 福島県の5つの社会福祉協議会は沿岸部で調査可能な市町村のみ実施。

注2: 原発災害により避難地域(帰還困難区域)に指定されている市町村及び、後方支援など罹災者を受け入れている社会福祉協議会。

4-3.調査の結果①

沿岸部32/避難・後方支援14 社会福祉協議会

問7-2 災害時における宗教施設及び宗教者の活動としてどのような活動が望ましいのか、該当番号を記入しその理由などをお聞かせ下さい。
(複数あれば全記入ください)

質問項目	沿岸地域		避難・後方支援		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1. 罹災者の心のケア	27	27.04%	12	29.27%	39	28.26%
2. ご遺体、ご遺骨の安置	18	18.56%	6	14.63%	24	17.39%
3. 故人の弔い	16	16.49%	11	26.83%	27	19.57%
4. 宗派・教団など関係団体への情報発信	8	8.25%	1	2.44%	9	6.52%
5. 宗教施設を開放した避難所の開設	17	17.53%	7	17.07%	24	17.39%
6. 物資の面での支援のみ	4	4.12%	3	7.32%	7	5.07%
7. 宗教者は関わってほしくない	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
8. その他【記述】	7	7.22%	1	2.44%	8	5.80%
複数回答 N=		97	41	138		

4-4.調査の結果② 沿岸部32/避難・後方支援14 社会福祉協議会

問8 地域福祉を担う社会福祉協議会と宗教施設との平時の役割分担や連携の在り方、災害時の在り方などについてお答えください

問8-1 平常時における、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設及び宗教者の連携についてご意見をお聞かせください。該当番号を記入しその理由などをお聞かせ下さい。(複数あれば全てご記入ください)

質問項目	沿岸地域		避難・後方支援		総計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1. 積極的に連携すべきである	5	12.50%	2	13.33%	7	12.73%
2. 可能であれば連携したほうがよい	22	55.00%	9	60.00%	31	56.36%
3. 災害時に限定した連携でよい	2	5.00%	0	0.00%	2	3.64%
4. 特に必要はない	0	0.00%	1	6.67%	1	1.82%
5. わからない	3	7.50%	2	13.33%	5	9.09%
6. その他【記述】	8	20.00%	1	6.67%	9	16.36%
複数回答 N=		40	15	55		

7

4-5.調査の結果③-1

沿岸部32/避難・後方支援14 社会福祉協議会

◎コメント

・宗教施設の社会福祉実践への参加は大いにやるべきと思います（寺院神社の基本的性格からも）しかし、そうした考えが明確になったのは、東日本大震災津波で実際に連携し、社会資源としての宗教団体、寺院神社等の活動の実際や関係者との信頼関係が結べた結果ともいえます。

8

4-5.調査の結果③-2

沿岸部32/避難・後方支援14 社会福祉協議会

◎コメント

・敷居が高いとされるお寺も多い中で、震災直後の住民の姿から地域の寺院・僧侶であるべきだと痛感した。

・震災後は、寺院を活用したサロンなどを開催し、日頃から檀信徒とだけでなく地域住民とのかわりを持つことが双方にとって有事の際にもメリットがあると考え取り組んでいる。今後は、地域の独居の人などが抱える「孤食」の問題やお寺の特性を活かしたフードバンク的なものを一緒に企画していければと考えている。

9

5-1.事例調査:

岩手県釜石市「韋駄天競争」①

・岩手県釜石市日蓮宗仙寿院は、東日本大震災において151日間、自主的に避難所の役割を果たし、建物内は最大で576名、境内は183名の入で溢れた。

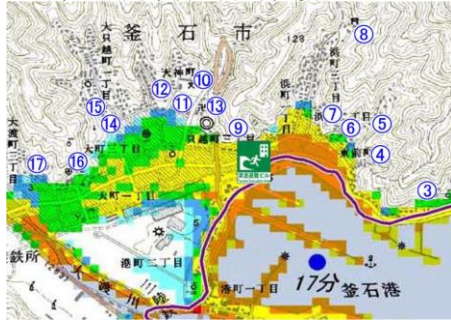
・「韋駄天競争」は、「東日本大震災の記憶を千年先の未来に伝える」という意味を含めて、復興支援団体や地域社会とも協力しながら、仙寿院の主催で2014（平成26）年2月から毎年開催されている行事である。

10

5-2. 韋駄天競争 避難経路 概要

■仙寿院境内⑫

釜石市の指定津波一次避難場所



11

5-3. 韋駄天競争 避難経路 画像



12

5-3.韋駄天競争これまでの参加者推移

開催回数	開催日 2月第一日曜日	参加者数
第1回	平成26(2014)年 2月2日	40名
第2回	平成27(2015)年 2月1日	60名
第3回	平成28(2016)年 2月7日	112名
第4回	平成29(2017)年 2月5日	137名
第5回	平成30年(2018)年 2月4日	123名
第6回	平成31(2019)年 2月3日	154名
第7回	令和2(2020)年 2月2日(予定)	—

13

5-4. 韋駄天競争 第6回開催時の様子①

津波避難の大切さを伝える「韋駄天競走」は、津波で浸水した市街地から高台まで高低差約26メートル、距離約280メートルのコースを駆ける。ゴール地点は仙寿院。2019年6回目。参加者は男女別など6部門に分かれている。



14

5-5. 韋駄天競争 第6回開催時の様子①



15

5-6. 韋駄天競争から考える 寺院と地域の役割と意義①

- **地域連携の視点で**
寺院が主催する地域行事の役割と意義
 - ・ 寺院行事だけでなく地域行事として定着
 - ・ 主催団体が寺院であるという信頼感
 - ・ 地域の身近な存在（寺院）としての評価
- **行政機関との連携の視点で**
 - ・ 災害時の避難所として啓発できる
 - ・ 地域住民の安心安全の担い手としての認識
 - ・ 地域福祉の視点で社会資源として認識

16

5-6. 韋駄天競争から考える 寺院と地域の役割と意義②

- **地域活動から社会的活動への視点で**
 - ・ 開かれた寺院として社会に発信できる
 - ・ 公共性のある活動として社会から認知される
 - ・ 参加者も、単なるイベントではなく社会的な意味があるものとして参加している
- **社会的活動から仏教社会福祉への視点で**
 - ・ 韋駄天競争が、減災という社会的な活動であるだけでなく、仏教者として地域住民の安寧を守り支えるという視点からも評価することができる

17

まとめ①-1

- ・ 20世紀後半の日本の社会福祉と
仏教ソーシャルワーク
- 第二次大戦以降、公的な社会保障制度の充実と、宗教の戦争協力に対する反省を出发点とした「政教分離」の社会的浸透の中で、社会福祉における仏教(宗教)の役割は、(決して消滅したわけではないが)不可視の領域に止まっていた。
- ・ 21世紀に向けた動向
- 戦後50年を経て21世紀を迎える中で、日本社会の福祉ニーズの多様化に対して、敗戦直後の「貧困」に対応する形で制度設計された社会福祉制度は大幅な改革の必要を迫られ、2000年6月に「社会福祉基礎構造改革」が行われた。

18

まとめ①-2

- ・現在そして未来

より加速度的に変化し続ける社会の中で、日本の社会福祉は今も変革の渦中にある。
→「ヒト(担い手)・モノ(場)・カネ(財源)」の慢性的な不足。

19

まとめ②-1

◎日本の仏教

- ・寺院数 → 約75,000カ寺
- ・僧侶数 → 約37万人
- ・寄付の一例
→ 東日本大震災における寄付金計
5,580,413,889円

(全日本仏教会加盟団体のアンケート集計)

→ 社会福祉の担い手として、有力な可能性を持った「社会資源」としての力がある。

20

まとめ②-2

・一方で、日本の寺院・僧侶が現在も行っている諸活動について、彼らは基本的に「ソーシャルワークを実践している」とは考えていない現状がある。

・これらの諸活動を「仏教ソーシャルワーク」の視点で整理し、その行動原理や方法論を明確にしていくことは、アジアの仏教を主たる宗教とする国々にとっても有用であると考えられる。

・更に、この仏教ソーシャルワークを、ソーシャルワークのグローバル定義における「地域・民族固有の知」の1つとして検討することは、アジアと世界のソーシャルワークにも貢献する事につながると考えている。

21

ご静聴ありがとうございました

22



仏教社会的実践活動
プラットフォーム

仏教社会的実践活動 プラットフォーム

平成29年3月 サイト開設しました
災害時の情報共有だけでなく、広く仏教
関係団体の、社会的活動の実践情報共
有と、検索機能を備えた最初のプラッ
トフォームです。

仏教社会的実践活動プラットフォームは、
宗派教団の垣根を越えた情報共有や
交流の「場」づくりを目的としたプラットフォームです。

仏教社会的実践活動プラットフォームについて

仏教では、生きとし生けるものを慈しみ、さまざまご縁によって生かされていることを感謝し、他に奉仕することを説いております。日本においても、このお釈迦様の教えを実践する数多くの団体が、多岐にわたる社会活動、支援活動をされています。

しかし、これまでその宗派教団の垣根を越えた、インターネット上のネットワークは、残念ながら存在していませんでした。

そこで、地域社会の中で日頃から行われている仏教関係団体の社会的実践活動とその記録を一堂に集めてご紹介し、お互いに情報交換や情報共有をして、ゆるやかな連帯・協働をはかるご縁となる「場」を提供することで、活動のより一層の活性化や社会への認知を図るとともに、一般の利用者の方々に対しては、身近なサービス情報やボランティア情報を得ることのできるプラットフォームを構築することを考えました。

私達は阪神淡路大震災、東日本大震災をはじめとする未曾有の災害も体験して参りました。日頃から緩やかなつながりを持つこうした社会基盤こそ、将来、緊急災害時にも必ずや役にたてるものと確信します。

もちろん仏教徒ではない団体や公的機関もご参加、ご活用できます。また、信仰を問わず、どなたでもご利用できます。幅広い層の方々にご利用いただき、ご縁を支え、ご縁を広げるプラットフォームとなることを願ってやみません。

平成29年3月

宗派教団の
垣根を越えた

仏教の社会的
実践活動

情報共有・交流の
「場」づくり

<https://bukkyoplatform.com/>

仏教社会的実践活動プラットフォーム

検索



仏教社会的実践活動プラットフォーム

運営主体 淑徳大学アジア国際社会福祉研究所
アジア仏教社会福祉学術交流センター
所在地 千葉県千葉市中央区大蔵寺町200
電話 043(265)9879
E-mail b-platform@soc.shukutoku.ac.jp

掲載を希望される団体・寺院様へ

当サイトは、全日本仏教会、日本仏教社会福祉学会、仏教NGOネットワークの理解のもと、プラットフォーム基盤を構築するものです。社会的実践活動をしている貴団体、御寺院を登録し、その活動内容を記録していくことで、その活動内容を世間に広くご紹介するとともに、団体同士の相互交流にも役立つものと考えます。

また、こうした仏教者の活動に理解を示してくださる一般の団体やNPO、施設、公的機関、学校、企業、町内会等の皆さまも登録いただけますので、ぜひ積極的にご利用ください。一般のサービス利用者やボランティア、関連団体と幅広いネットワークを築いていくことができます。

※掲載料は一切かかりません。登録フォームにご活動内容をご記入ください。こちらで事前確認させていただいた後、IDとパスワードを発行いたします。

※同じ団体であっても、複数の活動をしている場合、複数の登録も可能です。

よくある質問 一般ご利用の皆様

Q このサイトで何ができるのでしょうか？

A 身近にある仏教系社会的実践活動団体を検索し、必要なサービス情報やボランティア情報などを得ることができます。また、仏教活動アーカイブスの活用により、仏教関連団体の社会活動に関する資料を閲覧することができます。

Q このプラットフォームはどのように活用すればいいのでしょうか？

A 所在地や活動分野・内容、キーワード、宗派教団、組織などから仏教系社会支援活動団体を検索することができます。身近なサービスのご利用やボランティア活動にお役立てください。また、アーカイブスには各団体の資料を保存してありますので、ぜひご利用ください。

Q 掲載団体はすべて仏教の団体や寺院だけですか？

A いいえ。仏教系寺院や宗派教団、仏教系諸団体に限らず、当サイトの趣旨に賛同する一般の団体やNPO、行政等の公的機関なども含まれています。

Q 仏教徒でなくても、このプラットフォームを利用できますか？

A はい。宗教宗派や信仰を問わず、どなたにでもご利用いただけます。

Q ここに掲載されているサービスには料金がかかりますか？

A 当プラットフォームのご利用には一切料金はかかりません。各団体が行うサービスや活動については、その主体となる団体にお問い合わせください。

アーカイブス機能

過去に公開された活動報告書や会報、ニュースレター、パンフレットなどを、アーカイブスで公開・保存することができます。ご希望の団体はぜひご利用ください。

仏教社会的実践活動プラットフォーム <https://bukkyoplatform.com/>

仏教社会的実践活動プラットフォーム 検索

「仏教社会的実践プラットフォーム」 (仏教プラットフォーム) 登録のご提案

藤森雄介
(淑徳大学アジア国際社会福祉研究所)

平成30年11月9日
各宗派教団関係者の皆様

「東日本大震災における仏教界の果たした役割」に 関連した、以下の4種類の調査

- 1.『東日本大震災における日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査』(「宗派教団調査」) 平成27(2015)年6月
- 2.『被災地寺院の教訓を今後の寺院防災に活かす聞き取り票(アンケート調査)』(「被災地寺院調査」) 平成27(2015)年6月
- 3.『平成23年3月11日東日本大震災における仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査』(「直接支援団体調査」) 平成27(2015)年6月
- 4.『東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査』(「社協調査」) 平成30(2018)年3月

それぞれのアンケート調査結果から見えてきた 共通の課題①

- 1.『東日本大震災における日本仏教各宗派教団の取り組みに関するアンケート調査』(「宗派教団調査」)

アンケート調査結果から…

・「救援施設、復興施設ともに被災寺院のニーズに応えられなかったか不安です。また、情報、物、人の流れ方を含む、緊急時の体制を抜本的に見直す必要があります」

・「より迅速に、よりきめ細やかに応じるためには、それぞれの団体相互の更なる連携が必要であると考えます」

それぞれのアンケート調査結果から見えてきた 共通の課題②

- 2.『被災地寺院の教訓を今後の寺院防災に活かす聞き取り票(アンケート調査)』(「被災地寺院調査」)

アンケート調査結果から…

・「市との連絡がうまくいかない。支援食料も3日来ないので、寺のもので小粥などをして2日間支えた。」

・「行政や自衛隊などが、避難所であることを認識してもらうこと、支援をもらうことが困難。」

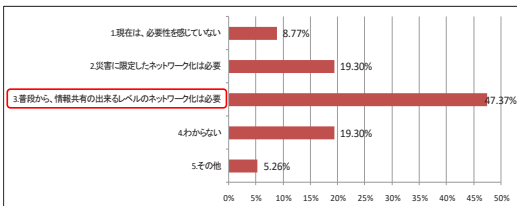
それぞれのアンケート調査結果から見えてきた 共通の課題③

- 3.『平成23年3月11日東日本大震災における仏教系各種団体の震災支援に関するアンケート調査』(「直接支援団体調査」)

アンケート調査結果から…

問い:

仏教系諸団体との連携などネットワーク化の必要性について

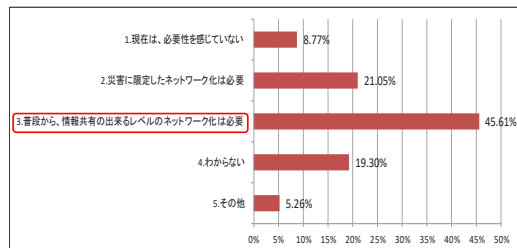


それぞれのアンケート調査結果から見えてきた 共通の課題④

「仏教系各種団体へのアンケート調査」結果から…

問い:

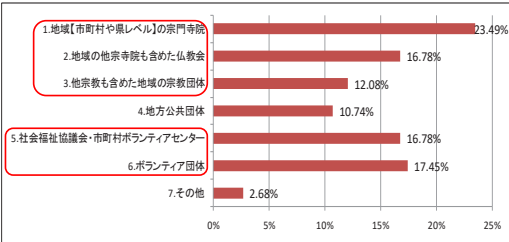
地域における諸団体との連携などネットワーク化の必要性



それぞれのアンケート調査結果から見えてきた
共通の課題⑤

「仏教系各種団体へのアンケート調査」結果から…

問い：
具体的にどのような団体との連携が必要か



7

それぞれのアンケート調査結果から見えてきた
共通の課題⑥

4.『東日本大震災を契機とした、地域社会・社会福祉協議会と宗教施設(仏教寺院・神社等)との連携に関するアンケート調査』(「社協調査」)

アンケート調査結果から…

・「寺院や神社などは、誰かが亡くなったり、地域の行事がないと関わらないところであるという認識があったが、震災をきっかけに僧侶の方々と関わることで、日頃から関わっていることのメリットを多く感じる事ができた。

現在は町外、県外の僧侶の方々の支援が主だが、町内の寺院や僧侶の方々との連携図り、地域福祉活動の強化を図っていきたい。」

8

それぞれのアンケート調査結果から見えてきた
共通の課題⑦

◎「社協調査」結果から…

・「コンビニの数より多いと言われる寺院は、地域の社会資源であり、

また、僧侶の方々はソーシャルワーカーであるとも考える。

地域福祉を進めるうえで、そのような方々と連携を図りつつ地域に根差した活動を行っていければと感じる。」

9

見えてきた、「共通の課題」とは…

「共通の課題」

これらの調査結果から、それぞれの立場を越えて「普段から情報共有のできるレベルのネットワーク化は必要」とのニーズが顕在化。

「改めて」

災害時の支援活動に際しては他団体や関係機関との連携・協働が欠かせないが、その活動がスムーズに行えるようにするには、普段からの関係性を構築(ネットワーク化)し、維持しておかなくてはならない。

10

求められている「ネットワーク化」とは…①

「平時の状態」

これまでの仏教界は、日常においてネットワーク化を行っていなかったとは言いきれないが、それぞれの宗派教団や団体のレベルにおいては行っていた。

「災害時」

しかし実際には、東日本大震災のような大災害の際には、結果として十分機能しなかった。

「支援団体の認識」

少なくとも、支援活動に関わった諸団体からは、「情報共有」という点について課題があるという認識が多かった。

11

求められている「ネットワーク化」とは…②

「現状の課題とは何か」

それぞれの宗派教団や団体内におけるネットワーク化は行われていても、それはドメスティック(内向き)なものに留まっていたのではないかと。

「改善に向けて」

つまり、「仏教」をキーワードに、これまでの宗派や単一団体を越えて、「顔見知り」程度でもかまわない緩いつながりを持つことができる。

一方で外向きにも意識した、一般社会へ広く接続可能かつ持続可能な「情報共有の場」の構築が必要なのではないかと。

12

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」①

「平時の役割を担う」

「普段から情報共有のできるレベルのネットワーク化は必要」とのニーズに答えるために、

**「仏教社会的実践活動プラットフォーム」
（「仏教プラットフォーム」）**
を、ウェブ上に構築しました。

13

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」②

「礎(いしずえ)の構築が必要」

プラットフォームに登録、参加して頂きたい皆様

①各宗派教団の担当部局

例えば、浄土宗であれば災害復興事務局、社会福祉推進事務局(複数可)といった部局ごとの登録が考えられます。

②仏教系直接支援団体

日頃、ホームレス支援や子ども食堂といった福祉的な活動だけでなく、教育支援や文化活動等、地域に開かれた社会的活動を行っている団体も含まれます。

14

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」③

③各宗の青年会、寺庭婦人会等

一宗の青年会というより、日常において独立した活動を展開している、例えば教区や組の青年会等の単位で登録して頂くことを想定しております。

つまり、日頃の活動に関する情報の送受信やコミュニケーションが取れる集団の単位で、ぜひ登録して頂きたいと考えています。

④県や市町村単位の仏教会

15

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑤

⑤日頃から社会的な実践活動を行っている、又は関心のある寺院

普段から活動している寺院だけではなく、例えば災害時の備えを行っている寺院や、自治体と災害時における避難所等の災害協定を結んだ寺院などにも、ぜひ登録して頂きたいと考えています。

※ご住職や副住職といった「個人」単位での登録については、現時点では、個別対応にて判断させて頂いております。

16

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑥

◎ご登録、利用して頂くことで期待できるメリット1

- ・情報共有の機会が、一宗の範囲を超えて行えます。
- ・他宗派、他の仏教系支援団体の情報を得ることができます
- ・一般の検索サイトでは得られない情報を得ることが可能になります。
- ・「地域別」や「活動種別」といったカテゴリー別に、身近な寺院や団体の活動状況を知ることができます。

17

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑦

◎ご登録、利用して頂くことで期待できるメリット2

・ご登録して頂いた皆様にとって、例えばイベントの告知やボランティアの募集等、日頃の活動を紹介する場とすることが出来ます。

・情報共有によって

それらの機会を通じて日常からの緩やかな「繋がり」を持つことで、非常時における連携・協働体制をとることが可能になります。

18

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑧

◎ご登録、利用して頂くことで期待できるメリット3

・誰でも利用閲覧可能であり、一般社会に向け情報を公開することで、地域や社会へ「仏教の活動」内容を知って頂くことで、広報的な価値が生まれます。

※仏教者の社会活動の実践に関心のある市民にとっても、「〇〇宗」や「△△教団」ではなく、広く「仏教」や「宗教」の括りで理解する事が可能になります。

19

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑨

◎ご登録、利用して頂くことで期待できるメリット4

・プラットフォームの構築が、社会に向け「仏教の活動」を広く伝えることにより、地域の行政機関や社会福祉協議会、社会福祉法人、あるいは一般のNPO団体等との信頼関係を作るきっかけになります。

・その成果として
非常時の際に速やかに連絡を取り合えるような関係性を確保する事も可能となります。

20

「仏教社会的実践活動プラットフォーム」⑩

◎ご登録、利用して頂くことで期待できるメリット5

・これらのメリットを確かなものとしていく為に、より多くの皆様のご登録、ご参加が必要不可欠です。

・この「仏教プラットフォーム」は、皆様に利用して頂く事で、はじめて社会の中に根付き育つことが出来ると考えております。

まずは、ホームページを開いてください

21

おわりに

・東日本大震災を通じて、明らかになったことがありました。

「非常時に出来ることは、あくまで平常時の延長線上にしかない」
多くの方々から、この考え方に同意いただきました。

・その「平常時」から行える情報共有の場として
2017年3月に開設した

「仏教プラットフォーム」につきまして、ご理解ご協力の程、何卒よろしくお願い致します。

22